

延永ヤヨミ園遺跡 2
福原長者原遺跡 2
福富侍島遺跡

行橋市文化財調査報告書 第72集

2024

行橋市教育委員会

延永ヤヨミ園遺跡 2
福原長者原遺跡 2
福富侍島遺跡

行橋市文化財調査報告書 第72集

2024

行橋市教育委員会



延永ヤヨミ園遺跡第13次調査空中写真（北西から）



延永ヤヨミ園遺跡第6次調査全景（南から）

序 文

本書は個人住宅建設に先立ち実施した発掘調査の報告書です。本書で報告する遺跡は4次にわたる延永ヤヨミ園遺跡、福原長者原遺跡、福富侍島遺跡の調査について詳細を記しています。

延永ヤヨミ園遺跡は行橋市大字吉国、延永に連なる丘陵に展開する遺跡です。東九州自動車道建設に先立つ発掘調査によって『類聚三大格』に記された古代の湊「草野津」であることが分かっています。当遺跡は令和5年度現在で15次にわたる調査を実施していますが、本書で報告するのは5・6・7・13次調査です。うち6・7・13次は隣接地での発掘調査であり、草野津に関連するとみられる大型掘立柱建物跡を複数確認しました。

福原長者原遺跡は行橋市南泉二丁目地内の低台地上に広がる遺跡です。東九州自動車道建設に先立つ発掘調査で明らかとなった国指定史跡「福原長者原官衙遺跡」もこの遺跡内にあります。本報告では官衙に関連する遺構や遺物はなく、遺構密度も低いものでしたが、それまで周知の埋蔵文化財包蔵地外とされていた区域にて遺跡を確認したことは大きな成果と言えるでしょう。

福富侍島遺跡は西泉七丁目に所在する遺跡で、京都平野を北流する今川の右岸に位置する丘陵上に広がります。これまで周知の埋蔵文化財包蔵地として把握されていましたが、確認調査や発掘調査の実績が全くなく、遺跡の概要も不明なままでした。それが今回の発掘調査により初めて詳細な情報を得ることができました。

本書が今後の埋蔵文化財行政の理解と発展にとって広く活用されることを願います。また、本書の調査において福岡県教育委員会、九州歴史資料館の職員の方々や地元住民の皆様に多大なご協力をいただきましたことを深く感謝いたします。

令和6年3月

行橋市教育委員会

教育長 長尾 明美

例 言

1. 本書は福岡県行橋市大字吉国 564 番地に所在する延永ヤヨミ園遺跡第 5 次調査（平成 29 年度）、同 533 番地外に所在する延永ヤヨミ園遺跡第 6・7・13 次調査（平成 29・平成 31・令和 4 年度）、南泉一丁目 140 番 5 外に所在する福原長者原遺跡第 11 次調査（令和 2 年度）、西泉七丁目 1108 番 6 に所在する福富侍島遺跡（令和 2 年度）の発掘調査報告書である。国庫補助、県費補助を受け発掘調査を実施した。
2. 調査および報告書作成は行橋市教育委員会が主体となって実施した。調査組織は第 1 章第 5 節に記す。
3. 遺構の実測は笠置拓也、木村玉美、田中すま子、中島裕子、振旗美苗が行った。
4. 遺構写真は笠置が撮影した。
5. 遺構図の整理は笠置が行った。
6. 遺物の接合は枝吉恵美、鎌田尚子、河田まき子、定野美津子、所村裕香、中川美登里、畠田恵、松本まゆみが行った。
7. 遺物の実測は笠置、河田、所村、中川、畠田が行った。
8. 遺物写真は笠置が撮影した。
9. 遺構、遺物図面の浄書は奥野康代、河田、所村、中川、畠田、松尾留衣が行った。
10. 本書に使用した遺構の略号は SI（竪穴建物）、SB（掘立柱建物）、SK（土坑）、SE（井戸）、SD（溝）、SP（柱穴）である。
11. 本書に使用した方位は世界測地系に基づく座標北である。
12. 報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会にて保管している。
13. 本書の執筆は笠置拓也が行い、奥野、松尾が編集した。
14. 本書に報告した遺跡の発掘調査および整理作業にあたり多くの方々の指導、助言、協力を頂いた。記して謝意を表す。

福岡県教育委員会 城門義廣氏、行橋市歴史資料館前館長 宇野愼敏氏、九州歴史資料館 吉田東明氏・宮地聡一郎氏・岸本圭氏・小嶋篤氏・岡田論氏

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 延永ヤヨミ園遺跡第5次調査	1
第2節 延永ヤヨミ園遺跡第6・7・13次調査	2
第3節 福原長者原遺跡第11次調査	3
第4節 福富侍島遺跡	5
第5節 調査体制	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 延永ヤヨミ園遺跡第5次調査	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 遺構と遺物	12
(1) 竪穴建物	12
(2) 土坑	13
(3) 井戸	14
(4) 柱穴・表採	15
第3節 結語	15
第4章 延永ヤヨミ園遺跡第6・7・13次調査	21
第1節 遺跡の概要	21
第2節 遺構と遺物	21
(1) 竪穴建物	21
(2) 掘立柱建物	31
(3) 土坑	43
(4) 柱穴	50
第3節 結語	52
第5章 福原長者原遺跡第11次調査	57
第1節 遺跡の概要	57
第2節 遺構と遺物	58
(1) 掘立柱建物	58
(2) 土坑	59
(3) 溝	60
第3節 結語	61
第6章 福富侍島遺跡	62
第1節 遺跡の概要	62
第2節 遺構と遺物	62
(1) 竪穴建物	62
(2) 土坑	63
(3) 柱穴・表採	68
第3節 結語	68

図版目次

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|--------------------------|
| 巻頭図版 | 延永ヤヨミ園遺跡第13次調査空中写真(北西から) | 図版 17 | 1. 6次調査 SK2 遺物出土状況(南東から) |
| 巻頭図版 | 延永ヤヨミ園遺跡第6次調査全景(南から) | | 2. 6次調査 SK3 完掘状況(南東から) |
| 図版 1 | 航空写真(延永ヤヨミ園遺跡の位置) | 図版 18 | 3. 7次調査 SK4 完掘状況(南西から) |
| 図版 2 | 航空写真(福原長者原遺跡、福富侍島遺跡の位置) | | 1. 7次調査 SK5 遺物出土状況(南東から) |
| 図版 3 | 1. 延永ヤヨミ園遺跡第5次調査全景(西から) | | 2. 7次調査 SK6 完掘状況(北西から) |
| | 2. SI1 完掘状況(北西から) | 図版 19 | 3. 7次調査 SK7 完掘状況(北東から) |
| | 3. SK1 完掘状況(西から) | 図版 20 | 出土遺物3 |
| 図版 4 | 1. SK2 完掘状況(西から) | 図版 21 | 出土遺物4 |
| | 2. SE1 遺物出土状況1(南から) | 図版 22 | 出土遺物5 |
| | 3. SE1 遺物出土状況2(南から) | 図版 23 | 出土遺物6 |
| 図版 5 | 1. SE1 土層観察状況(南から) | 図版 24 | 出土遺物7 |
| | 2. SE1 遺物出土状況3(南から) | | 1. 福原長者原遺跡第11次調査全景(南西から) |
| | 3. SE1 完掘状況(南から) | | 2. SB1 完掘状況(北から) |
| 図版 6 | 出土遺物1 | | 3. SK1 遺物出土状況(北東から) |
| 図版 7 | 出土遺物2 | 図版 25 | 1. SK2 完掘状況(南東から) |
| 図版 8 | 1. 延永ヤヨミ園遺跡第6次調査全景1(北から) | | 2. SD1 完掘状況(南東から) |
| | 2. 延永ヤヨミ園遺跡第6次調査全景2(北西から) | | 3. SD2 完掘状況(南東から) |
| | 3. 延永ヤヨミ園遺跡第6次調査全景3(南東から) | | 4. 出土遺物8 |
| 図版 9 | 1. 延永ヤヨミ園遺跡第7次調査全景(北東から) | 図版 26 | 1. 福富侍島遺跡全景(北東から) |
| | 2. 延永ヤヨミ園遺跡第13次調査全景(北東から) | | 2. SI1 土層観察状況(北東から) |
| | 3. 延永ヤヨミ園遺跡第13次調査全景空中写真(右が北東) | | 3. SI1 土層観察状況(南東から) |
| 図版 10 | 1. 13次調査 SI1、SI9 完掘状況(南から) | 図版 27 | 1. SI1 遺物出土状況(北東から) |
| | 2. 13次調査 SI2 完掘状況(南東から) | | 2. SI1 完掘状況(北東から) |
| | 3. 6次調査 SI3 完掘状況(南東から) | | 3. SK1 完掘状況(西から) |
| 図版 11 | 1. 6次調査 SI4 完掘状況(南東から) | 図版 28 | 1. SK2、SK3 完掘状況(北から) |
| | 2. 6次調査 SI5 完掘状況(南西から) | | 2. SK3 遺物出土状況(北から) |
| | 3. 7次調査 SI6 完掘状況(南東から) | | 3. SK2、SK3 土層観察状況(北東から) |
| 図版 12 | 1. 7次調査 SI7 完掘状況(北西から) | 図版 29 | 出土遺物9 |
| | 2. 7次調査 SI8 完掘状況(東から) | 図版 30 | 出土遺物10 |
| | 3. 7次調査 SI8 カマド検出状況(南から) | | |
| 図版 13 | 1. 13次調査 SB1 完掘状況(北西から) | | |
| | 2. 6次調査 SB2 完掘状況(北東から) | | |
| | 3. 6次調査 SB3 完掘状況(南東から) | | |
| 図版 14 | 1. 6次調査 SB4 完掘状況(北西から) | | |
| | 2. 7次調査 SB4 完掘状況(南東から) | | |
| | 3. 7次調査 SB5 完掘状況(南東から) | | |
| 図版 15 | 1. 7次調査 SB6 完掘状況(北東から) | | |
| | 2. 13次調査 SB7 完掘状況(南東から) | | |
| | 3. 6次調査 SB8 完掘状況(南西から) | | |
| 図版 16 | 1. 13次調査 SB8 完掘状況(南西から) | | |
| | 2. 6次調査 SB9 完掘状況(南西から) | | |
| | 3. 6次調査 SK1 遺物出土状況(南東から) | | |

挿図目次

- | | |
|------|---------------------------|
| 第1図 | 延永ヤヨミ園遺跡調査区域図(1/6,000) |
| 第2図 | 福原長者原遺跡調査位置図(1/6,000) |
| 第3図 | 福原長者原遺跡調査区域図(1/2,000) |
| 第4図 | 福富侍島遺跡調査位置図(1/6,000) |
| 第5図 | 延永ヤヨミ園遺跡他の位置(1/2,000,000) |
| 第6図 | 行橋市周辺の地形分類図(1/100,000) |
| 第7図 | 行橋市の地質図(1/100,000) |
| 第8図 | 京都平野の主要遺跡分布図(1/80,000) |
| 第9図 | 延永ヤヨミ園遺跡第5次調査遺構配置図(1/80) |
| 第10図 | 5次調査 SI1 実測図(1/60) |
| 第11図 | 5次調査 SI1 出土遺物実測図(1/3) |
| 第12図 | 5次調査 SK1 実測図(1/40) |

第 13 図	5 次調査 SK1 出土遺物実測図 (1/3)	第 57 図	7 次調査 SK5 実測図 (1/40)
第 14 図	5 次調査 SK2 実測図 (1/40)	第 58 図	7 次調査 SK5 出土遺物実測図 (1/3)
第 15 図	5 次調査 SE1 実測図 (1/40)	第 59 図	7 次調査 SK6 実測図 (1/40)
第 16 図	5 次調査 SE1 出土遺物実測図 1 (1/3)	第 60 図	7 次調査 SK7 実測図 (1/40)
第 17 図	5 次調査 SE1 出土遺物実測図 2 (1/3)	第 61 図	7 次調査 SK7 出土遺物実測図 (1/3)
第 18 図	5 次調査 SP・表採出土遺物実測図 (1/3)	第 62 図	6・7・13 次調査 SP 出土遺物実測図 (1/3)
第 19 図	延永ヤヨミ園遺跡 第 6・7・13 次調査遺構配置図	第 63 図	福原長者原遺跡遺構配置図 (1/100)
第 20 図	13 次調査 SI1・9 実測図 (1/60)	第 64 図	SB1 実測図 (1/60)
第 21 図	13 次調査 SI1・9 出土遺物実測図 (1/3)	第 65 図	SB1 出土遺物実測図 (1/3)
第 22 図	13 次調査 SI2 実測図 (1/60)	第 66 図	SK1 実測図 (1/40)
第 23 図	13 次調査 SI2 出土遺物実測図 (1/3)	第 67 図	SK1 出土遺物実測図 (1/3・2/3)
第 24 図	6 次調査 SI3 実測図 (1/60)	第 68 図	SK2 実測図 (1/40)
第 25 図	6 次調査 SI3 出土遺物実測図 (1/3・2/3)	第 69 図	SD1・SD2 実測図 (1/40)
第 26 図	6 次調査 SI4 実測図 (1/60)	第 70 図	福富侍島遺跡遺構配置図 (1/100)
第 27 図	6 次調査 SI4 出土遺物実測図 (1/3)	第 71 図	SI1 土層図 (1/60)
第 28 図	6 次調査 SI5 実測図 (1/40)	第 72 図	SI1 出土遺物実測図 1 (1/3)
第 29 図	7 次調査 SI6 実測図 (1/60)	第 73 図	SI1 出土遺物実測図 2 (1/3・2/3)
第 30 図	7 次調査 SI7 実測図 (1/60)	第 74 図	SI1 出土遺物実測図 3 (1/3・2/3)
第 31 図	7 次調査 SI8 実測図 (1/40・1/60)	第 75 図	SK1 実測図 (1/40)
第 32 図	7 次調査 SI8 出土遺物実測図 (1/3)	第 76 図	SK2・SK3 実測図 (1/60)
第 33 図	6・13 次調査 SB1 実測図 (1/60)	第 77 図	SK2 出土遺物実測図 (1/3)
第 34 図	13 次調査 SB1 出土遺物実測図 (1/3)	第 78 図	SK3 出土遺物実測図 (1/3)
第 35 図	6 次調査 SB2 実測図 (1/60)	第 79 図	SP・表採出土遺物実測図 (1/3)
第 36 図	6 次調査 SB3 実測図 (1/60)		
第 37 図	6 次調査 SB3 出土遺物実測図 (1/3)		
第 38 図	6・7 次調査 SB4 出土遺物実測図 (1/3)		
第 39 図	6・7 次調査 SB4 実測図 (1/60)		
第 40 図	7 次調査 SB5 実測図 (1/60)		
第 41 図	7 次調査 SB6 実測図 (1/60)		
第 42 図	13 次調査 SB7 実測図 (1/60)		
第 43 図	13 次調査 SB7 出土遺物実測図 (1/3)		
第 44 図	6・13 次調査 SB8 実測図 (1/60)		
第 45 図	6・13 次調査 SB8 出土遺物実測図 (1/3)		
第 46 図	6 次調査 SB9 実測図 (1/40)		
第 47 図	6 次調査 SB9 出土遺物実測図 (1/3)		
第 48 図	6 次調査 SK1 実測図 (1/40)		
第 49 図	6 次調査 SK1 出土遺物実測図 (1/3)		
第 50 図	6 次調査 SK2 実測図 (1/40)		
第 51 図	6 次調査 SK2 出土遺物実測図 1 (1/3)		
第 52 図	6 次調査 SK2 出土遺物実測図 2 (1/3)		
第 53 図	6 次調査 SK2 出土遺物実測図 3 (1/3)		
第 54 図	6 次調査 SK3 実測図 (1/40)		
第 55 図	6 次調査 SK3 出土遺物実測図 (1/3・2/3)		
第 56 図	6・7 次調査 SK4 実測図 (1/40)		

表 目 次

表 1	延永ヤヨミ園遺跡の調査次数一覧
表 2	福原長者原遺跡の調査次数一覧
表 3	出土遺物観察表
表 4	出土遺物観察表
表 5	出土遺物観察表
表 6	出土遺物観察表
表 7	出土遺物観察表
表 8	出土遺物観察表
表 9	出土遺物観察表
表 10	出土遺物観察表
表 11	出土遺物観察表

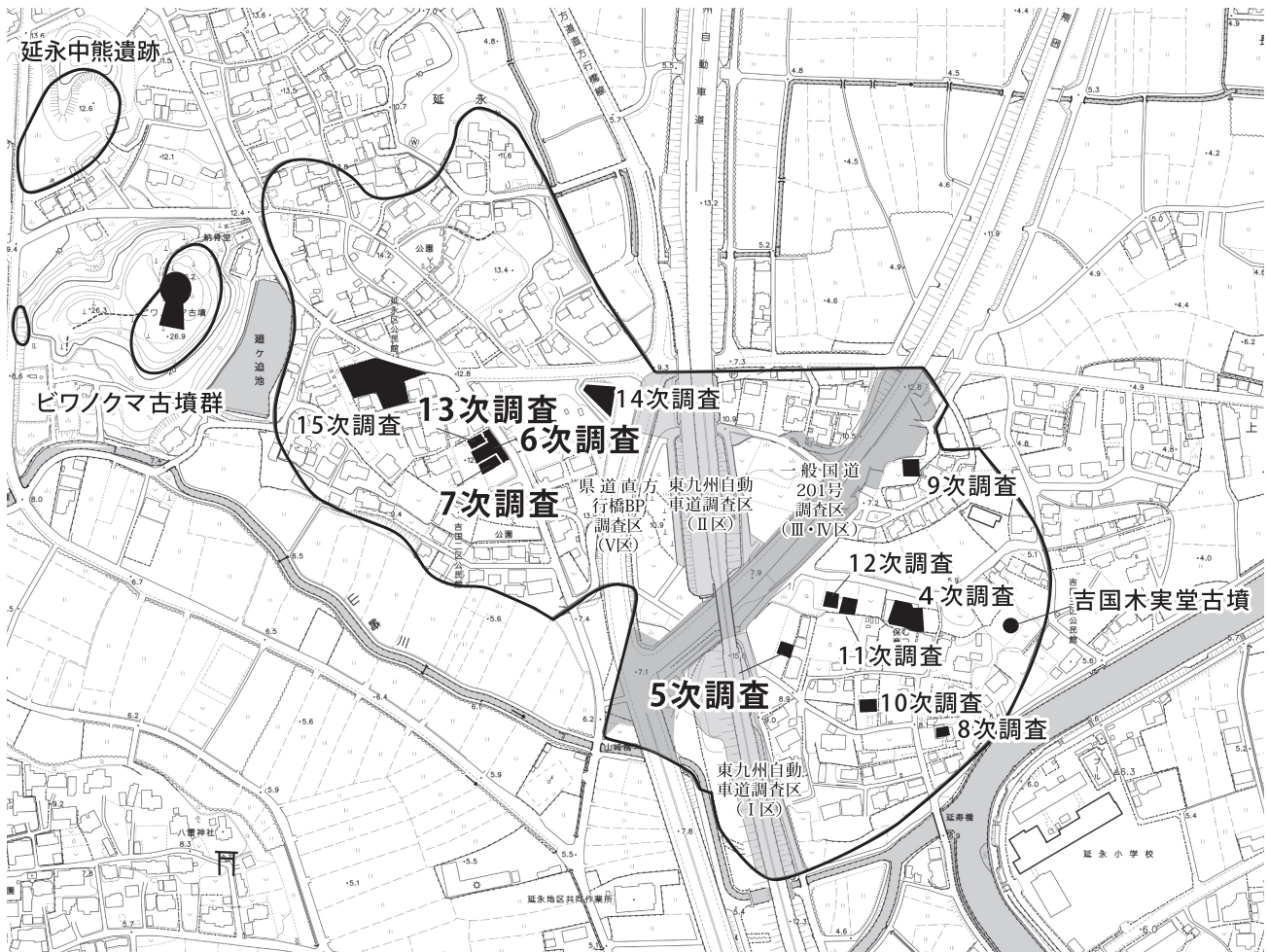
第1章 調査の経緯と経過

第1節 延永ヤヨミ園遺跡 第5次調査

平成28年12月、当地にて個人住宅建設の計画が寄せられたため、同年12月7日に確認調査を実施した。その結果、遺構および遺物を確認した。建設業者と協議した結果、住宅基礎掘削により遺跡の保護を図ることができないと判断したため記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は国費及び県費を用い、行橋市教育委員会が主体となって実施した。平成29年5月30日に調査開始、同6月9日に調査を終了し、令和5年度に本格的な整理作業を実施した。なお、延永ヤヨミ園遺跡における調査次数は表1に示すとおりとする。また、各調査地は第1図に示すとおりである。

表1 延永ヤヨミ園遺跡の調査次数一覧

調査次数	調査主体	事業名	調査担当	調査区	調査報告書
第1次	国土交通省 北九州国道事務所	一般国道201号 行橋インター関連	城門義廣 進村真之	Ⅲ-C	九州歴史資料館2013『延永ヤヨミ園遺跡-Ⅲ区Ⅰ-』 一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財 調査報告第1集
			大庭孝夫 城門義廣 下原幸裕	Ⅳ-A・B	九州歴史資料館2015『延永ヤヨミ園遺跡-Ⅳ区Ⅰ-』 一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財 調査報告第3集
			大庭孝夫 下原幸裕 進村真之	Ⅳ-B・C	九州歴史資料館2015『延永ヤヨミ園遺跡-Ⅳ区Ⅱ-』 一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財 調査報告第4集
			大庭孝夫 城門義廣 吉村靖徳	Ⅲ-A～C	九州歴史資料館2015『延永ヤヨミ園遺跡-Ⅲ区Ⅱ-』 一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財 調査報告第5集
第2次	西日本高速道路株式会社 福岡工事事務所	東九州自動車道 関係	城門義廣	Ⅱ-1	九州歴史資料館2012『延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ』 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告(2)
			飛野博文	Ⅰ-1～7	九州歴史資料館2013『延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区』の調査1』 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告(9)
			城門義廣	Ⅱ-2～4	九州歴史資料館2014『延永ヤヨミ園遺跡Ⅱ区2』 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告(11)
			飛野博文	Ⅰ-1～7	九州歴史資料館2015『延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ区』の調査2』 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告(18)
第3次	福岡県京築 県土整備事務所	県道直方行橋線 道路改良事業	岡田諭 小澤佳憲 宮地聡一郎	V-1～3	九州歴史資料館2013『延永ヤヨミ園遺跡-V-1・2・3区』 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告(2)
			飛野博文 宮地聡一郎	V-4～7	九州歴史資料館2012『延永ヤヨミ園遺跡Ⅰ』 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告(2)
第4次	社会福祉法人 行橋むつみ会	保育園園舎建設	中原博	—	延永ヤヨミ園遺跡 行橋市文化財調査報告書第65集
第5次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	—	本書
第6次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	—	本書
第7次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	—	本書
第8次	社会福祉法人 行橋むつみ会	学童保育建設	笠置拓也	—	未報告
第9次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	—	未報告
第10次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	—	未報告
第11次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	—	未報告
第12次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	—	未報告
第13次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	—	本書
第14次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	—	未報告
第15次	株式会社みやげ商会	宅地造成	笠置拓也 天野正太郎	—	未報告



第1図 延永ヤヨミ園遺跡調査区域図 (1/6,000)

第2節 延永ヤヨミ園遺跡 第6・7・13次調査

平成28年11月15日、当該地の宅地化に伴い掘削工事を実施するとの連絡が市文化課に寄せられたため至急現地へ赴いたところ、既に開発業者がバックホーを手配し、まさに掘削を開始しようとしていたところであった。開発業者の承諾を得て、そのバックホーを用いて確認調査を実施したところ、遺構を確認したため現地協議のうえ工事を一時中断することになった。その後、平成29年1月に当該地を宅地化して北側、中央、南側の3区画に分割した後にそれぞれ個人住宅を建設するとの計画が寄せられたため、平成29年1月31日、改めて住宅建設予定地の確認調査を実施し、その結果、当該地全体に遺構が分布していることを確認した。住宅基礎掘削や駐車場用地確保のための掘削により遺跡の保護を図ることができないため各区画で住宅建設の際は記録保存のための発掘調査を実施することになった。6・7・13次調査いずれも国費及び県費を用い、行橋市教育委員会が主体となって実施した。

6次調査地は3区画のうち中央の区画に当たる。調査区の東端が市道に沿って南北に張り出すため平面形がT字形を呈するが、これは当該地における住宅建設工事の際、クレーン車等が停車するスペースを確保するため市道側を全体的に削平する必要があったからである。6次調査は平成29年7月26日に開始、同年9月8日に終了した。

7次調査地は6次調査地の南側区画である。個人住宅建設の計画が寄せられたが、先述の確認調査にて遺構を確認していたため記録保存のための発掘調査を実施した。平成31年4月8日より調査開始、同年4月28日に調査を終了した。

13次調査地は6次調査地の北側区画である。令和4年3月に個人住宅建設の計画が寄せられたが、先述の確認調査にて遺構を確認していたため記録保存のための発掘調査を実施した。令和4年5月27日より調査開始、同年6月20日に調査を終了した。

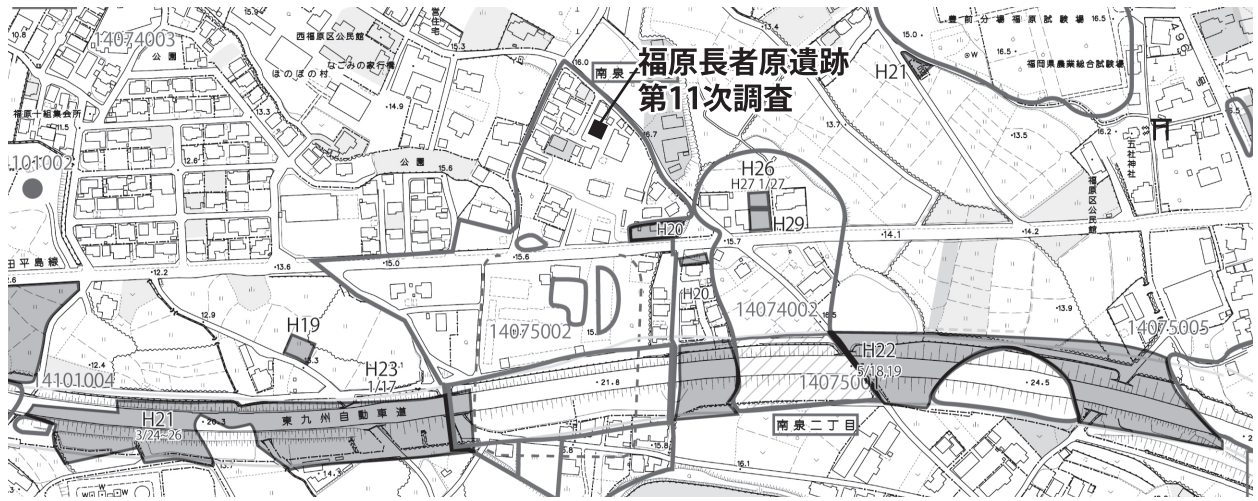
以上、3区画は調査年度に開きがあるが、いずれの区画も住宅建設の可能性があり、かつ発掘調査となる可能性が非常に高かったため、3区画の発掘調査終了後に一括して報告するものである。遺物の復元等は各調査終了時に実施しており、令和5年度に本格的な整理作業を実施した。

第3節 福原長者原遺跡 第11次調査

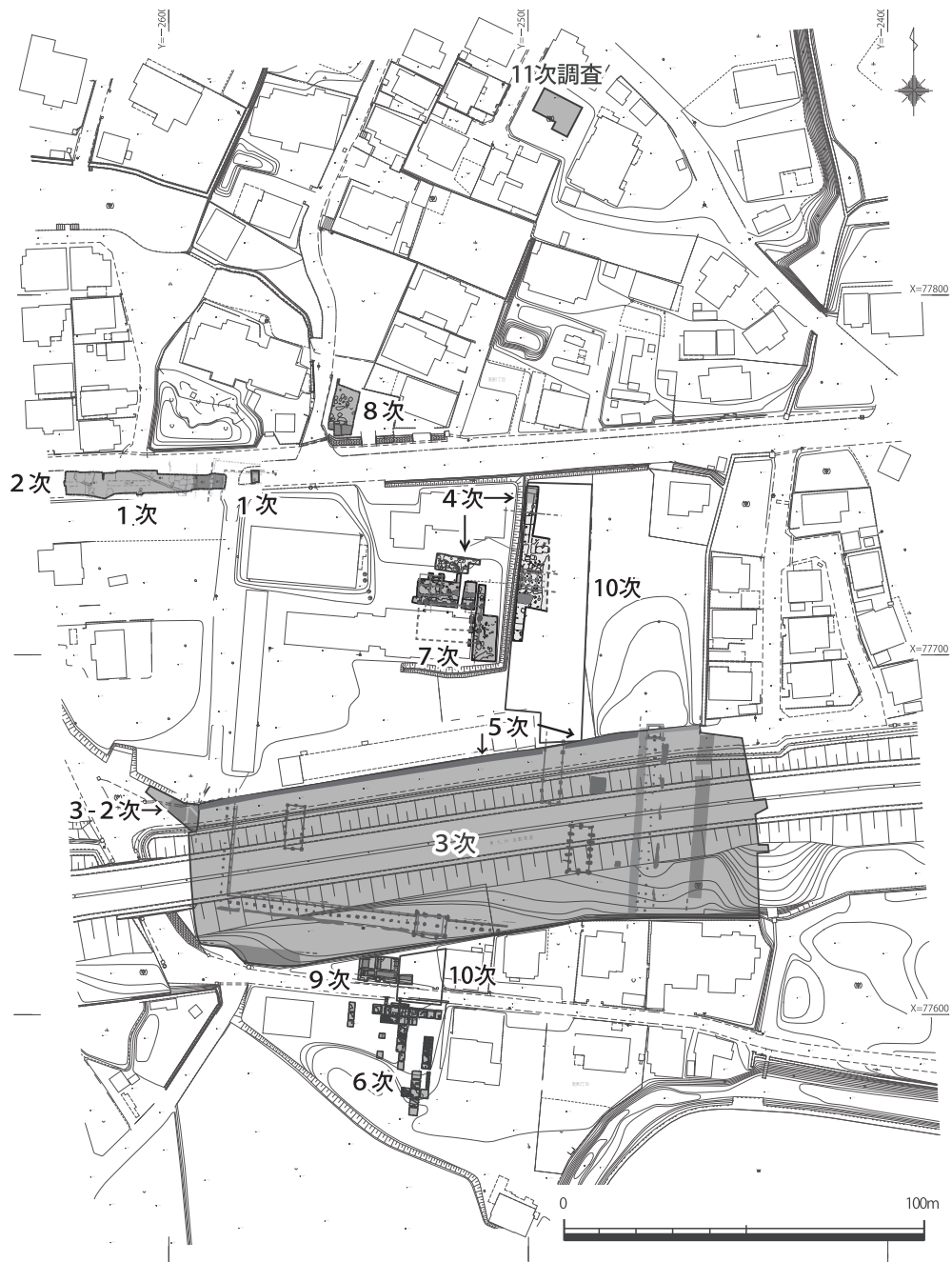
令和2年7月に個人住宅建設の計画が寄せられたため、同年7月16日に確認調査を実施した。その結果、遺構を確認したため建設業者と協議したところ、住宅基礎掘削の際、十分な保護層を確保することができないと判断したため記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は国費、県費を用い、行橋市教育委員会が主体となって実施した。令和2年8月7日に調査開始、同年8月26日に調査を終了し、令和5年度に本格的な整理作業を実施した。なお、福原長者原遺跡における調査次数は表2に示すとおりである。また、各調査地は第3図に示すとおりである。

表2 福原長者原遺跡の調査次数一覧

調査次数	調査主体	事業名	調査担当	調査報告書
第1次	福岡県教育委員会	県道長尾稗田平島線 拡幅	飛野博文	福岡県教育委員会 2000『寄原遺跡・福原長者原遺跡』
第2次	福岡県教育委員会	県道長尾稗田平島線 拡幅	小池史哲	
第3次	福岡県教育委員会 九州歴史資料館	東九州自動車道建設	秦 憲二 岡 田諭 大里弥生 松崎友理	九州歴史資料館 2014『福原長者原遺跡』
第3-2次	九州歴史資料館	東九州自動車道建設	伊藤昌広	
第4次	行橋市教育委員会	範囲内容確認調査	中原 博	行橋市教委育委員会 2016『福原長者原遺跡』 - 福岡県行橋市南泉所在古代官衙遺跡の調査 -
第5次	行橋市教育委員会	範囲内容確認調査	中原 博	
第6次	行橋市教育委員会	範囲内容確認調査	中原 博	
第7次	行橋市教育委員会	範囲内容確認調査	中原 博	
第8次	行橋市教育委員会	範囲内容確認調査	中原 博	
第9次	行橋市教育委員会	範囲内容確認調査	中原 博	
第10次	行橋市教育委員会	範囲内容確認調査 (地中レーダー探査)	中原 博	
第11次	個人	個人住宅建設	笠置拓也	



第2図 福原長者原遺跡調査位置図 (1/6,000)



第3図 福原長者原遺跡調査区域図 (1/2,000)

第4節 福富侍島遺跡

周知の埋蔵文化財包蔵地「福富侍島遺跡」は西泉七丁目にある県営団地が広がる丘陵上である。宅地造成に際して試掘調査や発掘調査は実施されておらず、遺跡の詳細については不明であった。現地在住の古老によれば住宅建設の際に土器が大量に出土したということである。令和3年1月、この県営団地の1画にて個人住宅建設の計画が寄せられたため、同年1月15日に確認調査を実施した。その結果、遺構を確認した。建設業者と協議した結果、遺跡の保護を図ることが困難であったため、発掘調査を開始した。発掘調査は国費、県費を用い、行橋市教育委員会が主体となって実施した。令和3年2月9日に調査開始、同年3月9日に調査を終了し、令和5年度に本格的な整理作業を実施した。

以上、本報告書では平成29年度から令和4年度までの期間に実施した発掘調査のうち6地点の調査内容について報告する。なお、本書名にある「延永ヤヨミ園遺跡2」は『延永ヤヨミ園遺跡（行橋市文化財調査報告書第65集 2019）』に次ぐもの、「福原長者原遺跡2」は『福原長者原遺跡（行橋市文化財調査報告書第58集 2016）』に次ぐものである。



第4図 福富侍島遺跡調査位置図 (1/6,000)

第5節 調査体制

各調査における調査体制は以下のとおり。

調査

		延永ヤヨミ園遺跡 第5次調査 (平成29年度)	延永ヤヨミ園遺跡 第6次調査 (平成29年度)	延永ヤヨミ園遺跡 第7次調査 (平成31年度)	福原長者原遺跡 第11次調査 (令和2年度)	福富侍島遺跡 (令和2年度)	延永ヤヨミ園遺跡 第13次調査 (令和4年度)
総括	教育長	笹山忠則	笹山忠則	笹山忠則(4月まで) 長尾明美(1月から)	長尾明美	長尾明美	長尾明美
	教育長職務代理者	—	—	末次龍一(5月から 12月まで)	—	—	—
	教育部長	米谷友宏	米谷友宏	米谷友宏	米谷友宏	米谷友宏	辛嶋千恵子
	教育部参事	—	—	寺尾一紀	—	—	—
	教育部文化課長	森 雅代	森 雅代	小川秀樹	辛嶋智恵子	辛嶋千恵子	小川秀樹
調査	教育部文化課参事	小川秀樹	小川秀樹	—	小川秀樹	小川秀樹	—
	教育部文化課文化財保護係長	小川秀樹(兼務)	小川秀樹(兼務)	山口裕平	山口裕平	山口裕平	山口裕平
庶務	教育部文化課文化財保護係	山口裕平 天野正太郎 笠置拓也(調査担当)	山口裕平 天野正太郎 笠置拓也(調査担当)	天野正太郎 笠置拓也(調査担当)	天野正太郎 笠置拓也(調査担当)	天野正太郎 笠置拓也(調査担当)	天野正太郎 笠置拓也(調査担当)
	文化振興係長	吉兼三佳	吉兼三佳	吉兼三佳	吉兼三佳(7月まで) 石井 匠(8月から)	石井 匠	石井 匠
	文化振興係	濱岡絵美子 入生佳奈 田坂 彩	濱岡絵美子 入生佳奈 田坂 彩	姫野和彦 長尾萌佳	久篠英司 長尾萌佳	久篠英司	藤井志乃 長尾萌佳

整理(令和5年度)

総括	教育長	長尾明美
	教育部長	井上淳一
	教育部文化課長	増田昇吾
調査	教育部文化課文化財保護係長	山口裕平
	教育部文化課文化財保護係	天野正太郎 笠置拓也(報告書担当)
庶務	文化振興係長	石井匠
	文化振興係	藤井志乃 高木捺希

発掘調査作業員

赤波江静代 安藤隆弘 岩永成美 大村英幸 緒方景俊 小野田トミエ 加来啓子 菊池忠夫 木下達也
木村玉美 志水ゆき子 田中和雅 田中すま子 中島裕子 原國昭 松崎幸子 山田拓三 山本要二

整理作業員

枝吉恵美 奥野康代 河田まき子 鎌田尚子 定野美津子 所村裕香 中川美登里 松尾留衣 松本まゆみ
畠田 恵

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に位置する（第5図）。この地域は明治23年（1890）の郡制公布で置かれた京都郡、築上郡の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口72,586人（令和6年1月末日現在）を擁す。市域は東に周防灘を望む京都平野の中央部を占める。この平野は律令制以降、上述の郡制公布まで置かれた京都郡、仲津郡、築城郡の3つの郡域にまたがるが、行橋市は市の北側が旧京都郡域、南側が旧仲津郡域にあたる。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と市町境を画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定天然記念物平尾台の石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、靦山〔121.7m〕など少数の独立山塊がある。市内には霊峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長峽川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、周防灘に注ぐ。

第2節 歴史的環境

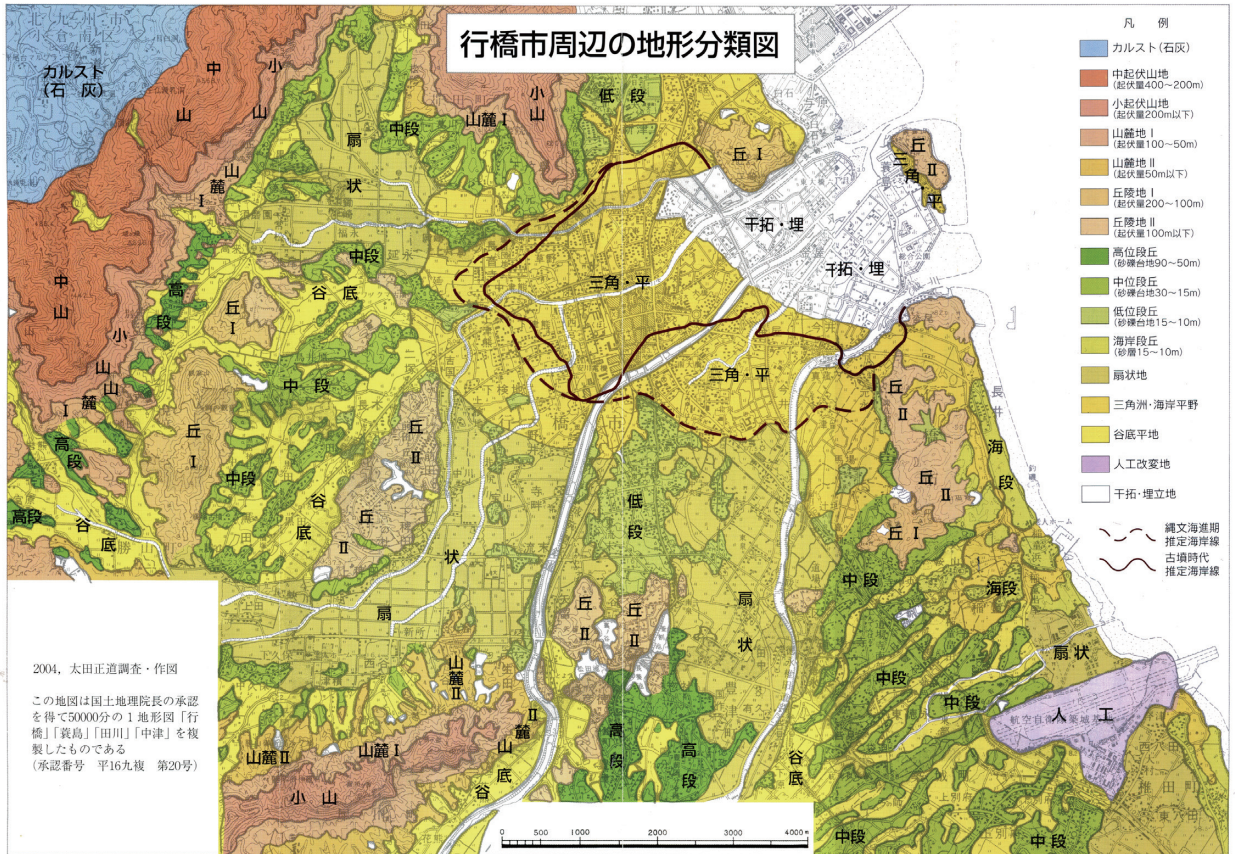
京都平野における人類の足跡は、今から約3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼる。市域では渡築紫遺跡C区で、該期の尖頭状石器、台形様石器、削器、剥片などが火山灰層からまとまって出土し、石器製作を行っていた跡と考えられる。このほか鬼熊遺跡、入覚大原遺跡などで旧石器が見つかっている。

続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは中期の約4800年前頃で、現在の延永―津熊―大橋―今井―津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸から昭和時代の干拓によって、葦島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第5図）。市域の縄文時代の様相は発掘事例が少なくあまり明確ではないが、当時の今川河口部に近い宝山に貝塚が存在した。遺構は福原長者原遺跡、長井丸尾遺跡で後期の住居跡が1軒ずつ確認されているにすぎないが、土器は早期の押型文土器、前期の曾畑式土器、轟B式土器、後期の西平式系土器、石器は早期のトロトロ石器、後期の大型打製石斧など各期の遺物が徐々に知られるようになってきた。

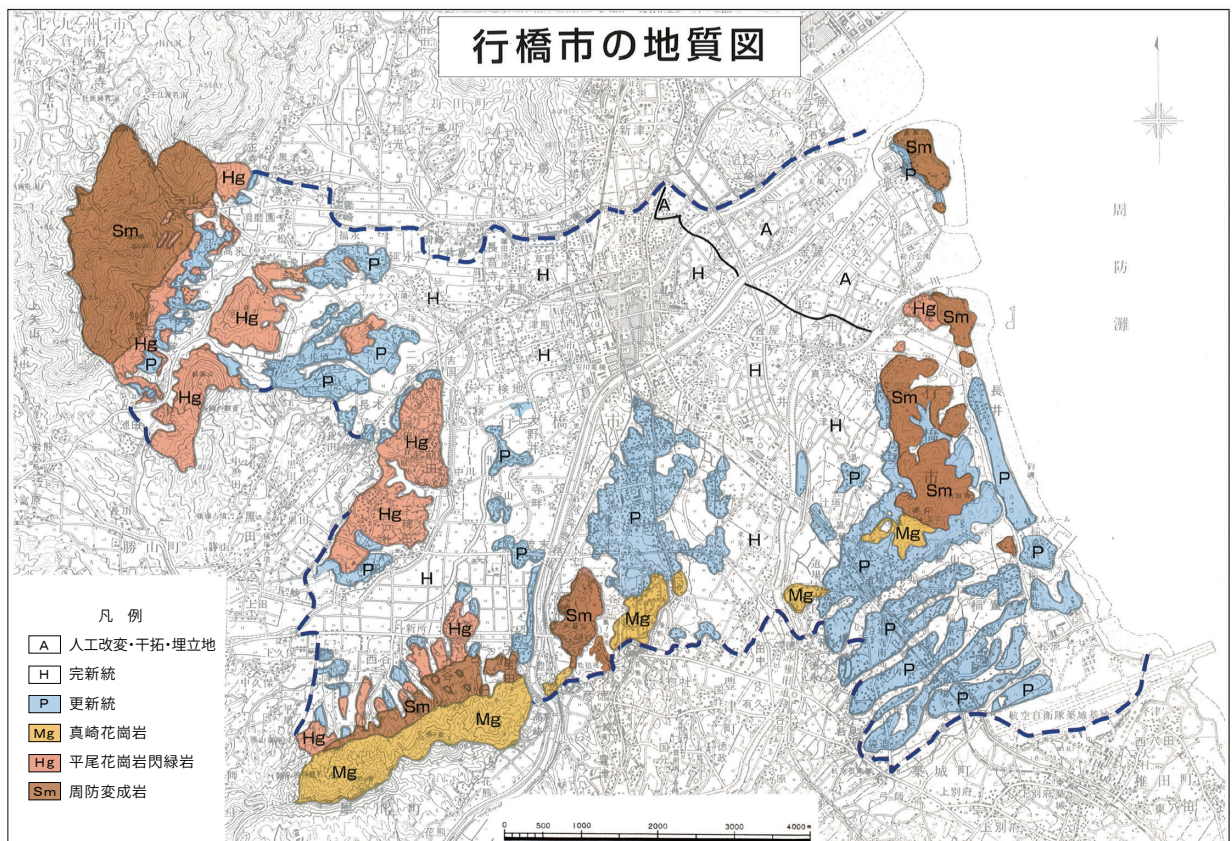
2600年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稲作農耕とする弥生時代へと変化して



第5図 延永ヤヨミ園遺跡他の位置（1/2,000,000）



第6図 行橋市周辺の地形分類図 (1/100,000)



第7図 行橋市の地質図 (1/100,000)

いく。弥生時代の遺跡は早期より見られ、夜臼式土器や続く前期初頭の板付Ⅰ式土器が出土する長井遺跡や辻垣遺跡群がある。近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査で確認された矢留堂ノ前遺跡では前期の環濠集落が見つかった。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下稗田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。なかでも下稗田遺跡では竪穴住居やそれに伴う多くの貯蔵穴が発掘された。谷部の湿地帯では木製農具も見つかっており、石斧や石庖丁、石剣などの多くの石器も見された。貯蔵穴からは炭化したコメに加え、淡水産や海水産の貝殻、魚骨なども見つかっており、稲作を行いながら、狩猟、採集、漁撈と多様な生活様式であったことが分かる。代わって後期の遺跡には下崎ヒガンデ遺跡、代遺跡などが知られる。後期末から古墳時代への過渡期は、いわゆる『魏志倭人伝』に見られる「邪馬台国」の時代であり、京都平野にも「国」があったと想定される。その国の中心集落（国邑）の第一候補が延永ヤヨミ園遺跡である。調査した範囲のみで200軒程の竪穴住居があり、一定の区画を囲んだ居館の存在も想定されている。延永ヤヨミ園遺跡は内海に面しており、瀬戸内海を介して近畿や瀬戸内地方との交流拠点であったとも考えられる。

京都平野における本格的な古墳時代は、3世紀末～4世紀初頭頃に三角縁神獣鏡を副葬した石塚山古墳（苅田町）の築造に始まる。その後、平野内の首長墓の系列は4世紀末頃のビワノクマ古墳、5世紀前半の御所山古墳（苅田町）、5世紀末の番塚古墳（同）と続き、6世紀には八雷古墳、扇八幡古墳（みやこ町）、庄屋塚古墳（同）、箕田丸山古墳（同）が築かれる。これら最有力層の前方後円墳が築かれるのは、いずれも旧京都郡域で、その多くは各時期において豊前地域で最大級の規模を有し、旧京都郡域を拠点とする首長層が傑出した勢力を保持していたことを物語っている。一方平野の南東域を占める仲津郡域の前方後円墳出現は稲童古墳群の盟主墳である5世紀中頃の石並古墳を嚆矢とし、6世紀後半の隼人塚古墳をもって終息する。前方後円墳の築造の終息にともない、地域の首長墓は旧京都郡においては、橘塚古墳（みやこ町）、綾塚古墳（同）、旧仲津郡においては、彦徳甲塚古墳（同）、甲塚方墳（同）といった巨大な横穴式石室を内部主体とする大型の円墳や方墳に移行する。一方、6世紀頃より家父長制社会が成立し、造墓が支配者層に留まらず浸透していき、群集墳や横穴墓の築造が盛んになった。全国的にみても京都平野は古墳の宝庫であり、平尾台や観音山、視山山麓、御所ヶ岳、馬ヶ岳の山裾など平野の縁辺部に濃密に分布する。特に竹並横穴墓群は1,000基近い横穴墓が発掘調査され、未調査及び調査以前に破壊された横穴墓を加えると約1,500基の一大墳墓域である。

7世紀は古代史上の飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。8世紀前半までに京都郡に椿市廃寺、仲津郡では上坂廃寺、木山廃寺が創建され、8世紀中葉には豊前国分寺、豊前国分尼寺が創建された。またこの頃、唐や新羅との緊張関係の高まりに伴い、御所ヶ岳の北麓に全長約3kmにわたり城壁を巡らせた山城（御所ヶ谷神籠石）が築かれた。

豊前国の国府は『倭名類聚抄』に京都郡に所在すると記載されるが、比定地が確定しなかったため長く議論されてきた。みやこ町国作・惣社地区で見つかった官衙遺跡が国府跡と確定したが、この遺跡は8世紀前半以前の様相が明確でないため、東九州自動車道建設に伴い発掘調査された福原長者原官衙遺跡がこれに先行する豊前国府、あるいは豊前国と豊後国にまたがる「豊国」を支配する役所であった可能性が指摘されている。御所ヶ谷神籠石の北麓を駅路（古代官道豊前路）が東西に走り、丘陵の切り通しや発掘調査の際に遺構が確認されている。また延永ヤヨミ園遺跡で「津」墨書土器が出土し、『類聚三代格』にみえる「草野津」の所在地がほぼ確定した。



- | | | | | | |
|-------------|---------------|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 延永ヤヨミ園遺跡 | 2. 福原長者原遺跡 | 3. 福富侍島遺跡 | 4. 石塚山古墳 | 5. 番塚古墳 | 6. 御所山古墳 |
| 7. 徳永泉古墳 | 8. 黒添メウト塚古墳 | 9. 徳永丸山古墳 | 10. 徳永泉古墳 | 11. 福丸古墳群 | 12. 椿市廃寺 |
| 13. 入覚上畔遺跡 | 14. 入覚コウチ遺跡 | 15. 入覚秋光遺跡 | 16. 別所古墳 | 17. ビワノクマ古墳 | 18. 八雷古墳 |
| 19. 前田山遺跡 | 20. 下稗田遺跡 | 21. 庄屋塚古墳 | 22. 綾塚古墳 | 23. 箕田丸山古墳 | 24. 扇八幡古墳 |
| 25. 箕田丸山古墳 | 26. 金屋遺跡 | 27. 羽根木古屋敷遺跡 | 28. 崎野遺跡 | 29. 長井遺跡 | 30. 代遺跡 |
| 31. 馬場代古墳群 | 32. 辻垣下出口遺跡 | 33. 辻垣遺跡群 | 34. 隼人塚古墳 | 35. 視山城跡 | 36. 稲童古墳群 |
| 37. 渡築紫古墳群 | 38. 宝山桑ノ木遺跡 | 39. 矢留堂ノ前遺跡 | 40. ヒメコ塚古墳 | 41. 竹並遺跡 | 42. 御所ヶ谷神籠石 |
| 43. 馬ヶ岳城跡 | 44. 天生田大將陣横穴群 | 45. 甲塚方墳 | 46. 彦徳甲塚古墳 | 47. 惣社古墳 | 48. 居屋敷窯跡 |
| 49. 徳永川ノ上遺跡 | 50. 豊前国府跡 | 51. 豊前国分寺跡 | 52. 豊前国分尼寺跡 | 53. 木山廃寺 | 54. 上坂廃寺 |
| | | | | | 55. 船迫窯跡群 |

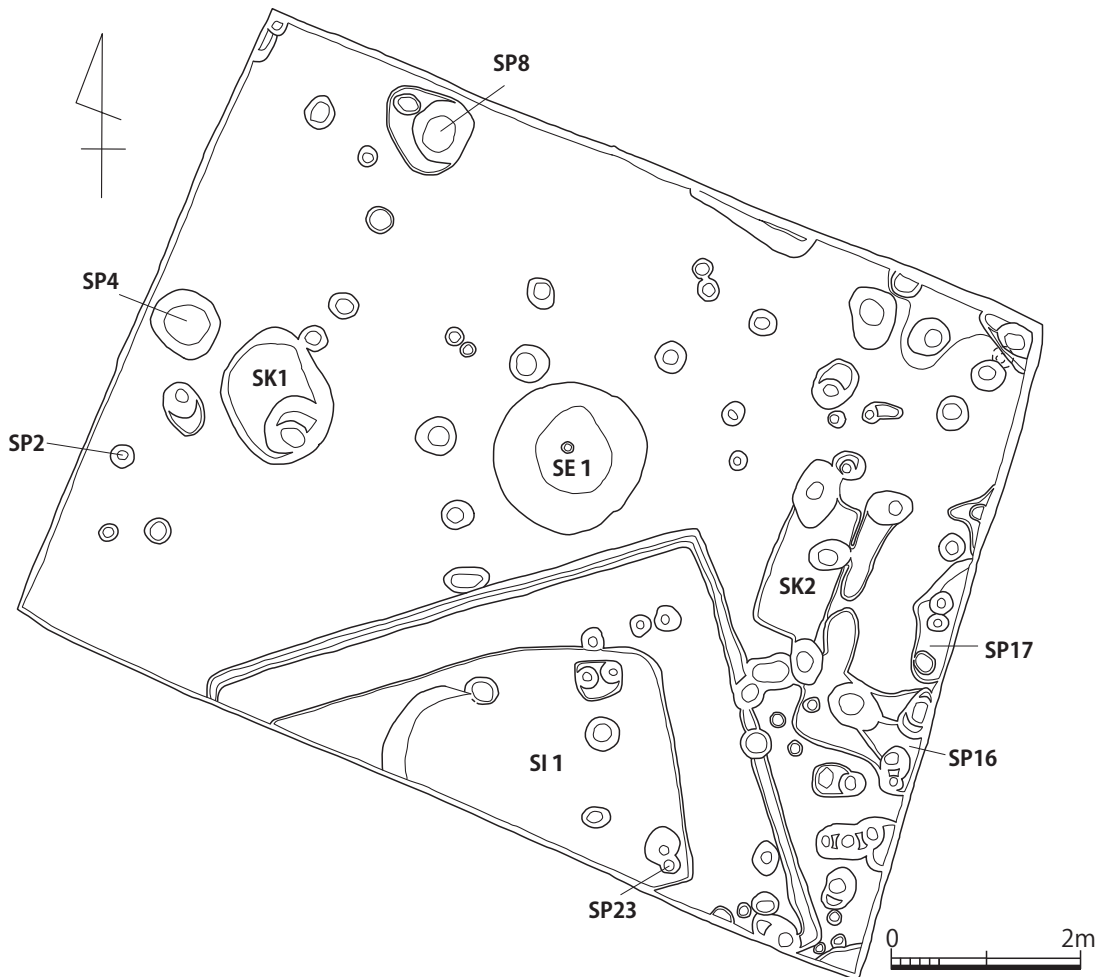
第8図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

第3章 延永ヤヨミ園遺跡 第5次調査

第1節 遺跡の概要（第9図、図版3）

平成19年度に東九州自動車道、平成20年度に国道201号、平成21年度に県道の発掘調査が開始され、丘陵部から谷部にかけて約19,000㎡が調査された。行橋市の4次調査（『行橋市文化財調査報告書第65集』2019）も含め、弥生時代終末～江戸時代初期にわたり集落等が営まれていたことが分かった。古墳時代には竪穴建物が広範囲で密集していたほか、谷部から準構造船の竪板が出土するなど海との関りの強さを示す。特筆すべきは墨書土器等の出土により当遺跡が『類聚三大格』にみえる古代の湊「草野津」であることが確定的になったことであろう。草野津は10世紀には衰退しはじめ、中世の湊はより周防灘に近い「今井津」に移っていくのだが、なお幅1～2mの区画溝に囲まれた屋敷地が多数確認されている。

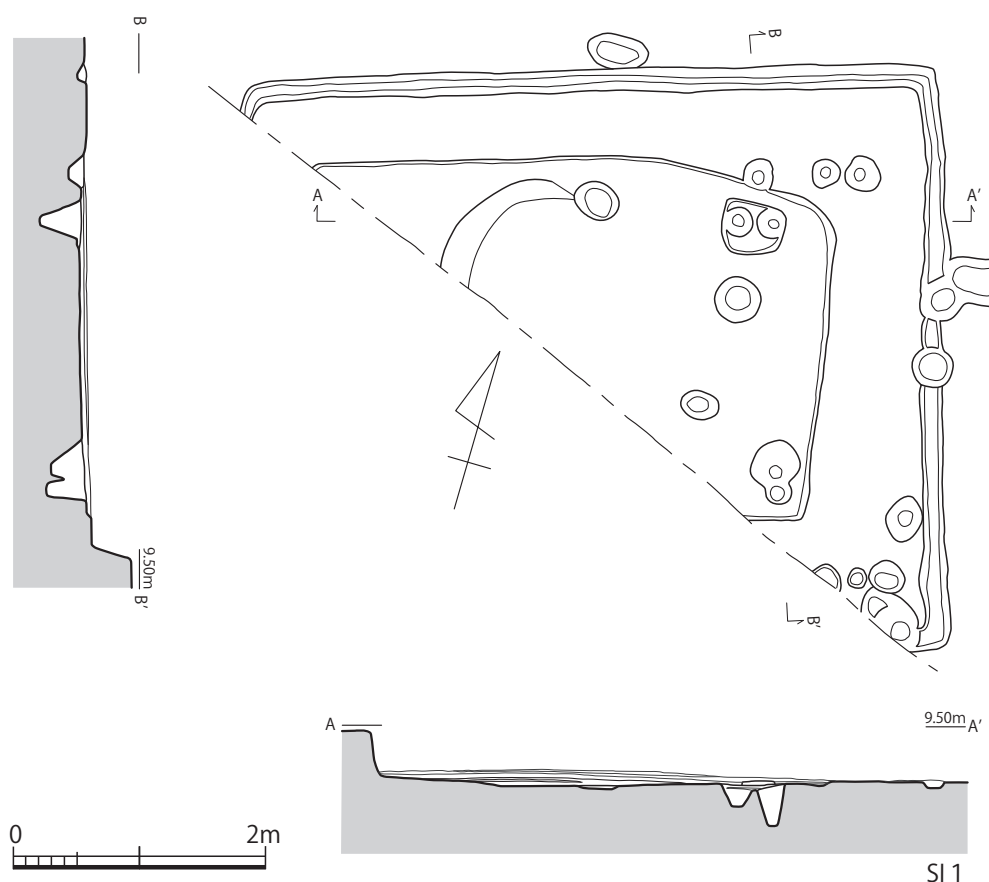
本章で述べる5次調査の主な遺構の時代は古墳時代および中世である。調査地は大字吉国564番地、調査面積は71㎡である。



第9図 延永ヤヨミ園遺跡 第5次調査遺構配置図（1/80）

第2節 遺構と遺物

(1) 竪穴建物



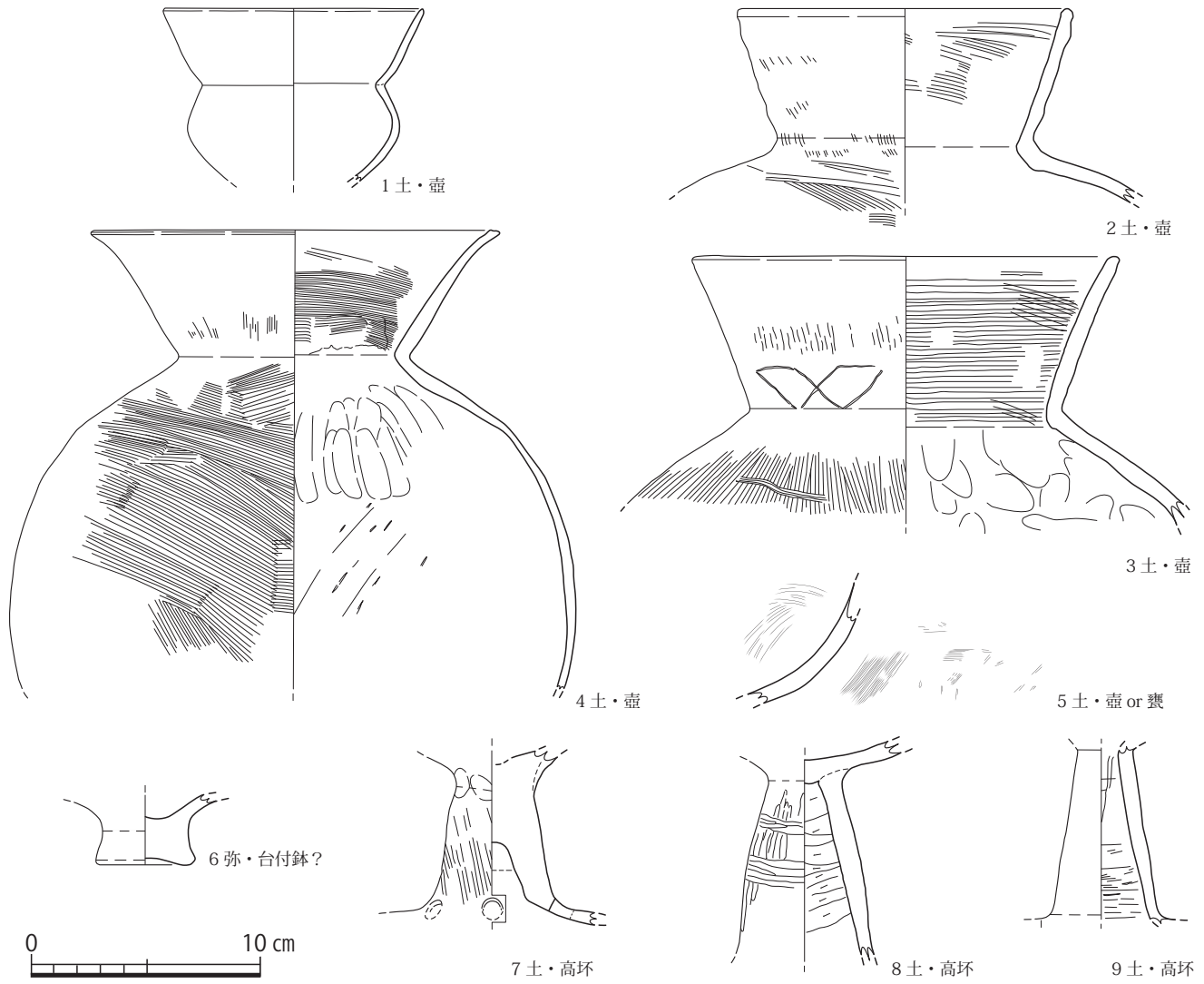
第10図 5次調査 SI1 実測図 (1/60)

SI1 (第10図、図版3)

調査区南側で平面形全体の2分の1程度を検出した。検出した東辺と北辺は調査区際で直角に曲がることから、平面形は東辺460cm、北辺550cmの長方形を呈すると考えられる。方位はN-17°-Wである。外縁には幅約15cm、深さ約5cmの壁際溝が廻り、四方にベッド状遺構を備える。ベッド状遺構の奥行は方位により様々で、西側が40cm、北側が50～80cm、東側が70～95cm、南側が90cmとなっている。主柱穴は明らかでない。出土遺物から遺構の時期は4世紀後半と考えられる。

出土遺物 (第11図、図版6)

1～4は壺である。1は頸部がく字状に屈曲し、口縁部は胴部最大径より張り出す。口縁の先端は先細る。2は口縁がわずかに内反しながら立ち上がり、端部は内側に向かってやや先細る。3は頸部がく字状に屈曲し、口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は平坦に収める。頸部には刻線による文様を施す。4は頸部がく字状に屈曲し口縁部は外反しながら立ち上がる。端部は丸く収める。5は壺もしくは甕の胴部片である。6は台付鉢の底部であろうか。底面はわずかに上げ底である。7～9は高坏脚部である。7は上半が中実であり、裾部の脚部に近い位置に透かし孔をもつ。8は脚部がやや膨らみをもつ。9は裾部に向かって直線的に開く。内面にシボリの痕跡をもち、横方向のケズリを施す。

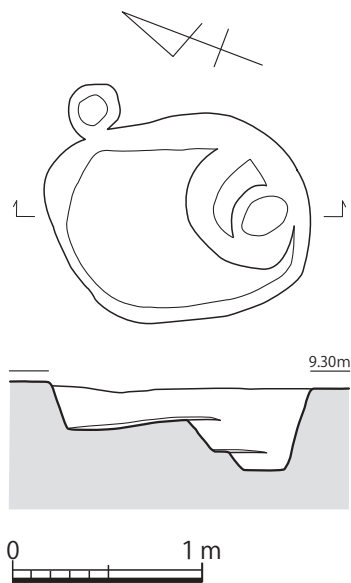


第 11 図 5 次調査 SI1 出土遺物実測図 (1/3)

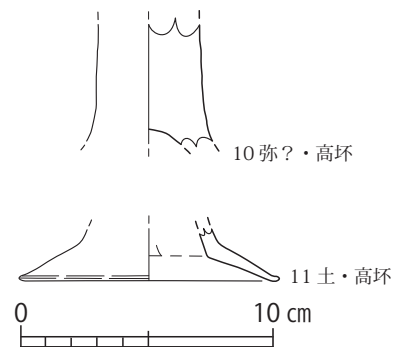
(2) 土坑

SK1 (第 12 図、図版 3)

調査区の西側中央で検出した。平面形は隅丸方形であり、長軸 140cm、短軸 110cm、深さ 24cm を測る。底面は平坦であり、掘方はほぼ直線的に開きながら立



第 12 図 5 次調査 SK1 実測図 (1/40)



第 13 図 5 次調査 SK1 出土遺物実測図 (1/3)

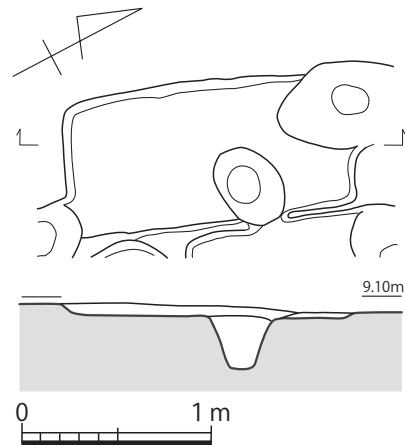
ち上がる。南東側に直径 50cm、深さ 28cm のピットが 1 基ある。下端の直径 20cm、掘方の中段位付近にテラスをもつ。

出土遺物 (第 13 図、図版 6)

10～11 は高坏である。10 は脚部であり中実である。11 は裾部であり、脚部との境に屈曲部をもつ。端部はわずかにつまみ出す。

SK2 (第 14 図、図版 4)

調査区の東側中央で検出した。平面形は長方形であり、長軸 150cm、短軸 80cm、深さ 8cm を測る。底面は平坦である。深さが浅いため掘方の形状は明確に捉えられるとは言えないが、やや開き気味になりながら直線的に立ちあがる。複数のピットに掘り込まれる。遺物は出土していない。

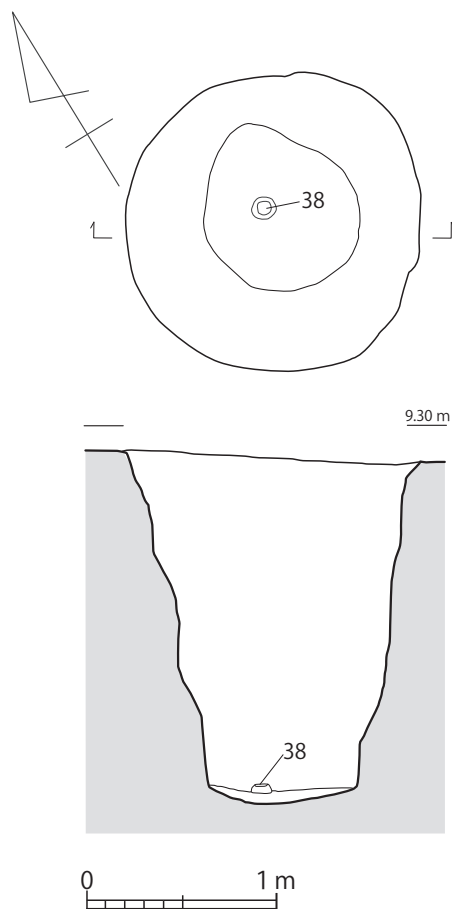


第 14 図 5 次調査 SK2 実測図 (1/40)

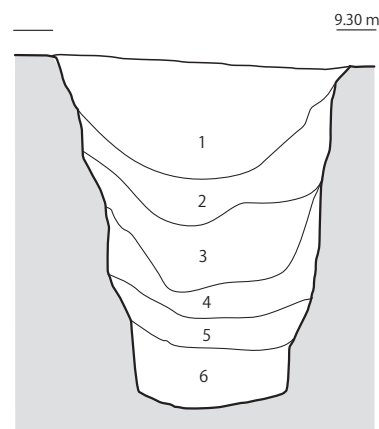
(3) 井戸

SE1 (第 15 図、図版 4・5)

調査区の中央で検出した。平面形は円形であり、直径 160cm、深さ 180cm を測る。掘方は底面に向かって屈曲しながらすぼまり、底面の直径は 80cm となる。掘削中の埋土には多量の水分が含まれていたものの、完掘後に湧水は発生しなかった。石組等をもたない素掘りの井戸である。底部から約 50cm の高さまで壁面は鉄分を含んだためか非常に硬質となっていた。余談であるが、調査地付近で確認調査を実施していた折、地元の古老から伺った話によれば「調査地周辺の水は金気が強く、井戸を掘っても飲み水ほか生活用水には適さないため、南側の長峽川から水車で水をくみ上げて引いていた」という。



第 15 図 5 次調査 SE1 実測図 (1/40)



- 1. 褐茶色シルト質土 (5cm以下地山ブロック少量)
- 2. 暗灰茶色シルト質土 (3cm以下地山ブロック少量)
- 3. 暗褐茶色粘質土 (10cm以下礫少量)
(3cm以下地山ブロック少量 10cm以下黒色ブロック多量)
- 4. 暗褐色粘質土 (20cm以下褐色砂質ブロック多量)
- 5. 暗茶褐色粘質土
- 6. 灰褐色粘質土

SE1の層序は6層に大別できた。全体的に大まかなレンズ状堆積の様相を呈するが、1層目から土師器坏(図16-21)、2層目から土師器小皿(図16-15)、3層目からは土師器小皿や坏(図16-17、27～30、図17-31～36、40)、5層目から土師器坏(図17-37)と時期が近い遺物がまとまって出土したことから人為的に埋められたものと考えられる。しかし、3層目の底面は立ち上がりが見つく掘りなおしのようにも見受けられ、その場合、時期差が生じることになろう。5層目以下から木片がわずかに出土していることから木組みの井戸枠があった可能性も残る。ほか、出土位置が記録できていないが瓦質土器や黒漆塗りの木製小皿が出土した。また、混入品として弥生土器や把手らしき土師器もある。床面中央付近からは土師器坏(図17-38)が伏せられた状態で出土した。廃絶したのは12世紀後半以降と考えられる。

出土遺物(第16・17図、図版6・7)

12は壺の口縁部である。外面に波状文を施す。13は壺の底部であり、丸底である。14は把手であろうか。内部は中空であり、外側に向かって逆テーパ状に伸びる。15～19は小皿である。底面には回転糸切痕をもつ。15は土層図中1.褐茶色シルト質土、16～17は3.暗褐茶色粘質土から出土した。19は底部中央付近に穿孔がある。20～38は坏である。底部には回転糸切痕をもつ。21は土層図中の1.褐茶色シルト質土、29～36、40は3.暗褐茶色粘質土、37は5.暗茶褐色粘質土、38は床面で出土した。39は鉢の口縁部である。口縁端部の内側に粘土ヒモを廻らし肥厚させる。40は台付鉢の底部片である。底面に回転糸切の痕跡をもつ。41は小皿の底部である。42は鉢の体部である。43は壺もしくは甕である。44は木製小皿である。内外面に黒漆が塗られ、見込みには赤漆で文様を施す。

(4) 柱穴・表採(第18図、図版7)

このほか、柱穴出土遺物と表採した遺物を以下に報告する。

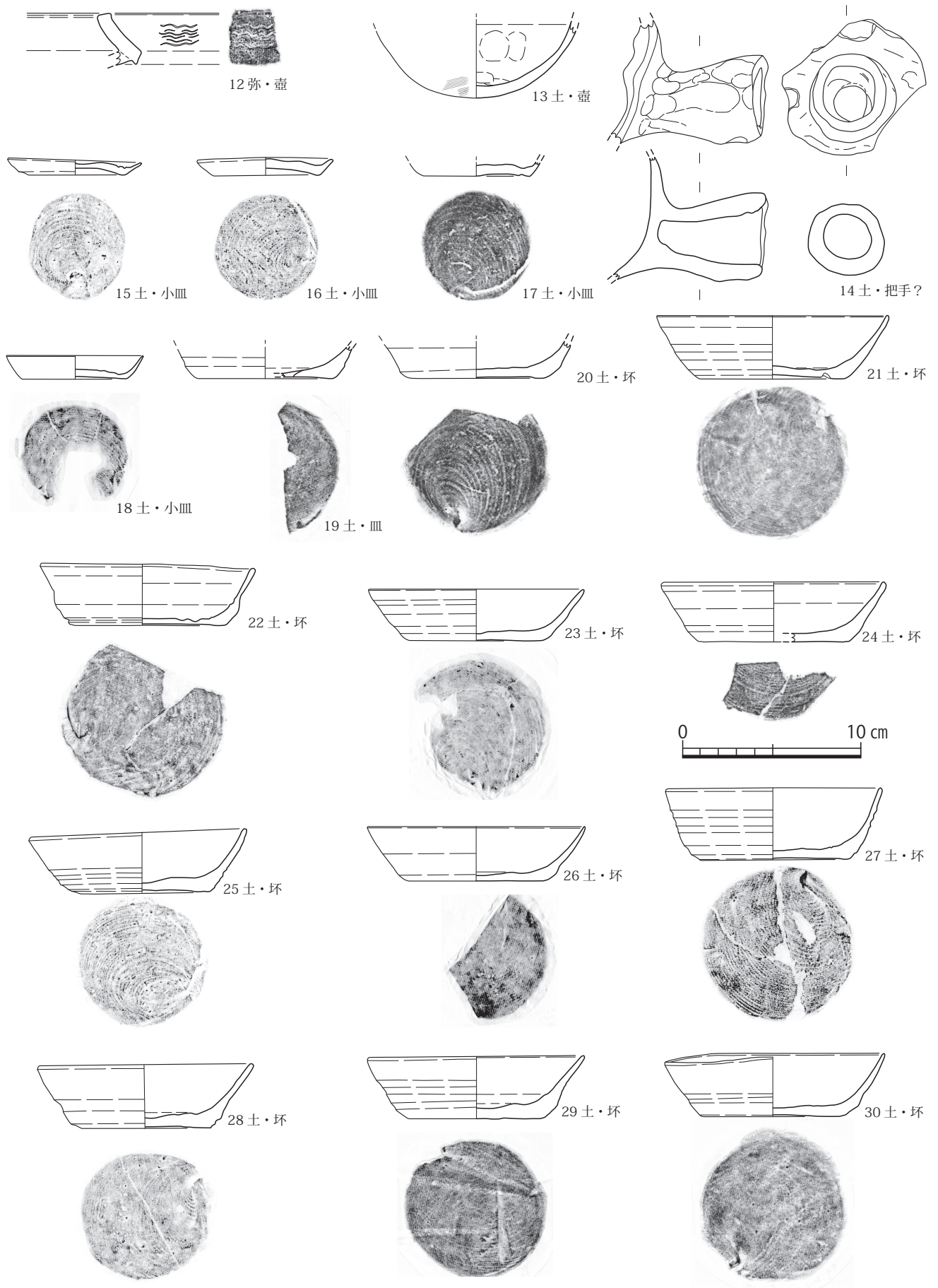
45は高坏の坏部で外反しながら立ち上がり、端部を薄くつまみ出す。46は高坏の脚部である。長脚で裾部に向かってなだらかに開く。47は須恵器の坏蓋である。48は土師質土器の底部片である。火鉢であろうか。50は白磁である。玉縁状口縁をもつ。51は粘土塊である。外面に微細な穴が複数あり、一部に平坦面をもつ。土壁の一部であろうか。52は砥石である。53は須恵器の底部片であり、底部にヘラ記号をもつ。高台端部を欠くが断面形は台形である。54・55は瓦質火鉢である。55の口縁部付近にはスタンプによる梅花文を付す。56は肥前系の染付碗もしくは皿である。底面は碁笥底である。

第3節 結語

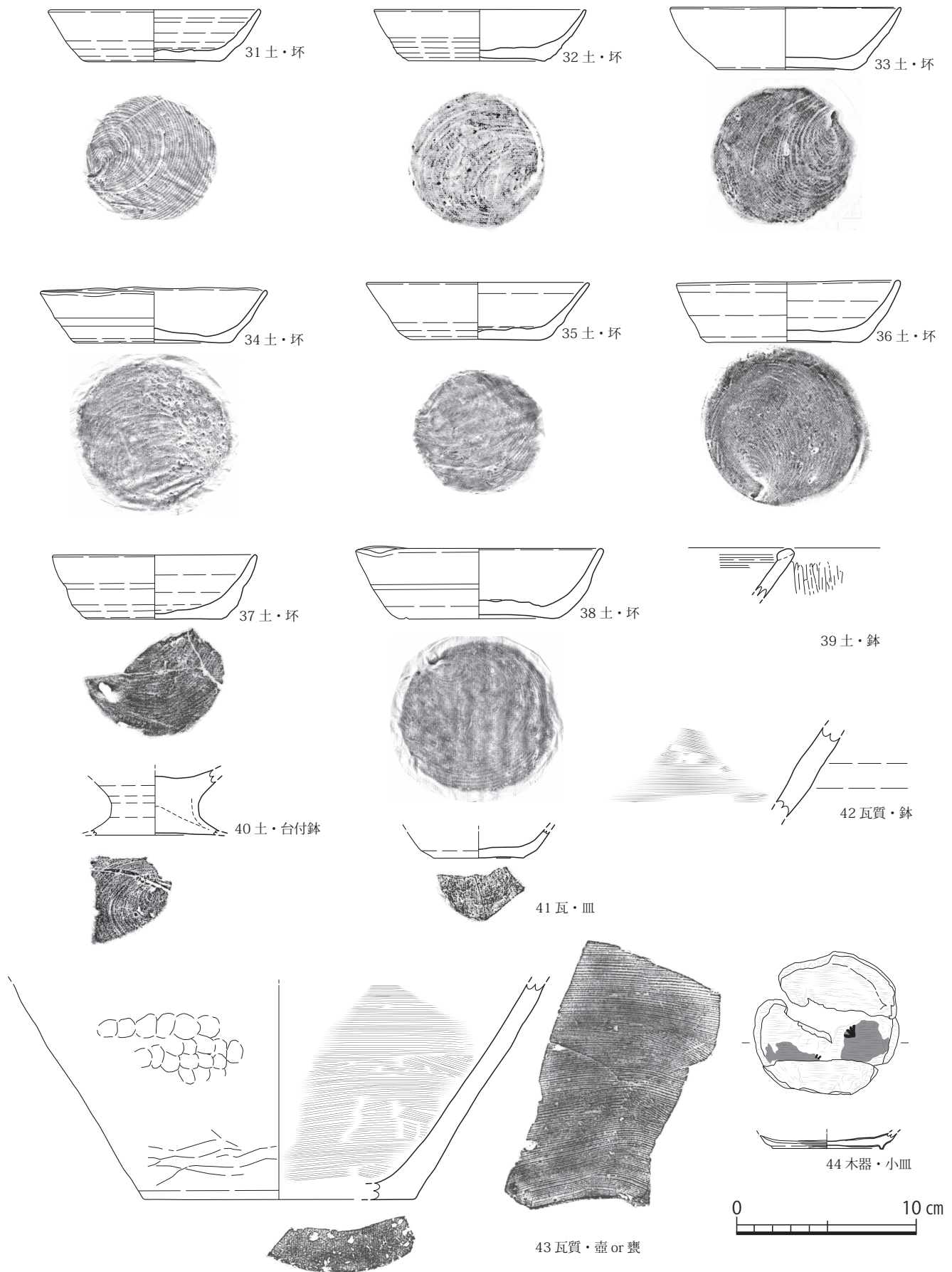
今回の調査では古墳時代の竪穴建物と中世の井戸を確認した。調査範囲は狭小であるため遺跡の全体像を明らかにすることは難しいが、周辺の発掘調査結果と照らし合わせてみよう。

調査地南東側約120mで実施した10次調査(未報告)では弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期の竪穴建物が密集した様子を確認しているが、調査地ほぼ全面が竪穴建物であったのに対し、5次調査地はその他の遺構を含めても遺構密度が低い。九州歴史資料館が発掘調査した西側のIV-A区でも密集した様子が確認されているが、この差をどのように捉えるか課題となる。また、市道を挟んだ南側隣接地の確認調査で地山および遺構検出面は5次調査地より1.4m程度低くなるという状況を確認している。地形的な変化があったとすれば、5次調査地を境として北と南に集落の単位が分かれることも考えられよう。SI1の出土遺物に須恵器はなく、その出土土器から4世紀後半以降に廃絶したものと考えられる。

中世の遺構にSE1と柱穴がある。SE1は床面に伏せられた土師器坏から12世紀後半に廃絶したものと

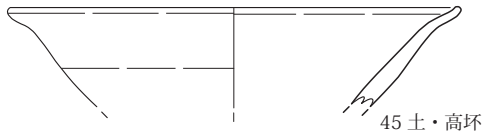


第 16 图 5 次調査 SE1 出土遺物実測图 1 (1/3)



第 17 図 5 次調査 SE1 出土遺物実測図 2 (1/3)

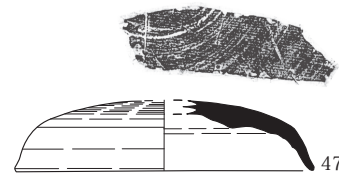
SP



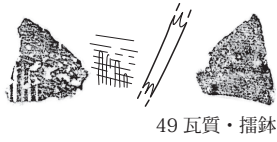
45 土・高环



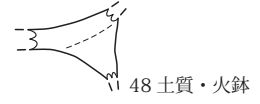
46 弥・高环



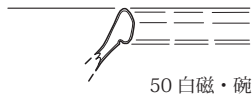
47 須・环盖



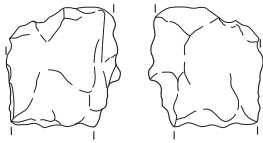
49 瓦質・播鉢



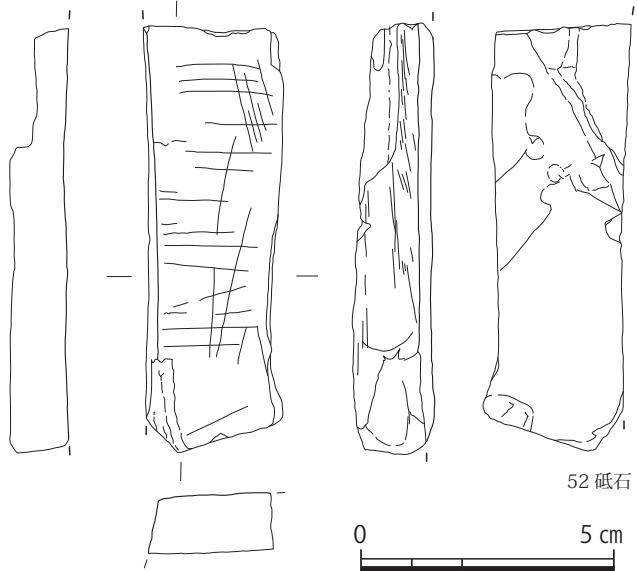
48 土質・火鉢



50 白磁・碗



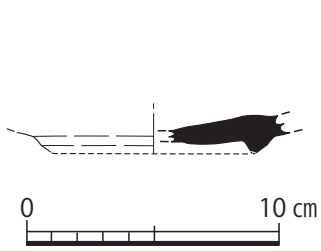
51 粘土塊



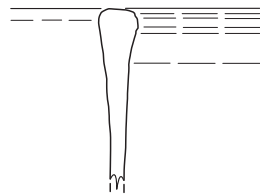
52 砥石



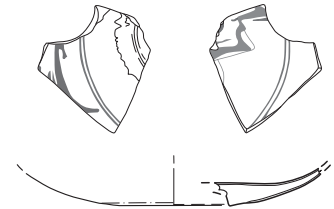
表採



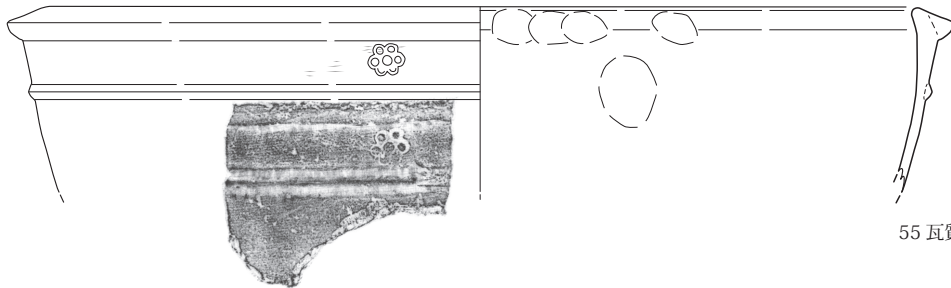
53 須・环



54 瓦質・火鉢



56 染・碗 or 皿



55 瓦質・火鉢

第 18 図 5 次調査 SP・表採出土遺物実測図 (1/3)

考えられる。また、同時期の遺物として柱穴から玉縁白磁碗が出土している。にぶい黄橙色を帯びた粘土塊は一部平坦面をなし、表面全体に多数確認できる微細な穴は藁の痕跡を思わせることから壁土であると考えられる。北側から西側を走る東九州自動車道建設地では中世の区画溝で囲まれた屋敷地が多数確認されており、より屋敷地が東へ伸びることを示唆している。表採ではあるが火鉢の出土もあり14世紀頃の遺構も展開しているものとみられる。

混入ではあるが弥生土器もわずかにあることから弥生時代の集落も展開していることであろう。ほか、重機掘削中の排土から碁笥底の染付碗もしくは皿が出土している。これまで同一の丘陵上で度々確認調査、発掘調査を実施してきたが近世遺物は確認できていなかった。丘陵北側の谷筋では4次調査地や確認調査にて江戸時代初頭の遺物が出土しているが、近世集落の広がりを考えるうえで重要である。各時代の集落がどのように展開しているのか、東九州自動車道以東についてはまだ把握できていない。吉国では住宅の建て直しや新築が相次いでいるため、今後の調査に期待したい。

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
1	S11	土師器	小型丸底壺	復元口径 11.4, 残高 7.6	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～4mmの透白色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 6/4 外: にぶい橙 5YR 6/4, にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部～ 体部片	○	
2	S11	土師器	壺	復元口径 14.5, 残高 8.6	内: 回転ナデ→ハケ, ヘラケズリ 外: 回転ナデ→ハケ	良好	～3mmの透白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部～ 肩部片	○	
3	S11	土師器	壺	復元口径 18.8, 残高 11.9	内: 回転ナデ→ハケ 外: 回転ナデ→タテハケ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 褐灰 10YR 4/1, にぶい橙 7.5YR 6/4 外: 褐灰 10YR 4/1, 暗灰 N 3/0	口縁部～ 肩部片	○	
4	S11	土師器	壺	復元口径 17.4, 残高 20.2	内: 回転ナデ→ヨコハケ, ヘラケズリ 外: 回転ナデ→タテハケ, ハケ	良好	～2.5mmの透白色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 6/4 外: 橙 5YR 6/6, にぶい褐 7.5YR 5/4	口縁部～ 胴部片	○	
5	S11	土師器	壺 or 甕	残高 5.3	内: 回転ナデ→ヨコナデ→ハケ 外: 回転ナデ→ヨコナデ→ハケ	やや良好	～3mmの白色砂粒	内: 橙 5YR 7/6, 橙 7.5YR 7/6 外: 橙 5YR 7/6, にぶい橙 5YR 6/4	胴部～ 底部片	○	
6	S11	弥生土器	台付鉢?	底径 2.0, 残高 3.1	内: ヨコナデ→オサエ 外: ヨコナデ→オサエ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 浅黄橙 7.5YR 8/4 外: 橙 5YR 6/6, 橙 5YR 7/6	底部片	○	
7	S11	土師器	高坏	残高 7.7	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→オサエ→ハケ→透かし	良好	～3.5mmの透白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 7/3	坏部～ 脚部片	○	4方向に円形 透し孔
8	S11	土師器	高坏	残高 9.7	内: 回転ナデ→ヘラケズリ 外: 回転ナデ→縦ヘラミガキ→ 横ヘラミガキ	良好	～2mmの白色砂粒	内外: 橙 5YR 6/6	脚部片	○	
9	S11	土師器	高坏	残高 7.6	内: 回転ナデ→シボリ, ケズリ 外: 回転ナデ→ナデ	良好	～1.5mmの透白色砂粒	内: にぶい褐 7.5YR 6/4 外: にぶい褐 7.5YR 5/4, 灰黄褐 10YR 4/2	脚部片	○	
10	SK1	弥生土器?	高坏	残高 4.8	内: ナデ 外: ナデ	良好	～4.5mmの透白色砂粒	内: 橙 7.5YR 7/6 外: 橙 7.5YR 7/6, 橙 5YR 6/8	脚部片	○	
11	SK1	土師器	高坏	復元底径 10.4, 残高 2.1	内: 回転ナデ→ケズリ 外: 回転ナデ	良好	～2.5mmの透白色砂粒	内: 灰褐 7.5YR 5/2, 明赤褐 5YR 5/6 外: 明赤褐 5YR 5/6,	脚部片	○	
12	SE1	弥生土器	壺	残高 2.9	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→櫛波状文	良好	～1mmの白色砂粒 ～2mmの透白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 7/3	口縁部片	○	
13	SE1	土師器	壺	残高 4.1	内: 回転ナデ→オサエ 外: 回転ナデ→ヨコハケ	やや良好	～1mmの白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 7/2, 褐灰 7.5YR 6/1	胴部～ 底部片	○	
14	SE1	土師器	把手?	残高 7.8	内: ユビナデ→ケズリ 外: ユビナデ→オサエ	良好	～3mmの白色砂粒	赤橙 10R 6/6, 橙 2.5YR 7/6	把手片	○	
15	SE1	土師器	小皿	口径 7.6, 底径 5.4, 器高 1	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状瓦痕)	良好	～3mmの白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 7/4	ほぼ完形	○	
16	SE1	土師器	小皿	口径 7.7, 底径 6.0, 器高 1.0	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状瓦痕)	良好	～1mmの白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 6/4	ほぼ完形	○	
17	SE1	土師器	小皿	底径 6, 残高 0.7	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り	良好	～1mmの白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 7/3	胴部～ 底部片	○	
18	SE1	土師器	小皿	復元口径 7.8, 復元底径 6.0, 器高 1.3	内: ロクロナデ→ヨコナデ→ナデ 外: ロクロナデ→ヨコナデ→ 回転糸切り	良好	～1mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6 外: にぶい橙 7.5YR 6/4	3/4程度	○	
19	SE1	土師器	皿	復元底径 7.6, 残高 1.8	内: 回転ナデ→ナデ 外: 回転ナデ→回転糸切り (板状瓦痕), 穿孔	良好	～1mmの白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 6/4	体部～ 底部片	○	
20	SE1	土師器	坏	底径 7.9, 残高 2.1	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り	良好	～1mmの白色砂粒 ～1mmの茶色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 6/4 外: にぶい黄橙 10YR 7/4	胴部～ 底部片	○	
21	SE1	土師器	坏	復元口径 13.2, 底径 8.2, 器高 3.6	内: ロクロナデ→ヨコナデ→オサエ 外: ロクロナデ→ヨコナデ→ 回転糸切り	良好	～3mmの白色砂粒	内: にぶい褐 7.5YR 5/3, 橙 5YR 6/6 外: 橙 5YR 6/6, にぶい黄橙 10YR 7/2	口縁部～ 底部片	○	
22	SE1	土師器	坏	口径 12, 底径 8.5, 器高 3.5	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状瓦痕)	良好	～1mmの白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 6/4	3/4程度	○	
23	SE1	土師器	坏	復元口径 12.2, 復元底径 7.6, 器高 2.9	内: ロクロナデ→ヨコナデ→オサエ 外: ロクロナデ→ヨコナデ→ 回転糸切り	良好	～3mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6, 灰褐 7.5YR 5/2 外: にぶい橙 7.5YR 6/4,	1/4程度	○	
24	SE1	土師器	坏	復元口径 12.6, 復元底径 8.4, 器高 3.4	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り	良好	～2mmの白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 6/4	1/5程度	○	
25	SE1	土師器	坏	口径 12.4, 底径 7.8, 器高 3.6	内: ロクロナデ→オサエ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状瓦痕)	良好	～2mmの白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 7/4	ほぼ完形	○	
26	SE1	土師器	坏	復元口径 12.4, 復元底径 7.6, 器高 3.1	内: ロクロナデ→ヨコナデ→ナデ→オサエ 外: ロクロナデ→ヨコナデ→ 回転糸切り (板状瓦痕)	良好	緻密	内: にぶい橙 7.5YR 6/4 外: にぶい橙 7.5YR 7/4	1/4程度	○	
27	SE1	土師器	坏	復元口径 12.2, 底径 8.4, 器高 4.1	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状瓦痕)	良好	～2mmの白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 6/4	3/4程度	○	
28	SE1	土師器	坏	口径 12.2, 底径 7.4, 器高 3.6	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状瓦痕)	良好	～1mmの白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 6/4	3/4程度	○	

表 3 出土遺物観察表

掲載 番号	出土 遺構	種別	器種	法 量 (cm)	調 整	焼成	胎 土	色 調	残 存	写真	備考
29	SE1	土師器	坏	口径 12.2, 底径 7.4, 器高 3.6	内: ロクロナデ→ナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状玉痕)	良好	～4mmの透白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 6/4, 褐灰 7.5YR 4/1	2/3 程度	○	
30	SE1	土師器	坏	口径 12.4, 底径 7.8, 器高 3.6	内: ロクロナデ→ナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状玉痕)	良好	～1mmの透白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 6/4, にぶい黄橙 10YR 7/2	ほぼ完形	○	
31	SE1	土師器	坏	復元口径 11.65, 底径 7.4, 器高 2.9	内: ロクロナデ→ヨコナデ→ナデ 外: ロクロナデ→ヨコナデ→回転糸切り (板状玉痕)	良好	緻密	内: にぶい橙 7.5YR 7/4, 黒褐 7.5YR 3/1 外: にぶい橙 7.5YR 7/4, 橙 7.5YR 7/6	1/4 程度	○	
32	SE1	土師器	坏	口径 12, 底径 7.7, 器高 2.9	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状玉痕)	良好	～1mmの白色粗粒	内外: にぶい橙 7.5YR 6/4	3/4 程度	○	
33	SE1	土師器	坏	復元口径 13, 底径 7.6, 器高 3.5	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り	良好	～3.5mmの白色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 6/4, 褐灰 10YR 6/1 外: にぶい黄橙 7.5YR 6/4	2/3 程度	○	
34	SE1	土師器	坏	口径 12.6, 底径 8.7, 器高 3.2	内: ロクロナデ→ヨコナデ→ナデ 外: ロクロナデ→ヨコナデ→ 回転糸切り	良好	～2.5mmの白色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 7/4, にぶい橙 7.5YR 6/4 外: にぶい橙 7.5YR 7/4, 褐灰 7.5YR 4/1	完形	○	
35	SE1	土師器	坏	復元口径 12.6, 底径 7.2, 器高 3.2	内: ロクロナデ→ヨコナデ→ナデ→ オサエ 外: ロクロナデ→ヨコナデ→ 回転糸切り	良好	～1mmの白色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 6/4 外: にぶい橙 7.5YR 7/4, にぶい橙 7.5YR 6/4	ほぼ完形	○	
36	SE1	土師器	坏	口径 12.5, 底径 8.6, 器高 3.5	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り	良好	～3mmの白色砂粒 ～1mmの茶色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 6/4	ほぼ完形	○	
37	SE1	土師器	坏	復元口径 11.4, 復元底径 8, 器高 3.6	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状玉痕)	良好	～4mmの透白色砂粒	内: にぶい黄橙 10YR 6/3 外: 灰黄褐 10YR 5/2	1/2 程度	○	
38	SE1	土師器	坏	復元口径 14.0, 底径 9.0, 器高 3.9	内: ロクロナデ→ヨコナデ→ナデ 外: ロクロナデ→ヨコナデ→ 回転糸切り	やや良好	緻密	内: にぶい橙 7.5YR 6/4, 明褐 7.5YR 5/8 外: にぶい橙 7.5YR 7/3, にぶい橙 7.5YR 7/4	3/4 程度	○	内面に釉薬 の跡あり
39	SE1	土師器	鉢	残高 3.1	内: 回転ナデ→ハケ 外: 回転ナデ→ヘラミガキ	良好	～3mmの白色砂粒	内外: 橙 5YR 6/6	口縁部片	○	
40	SE1	土師器	台付鉢	残高 3.6	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→回転糸切り	良好	～2mmの白色砂粒	内: 淡黄 2.5Y 8/3 外: 灰 N 4/0	脚台部片	○	
41	SE1	瓦器	皿	復元底径 5, 残高 1.6	内: ロクロナデ→ナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り (板状玉痕)	良好	～1mmの白色砂粒	内外: 黄灰 2.5Y 6/1, 灰白 2.5Y 8/1	胴部～ 底部片	○	
42	SE1	瓦質土器	鉢	残高 5	内: 回転ナデ→ヨコハケ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの黒色砂粒 ～4mmの白色砂粒	内: 灰白 5Y 8/1 外: 灰白 2.5Y 8/2	体部片	○	
43	SE1	瓦質土器	壺 or 甕	復元底径 15.2, 残高 12.1	内: 回転ナデ→ヨコハケ 外: 回転ナデ→ヘラケズリ, オサエ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 灰 N 5/0 外: 灰 N 4/0	胴部～ 底部片	○	
44	SE1	木器	小皿	底径 6.3, 残高 0.8	内: 黒漆塗 外: 黒漆塗	—	—	地: 暗赤褐色 5YR2/3 黒漆: 黒色 2.5YR/2/1 赤漆: 赤褐色 2.5YR4/6	3/4 程度	○	赤漆で絵付
45	SP2	土師器	高坏	復元口径 18.2, 残高 3.9	内: 回転ナデ→ヨコナデ 外: 回転ナデ→ヨコナデ	やや良好	～2mmの白色砂粒	内: 橙 5YR 7/6 外: 浅黄橙 7.5YR 8/6	口縁部～ 坏部片	○	
46	SP8	弥生土器	高坏	残高 10.7	内: ヨコナデ→シボリ 外: ナデ	良好	～3mmの透白色砂粒	内: 橙 5YR 6/6 外: にぶい橙 5YR 6/4, にぶい橙 7.5YR 6/4	坏部～ 脚部片	○	
47	SP16	須恵器	坏蓋	復元口径 12, 残高 2.3	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	～1mmの白色粗粒	内外: 黄灰 2.5Y 5/1	天井部～ 口縁部片	○	
48	SP16	土師質土器	火鉢	残高 2.8	内: 回転ナデ→ハケ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 6/6	脚部片	○	
49	SP17	瓦質土器	播鉢	残高 3.3	内: 回転ナデ→ハケ 外: 回転ナデ→ハケ	やや良好	～2mmの透白色砂粒	内外: 灰 5/0	体部片	○	
50	SP23	白磁	碗	残高 2.3	内: ロクロナデ→施軸 外: ロクロナデ→施軸	良好	緻密	素地: 灰白 5Y 8/1 釉: 灰白 5Y 7/2	口縁部片	○	
51	SP17	土製品	粘土塊	残高 4.8, 残幅 4.5	—	—	～2mmの透白色砂粒	橙 5YR 6/6, にぶい黄橙 10YR 7/3	小片	○	スサ入り粘土
52	SP4	石製品	砥石	残長 8.5, 残幅 2.8, 重量 50.05g, 残厚 1.2	—	—	—	黄灰 2.5Y 6/1	小片	○	砥面 2 面を 残す
53	表採	須恵器	坏	残高 1.6	内: 回転ナデ→ナデ 外: 回転ナデ→ヘラケズリ→ナデ	良好	緻密	内: 黄灰 2.5Y 6/1 外: 灰 N 4/0	底部片	○	ヘラ記号あり
54	表採	瓦質土器	火鉢	残高 6.9	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→ハケ	良好	～1mmの白色砂粒	内外: 灰黄 2.5Y 7/2	口縁部片	○	
55	表採	瓦質土器	火鉢	復元口径 35, 残高 7.4	内: 回転ナデ→オサエ 外: 回転ナデ→ヨコハケ	良好	～1mmの白色砂粒 ～1mmの黒色砂粒	内: にぶい黄橙 10YR 7/2 外: 褐灰 10YR 6/1	口縁部～ 体部片	○	梅鉢紋あり
56	表採	染付	碗 or 皿	復元底径 4.4, 残高 1.5	内: ロクロナデ→染付→絵付→施軸 外: ロクロナデ→染付→絵付→施軸	良好	緻密	素地: 灰白 2.5Y 8/1, 淡黄 2.5Y 8/3 釉: 明緑灰 10Y 8/1	底部～ 体部片	○	肥前系, 葎 筒底

表 4 出土遺物観察表

第4章 延永ヤヨミ園遺跡 第6・7・13次調査

第1節 遺跡の概要（第19図、図版8・9）

当遺跡の概要は前章でも述べたが、ここでは古代の状況について補足したい。現在、行橋市街地周辺は平野が広がるが、古代には周防灘に面した海岸線から西に向かって入江が広がり、延永ヤヨミ園遺跡の東方数百mに海岸線が迫っていたと推定されている。また、丘陵の周囲は山崎川や長峽川などの旧河道があり、丘陵に入り込む谷筋から準構造船塀板が出土したことから、周防灘から進入した舟は内陸深くまで入ることができたと分かる。墨書土器等から古代の湊「草野津」であることが確定的となったが、この時期の遺構として官衙的性格を持つ大型の掘立柱建物跡が複数確認されており、7世紀後半から8世紀頃のものと考えられている。あわせて区画溝や道路状遺構も確認されている。

本章で述べる6・7・13次調査は平成29年度に1つの畑を宅地化して3区画に分譲したものであり、令和4年度をもって全区画の調査が完了した。所在地は大字吉国533番1、533番7、533番8、533番3となっており、調査面積は合計642㎡（6次調査345㎡、7次調査180㎡、13次調査117㎡）である。

第2節 遺構と遺物

（1）竪穴建物

SI1・SI9（第20図、図版10）

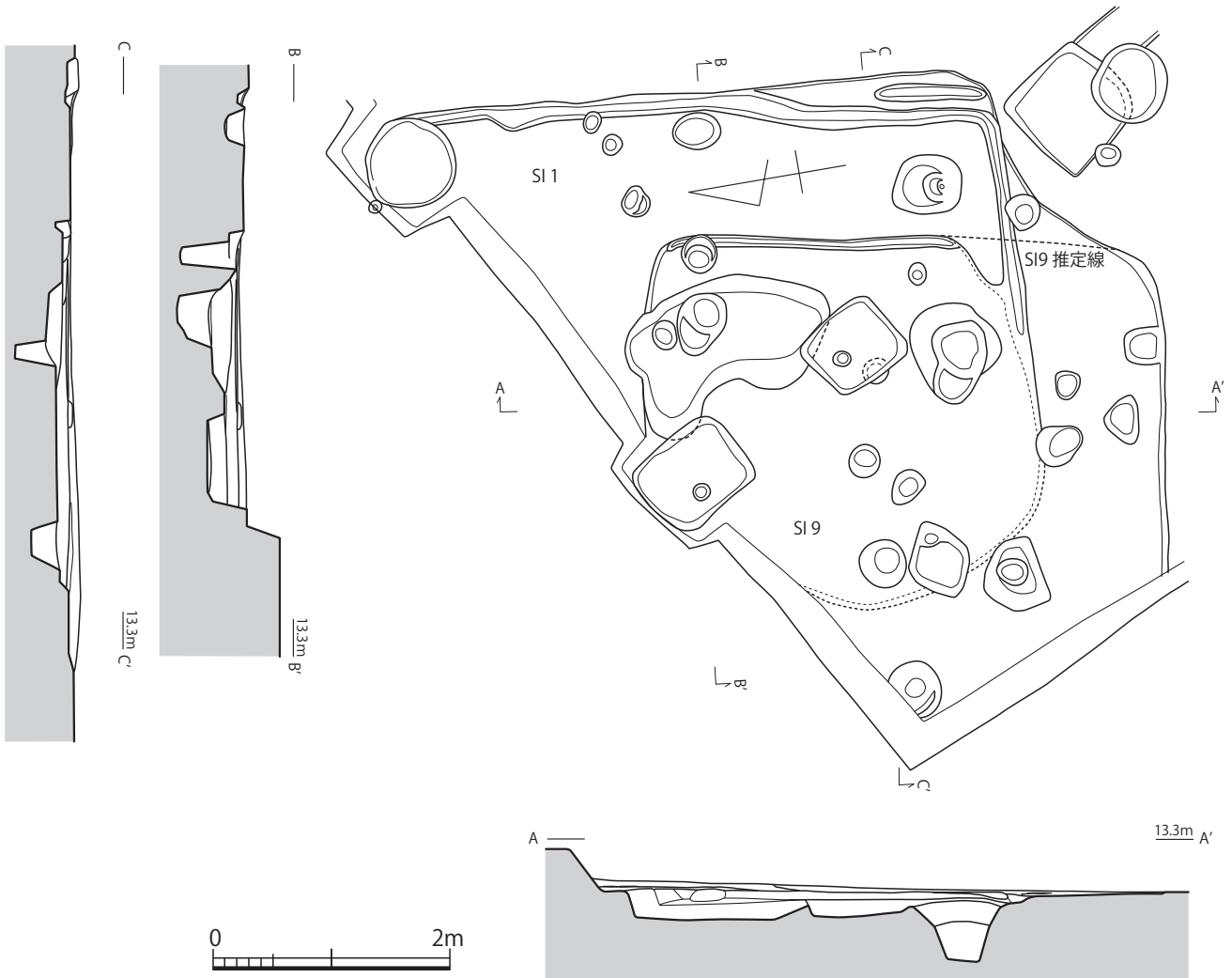
13次調査区の西側隅で検出した。当初は1基の竪穴建物として遺構番号を付していたが、調査後に2基の竪穴建物が切りあっているものと判断した。二重ある壁際溝のうち外側のL字状の溝を辺としたものをSI1、内側にある壁際溝から南側に突出する面までをSI9とした。土層ではSI9の掘方にあたる位置で立ち上がりを確認できなかったことから、SI1がSI9を掘り込むものと考えられる。

SI1は北東隅と南東隅を検出しており、全体の2分の1程度を検出していると考えられる。南北軸530cmを測るが、南側は削平されており壁際溝が消滅しているため東西軸の長さは不明である。方位はN-5°-Eである。床面までの深さは約10cmである。壁際溝は幅20cm、深さ約5cmであり、東辺から南辺途中まで確認した。東辺の壁際溝は中央付近から南辺に向かって内側に蛇行した後、再び南辺に対して垂直となる。南東隅には幅20cm、長さ96cmの溝が壁際溝と平行して掘られている。南辺の壁際溝が途切れる付近には直径40cm、深さ35cmの円形土坑がある。屋内土坑であろうか。仮に南辺の中央に設けられていたとすれば、復元できる東西軸は約500cmとなり、平面形は正方形に近いものとなる。支柱穴は不明。

SI9の平面形は推定となるが、SI1内部の東辺と平行する長さ250cmの壁際溝がSI9東辺の一部と考えられる。壁際溝の北端はわずかに西側に屈曲しているため北西隅と捉えることができる。SI1の南辺には幅約1m、深さ数cmのテラスが東西方向に伸びているが、壁際溝の延長線上にテラスの隅部が位置するため、これをSI9の南東隅と捉えることができるのではなかろうか。想定できる平面形は南北軸440cm、東西軸400cm以上となる。方位はN-10°-Eである。床面までの深さは5cmである。図中に点線で示したとおり、壁際溝から中央部にかけて掘り込んでしまったが、土層観察の結果からSI9の貼り床であると判断した。支柱穴は不明。SI9北東隅には土坑を検出したが、SI9に先行するものである。



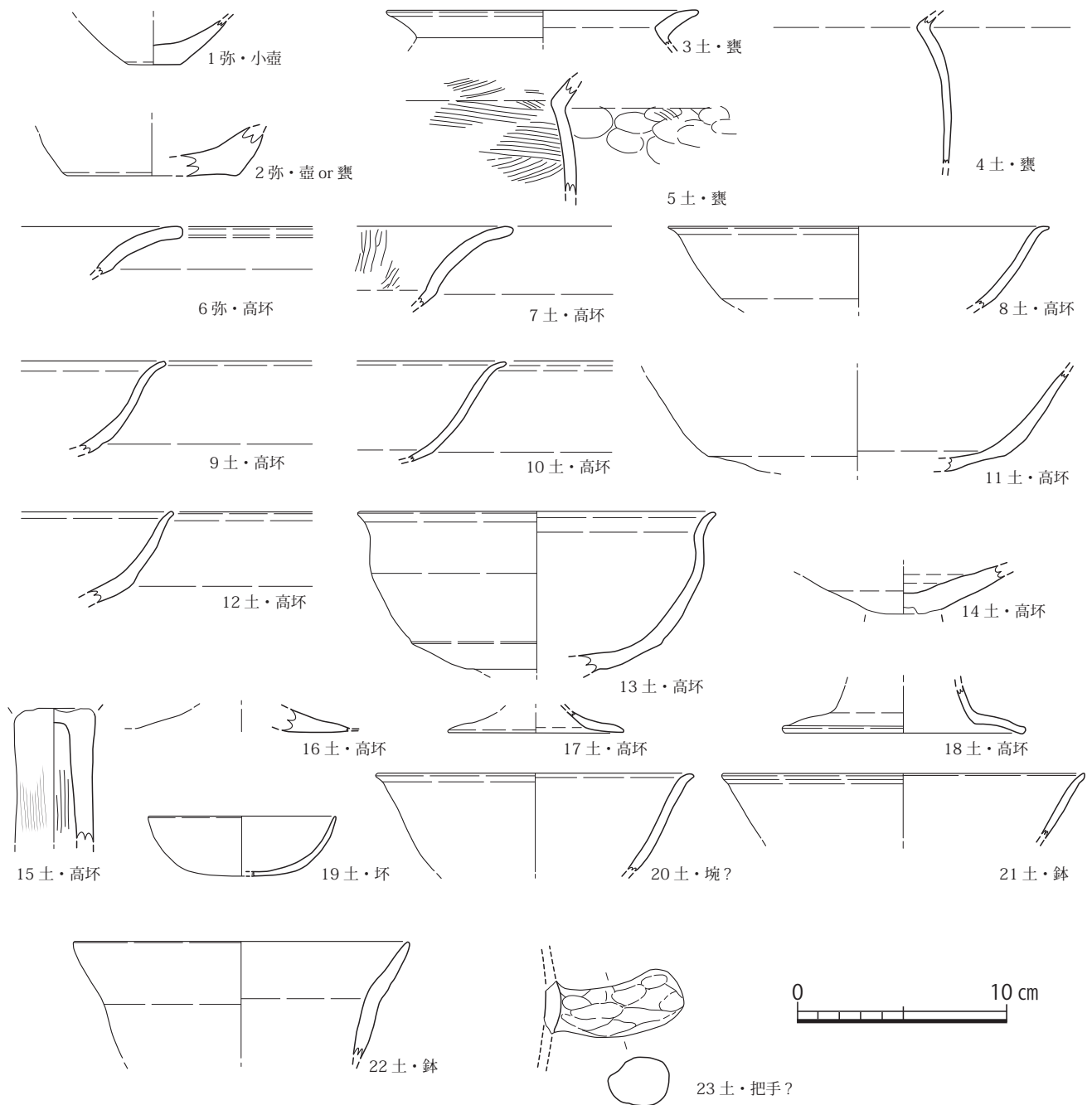
第 19 図 延永ヤヨミ園遺跡 第 6・7・13 次調査遺跡遺構配置図 (1/200)



第 20 図 13 次調査 SI1・9 実測図 (1/60)

出土遺物 (第 21 図、図版 19)

1 は壺の底部であり、底面は平底である。2 は壺もしくは甕の底部であり、底面は平坦である。3～5 は甕である。3 は頸部がく字状になり口縁部は短く外反する。端部は薄くつまみ出す。4 は甕の胴部である。5 も甕の胴部であり、外面はオサエ、内面はハケ調整を施す。6～14 は高環の坏部である。6 は大きく外反し、端部は平坦に収める。7 は外反し、端部は丸く収める。8 は内湾しながら立ち上がり、端部を外側につまみ出す。9～10 は内湾しながら立ち上がり、端部を外側にひねり出す。器壁は薄くなる。11 は底部から上外方にかけて緩やかに内反したのち直線的に広がる。12 は坏底部から上外方に向けて内反し、端部を薄く外方へつまみ出す。13 は坏底部から上外方に内反しながら立ち上がり、口縁部で短く外反する。14 は坏部の底部である。底部外面は平坦になっており、中央部に直径約 1 cm のくぼみがある。15 は高環の脚部である。16～18 は高環の裾部である。16 は端部を薄く、底面は平坦である。端部は丸く収める。17 は脚部との境界に屈曲部をもつ。18 は脚部から裾部の境界に屈曲部をもつ。端部にむけて薄くなり、端部は上方にはね上げる。19 は坏である。底面はやや平たい丸底であり、内反しながら立ち上がる。口縁端部は薄く収める。20 は碗か。内反しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。21 は直線的に上方へ開き、端部は外反する。22 は鉢である。頸部でわずかに外反し、端部は先細る。23 は把手付碗の把手であろうか。体部との接続部は細く、端部に向けてわずかに上方に反りながら太くなる。



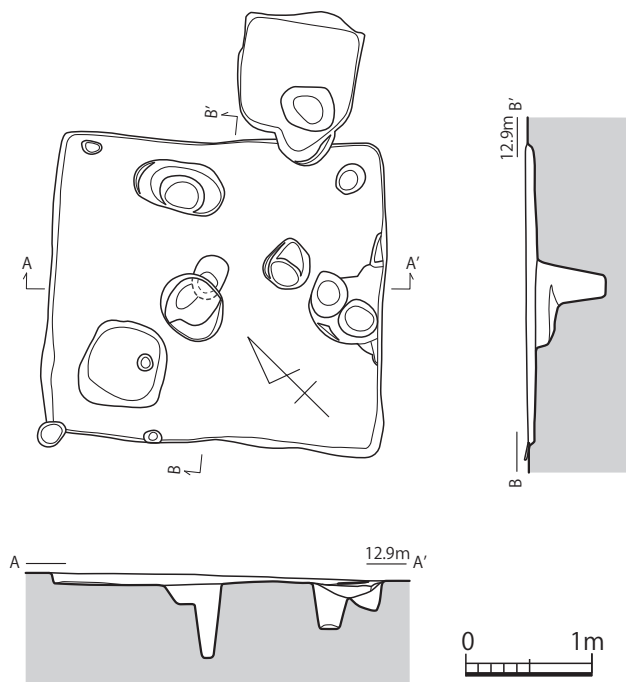
第 21 図 13 次調査 S11・9 出土遺物実測図 (1/3)

SI2 (第 22 図、図版 10)

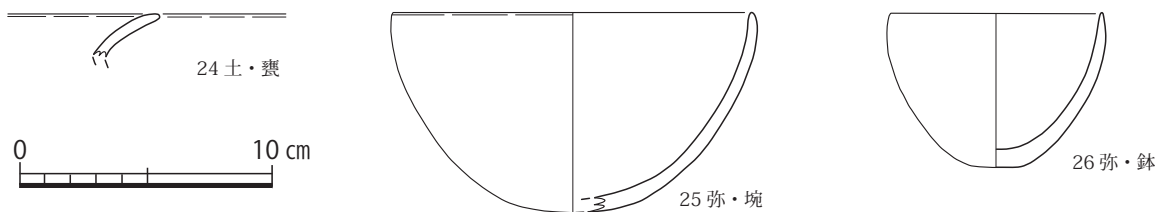
13 次調査区の中央南側付近で検出した。南北軸 265cm、東西軸 240cm、平面形は概ね正方形を呈する。方位は N-41° -W である。床面までの深さは 10cm である。南東辺中央に底面が不整形な土坑が併設しているが屋内土坑であろうか。床面では中央に 1 基、四隅のうち北と東の隅に各 1 基ピットを確認した。埋土中には炭化物が混入していたが焼土痕は確認していない。SB1、SB2、SB8 に切られる。

出土遺物 (第 23 図、図版 19)

24 は甕の口縁部であり、短く外反する。25 は碗である。底部は丸底であるが、わずかに平坦面を残す。内反しながら立ち上がり、端部は丸く収める。26 は鉢である。底部は平坦であり、内反しながら立ち上がる。器壁は底部に厚みがあり、口縁部に向かって薄くなる。



第22図 13次調査 SI2 実測図 (1/60)



第23図 13次調査 SI2 出土遺物実測図 (1/3)

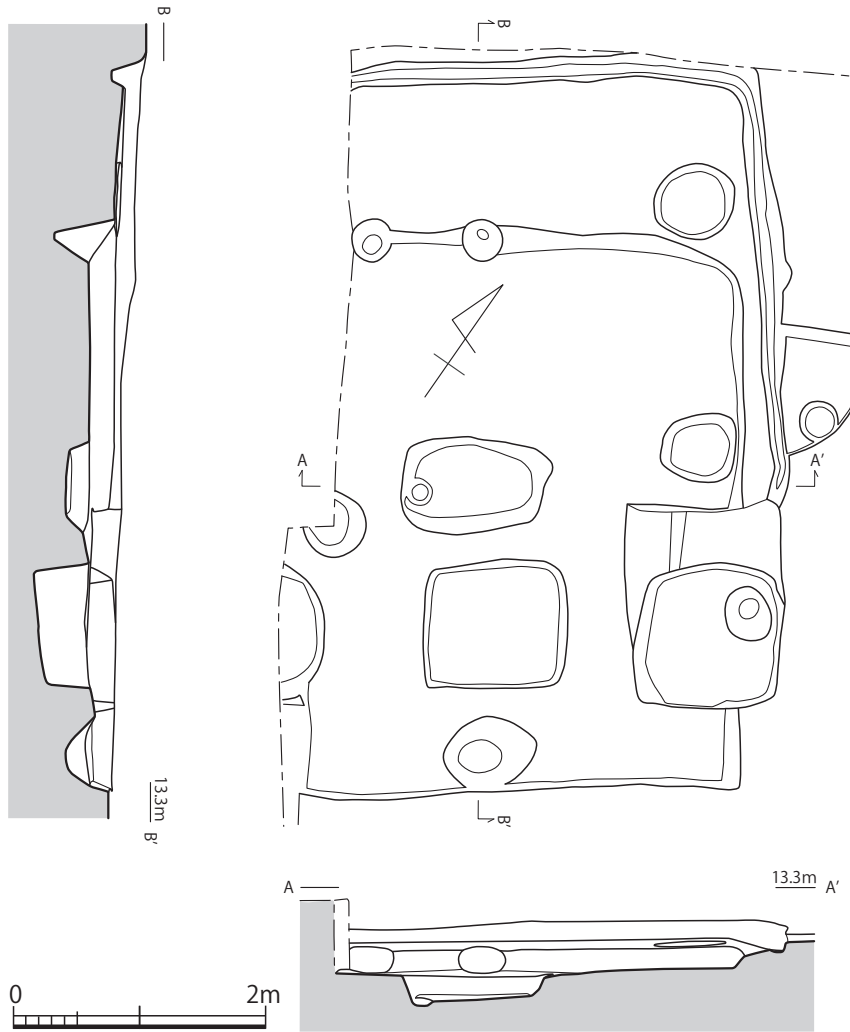
SI3 (第24図、図版10)

6次調査区の北端で検出した。南北軸582cm、東西軸は400cm以上、平面形は長方形を呈する。方位はN-35°-Wである。床面までの深さは20～40cmである。北辺から東辺にかけて幅15cm、深さ10cmの壁際溝を確認した。また、北辺に幅120cm、東辺に幅20cmのベッド状遺構をもつ。東辺中央付近で壁際溝およびベッド状遺構が途絶えるが、これはカクランによるものである。床面中央に隅丸方形の土坑があるが、検出面で多量の炭化物を確認しているため炉跡であると考えられる。SB8に切られる。

なお、南辺の中央に1基、東辺の中央と北側に各1基あるピットは掘立柱建物跡である可能性も考えられる。これらは直径や床面の標高が近似するほか、SB5、SB6を除く掘立柱建物跡の主軸とも平行もしくは直交するためである。今後、北側隣接地を調査する場合は留意したい。

出土遺物 (第25図、図版19)

27は壺の底部片で平底である。28～33は甕である。28は底部片で上げ底となる。29は頸部が湾曲し、口縁部は外反する。端部は平坦に収める。30は頸部が湾曲し、口縁部は外反して端部を薄く収める。31



第24図 6次調査 SI3 実測図 (1/60)

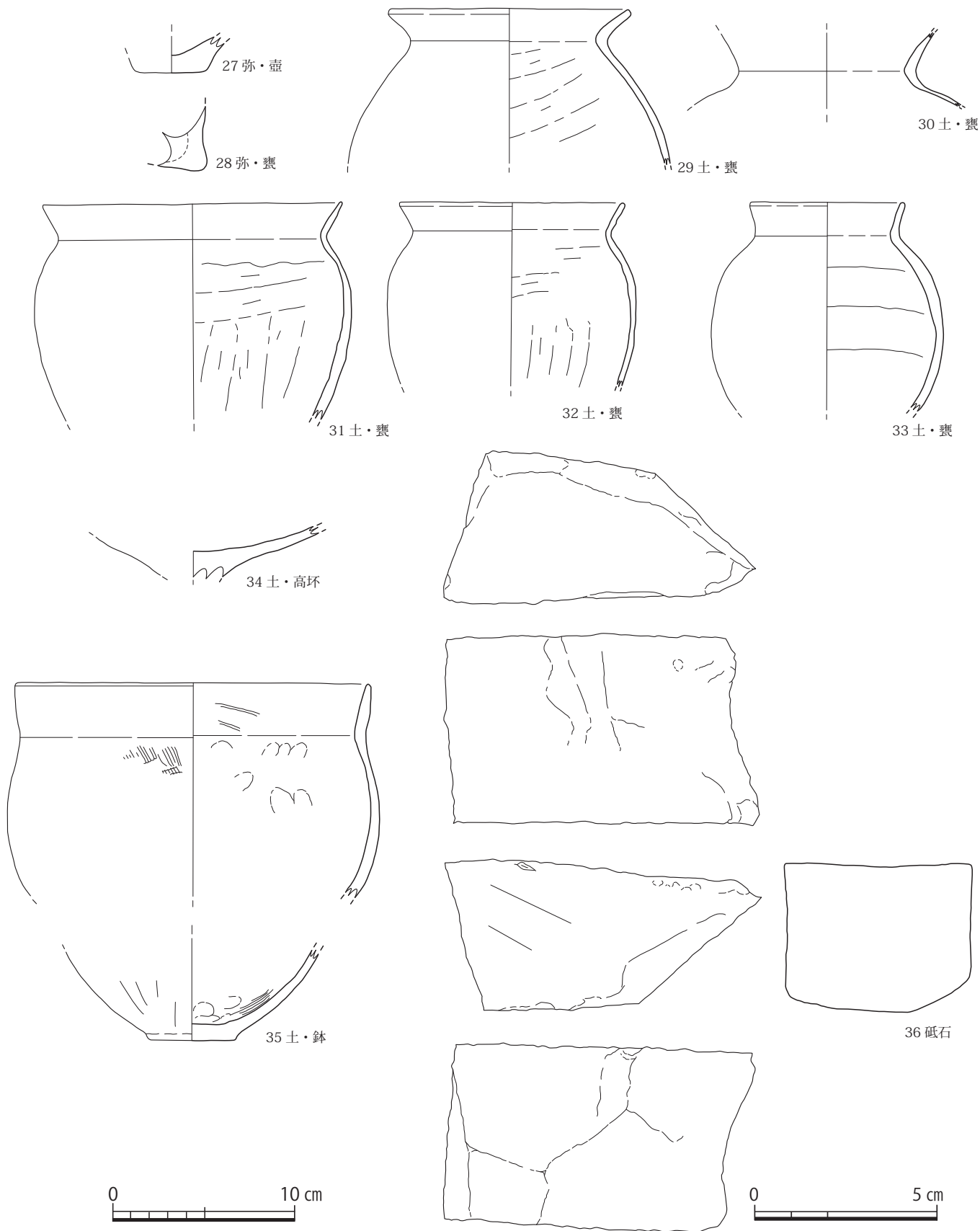
～32は頸部が湾曲し口縁部は外反するが、くびれは浅く、口径は胴部径とほぼ同じとなる。内面はケズリを施しており、器壁は薄い。33は頸部は湾曲し、口縁は緩やかに外反する。内面は横方向のケズリを施す。34は高坏であり、坏部の見込みである。35は鉢である。底面は平坦であり、胴部は内反しながら立ち上がる。頸部のくびれは浅く、口縁部はわずかに外反して立ち上がる。上半と下半で接合はしないが器壁の厚さ、焼成、調整などから同一個体ではなかろうか。36は砥石である。明確な砥面は1面のみである。

SI4 (第26図、図版11)

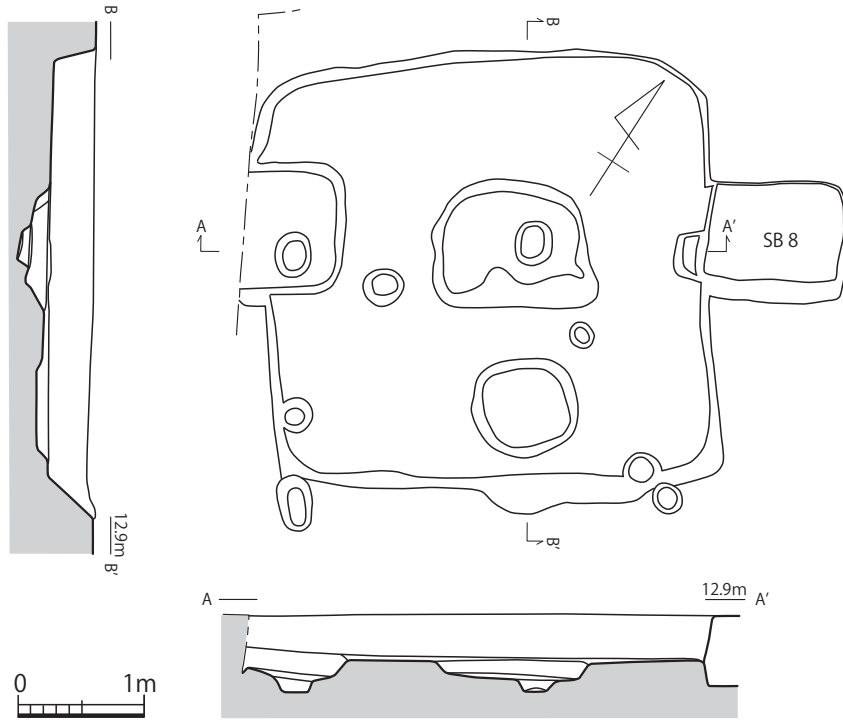
6次調査区の北側、SI3の南側で検出した。南北軸348cm、東西軸348cm、平面形は方形を呈する。方位はN-35°-Wである。床面までの深さは35cmである。SB3、SB8に掘り込まれる。遺物の大半が土師器だが、図化に耐えない須恵器坏や壺甕がわずかに出土しており、古墳時代後期の遺構と考えられる。

出土遺物 (第27図、図版19・20)

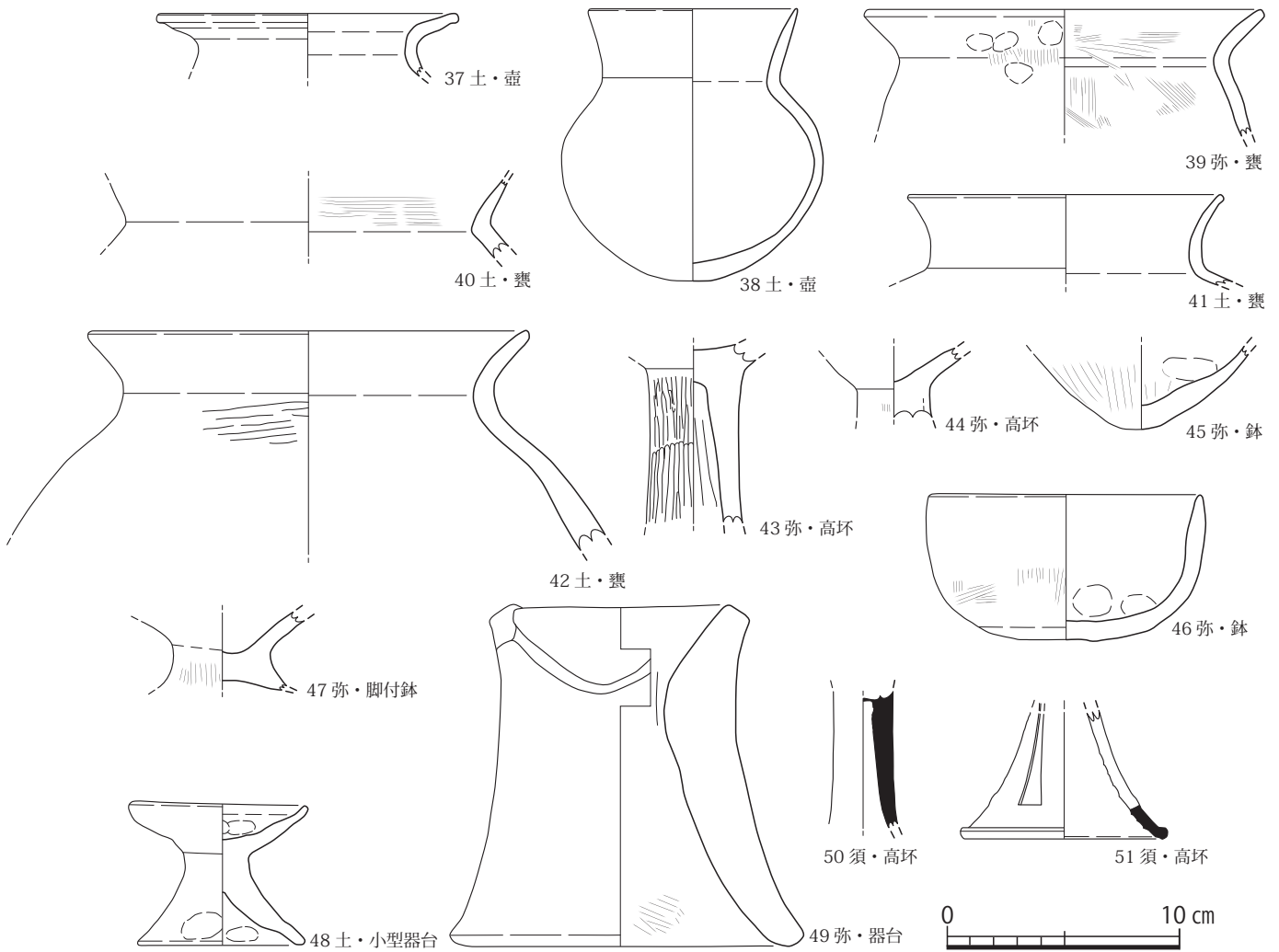
37～38は壺である。37は口縁が丸く外反する。38は口縁部が一部しか残存しないが他は全体的に残存する。底部は丸底、胴部は球形であり、わずかに肩が張る。頸部はなだらかに湾曲し口縁は外反して立ち上がる。端部は薄く収める。39～42は甕である。39は頸部がく字状に湾曲し、口縁部が外反す



第 25 図 6 次調査 S13 出土遺物実測図 (1/3・2/3)

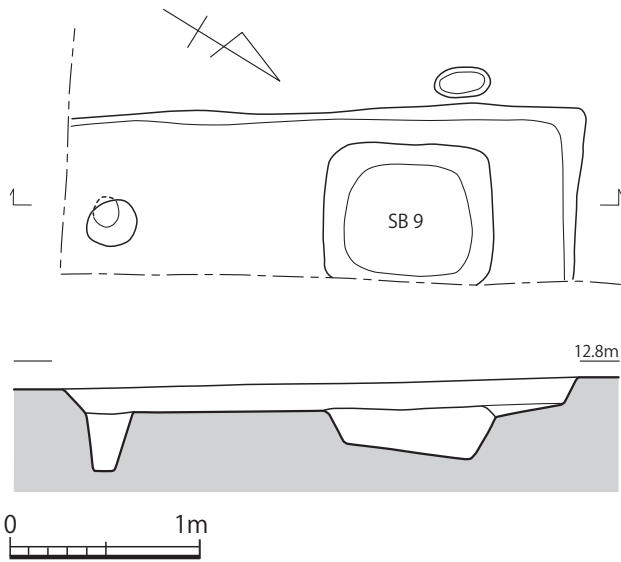


第26図 6次調査 S14 実測図 (1/60)



第27図 6次調査 S14 出土遺物実測図1 (1/3)

る。端部は平坦に収める。40は頸部がく字状であり、口縁部は短く外反する。端部は薄く収める。41は口縁部が外反する。端部はやや丸く収める。42は胴部から口縁部にかけて丸く湾曲する。口縁部は外反し、端部は丸く収める。43・44は高坏である。43は脚部の上半である。44は坏部と脚部の接合部である。45・46は鉢である。45は底部が丸底である。46は底面が平坦をなし、内反して口縁部は直立する。47は脚付鉢である。外面にオサエがある。48は小型器台である。脚部の器壁が厚い。49は器台である。



第28図 6次調査 SI5 実測図 (1/40)

裾部が薄くなりながら開く。50・51は須恵器高坏である。50は透かしの面で破断している。器壁の厚さ、焼成、透かしの位置から51と同一個体ではないかと考えられる。51は脚部が裾部に向かってゆるやかに開く。

SI5 (第28図、図版11)

6次調査区の南東隅で検出した。検出は一部だが、方形を呈し、床面が平坦であり、掘方が直線的に立ち上がることを考慮して竪穴建物と推定した。検出した西辺は280cm、北片は90cmである。方位はN-33°-Wである。床面までの深さは20cmである。土師器が出土しているが図化に耐えない。

SI6 (第29図、図版11)

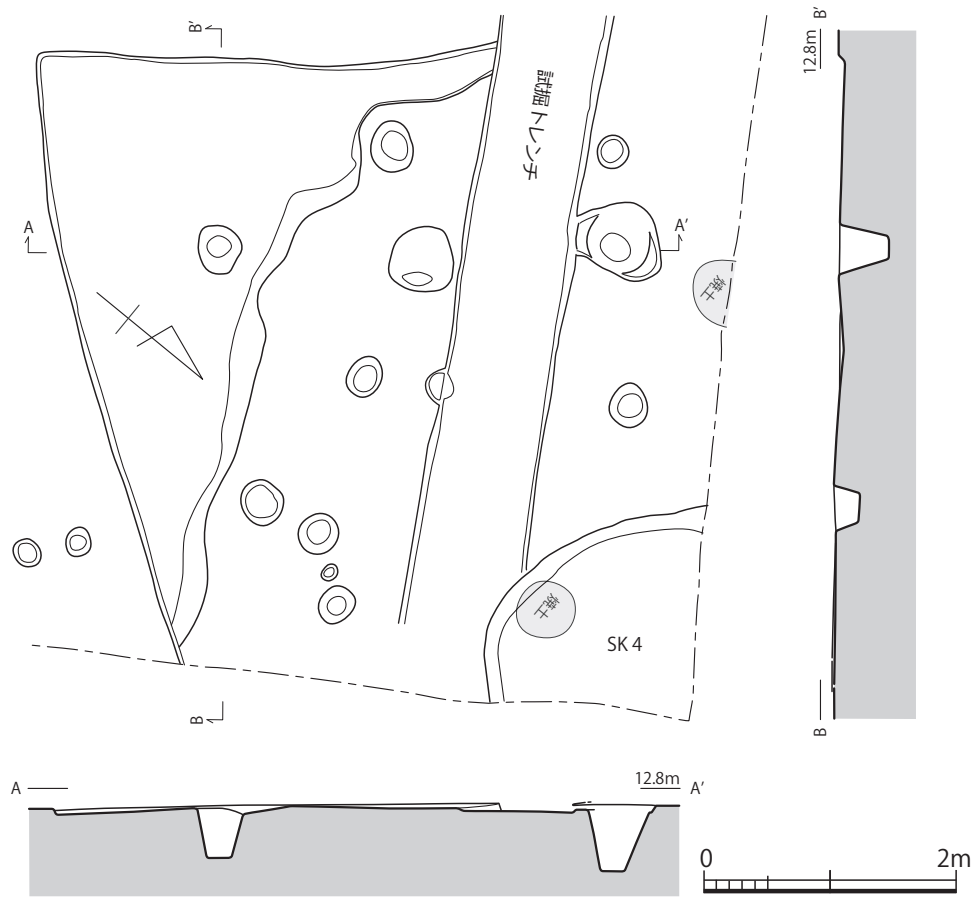
7次調査区の北東隅で検出した。全体的に削平されており、検出できたのは南西隅部を起点とした南西辺と南東辺の一部である。残存する南西辺は370cm、南東辺は500cmである。方位はN-45°-Wである。床面までの深さは3cmである。床面に焼土を2か所確認しているが、平面形を正方形と想定すると北西辺と北東辺が位置する辺りとなろう。カマドの存在を想起させるが、カマドの袖を形成していた白色粘土の痕跡は確認していない。また、焼土痕が2か所であることからSI6とは異なる竪穴建物がもう1基存在していた可能性がある。主柱穴と思しきピットから土師器が出土しているが図化に耐えない。

SI7 (第30図、図版12)

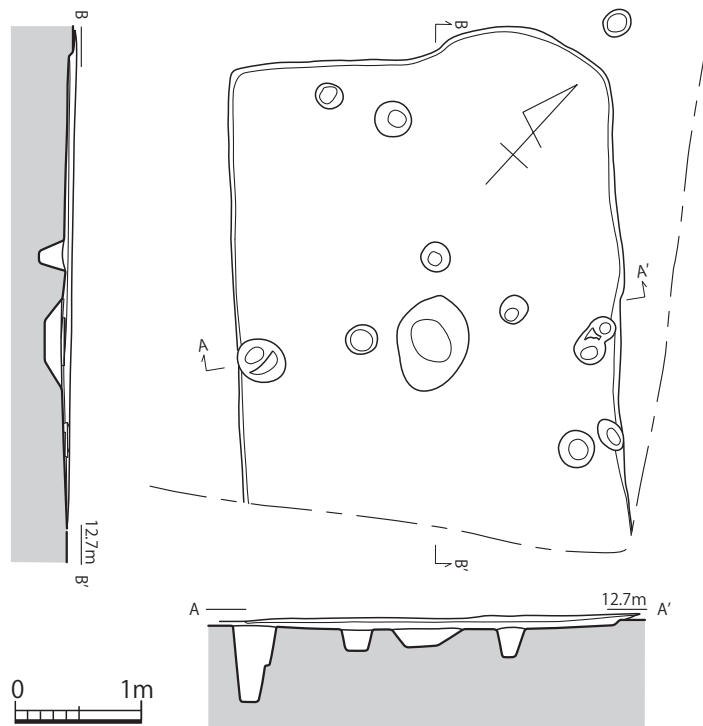
7次調査区の南東隅で検出した。長軸390cm以上、短軸300cm、平面形は長方形を呈する。方位はN-45°-Wである。床面までの深さは5cmである。中央部の楕円形の土坑からは炭化物が出土しており、炉跡であると考えられる。土坑の両隣にピットが各1基あるが主柱穴であろうか。炉跡から土師器が出土しているが図化に耐えない。

SI8 (第31図、図版12)

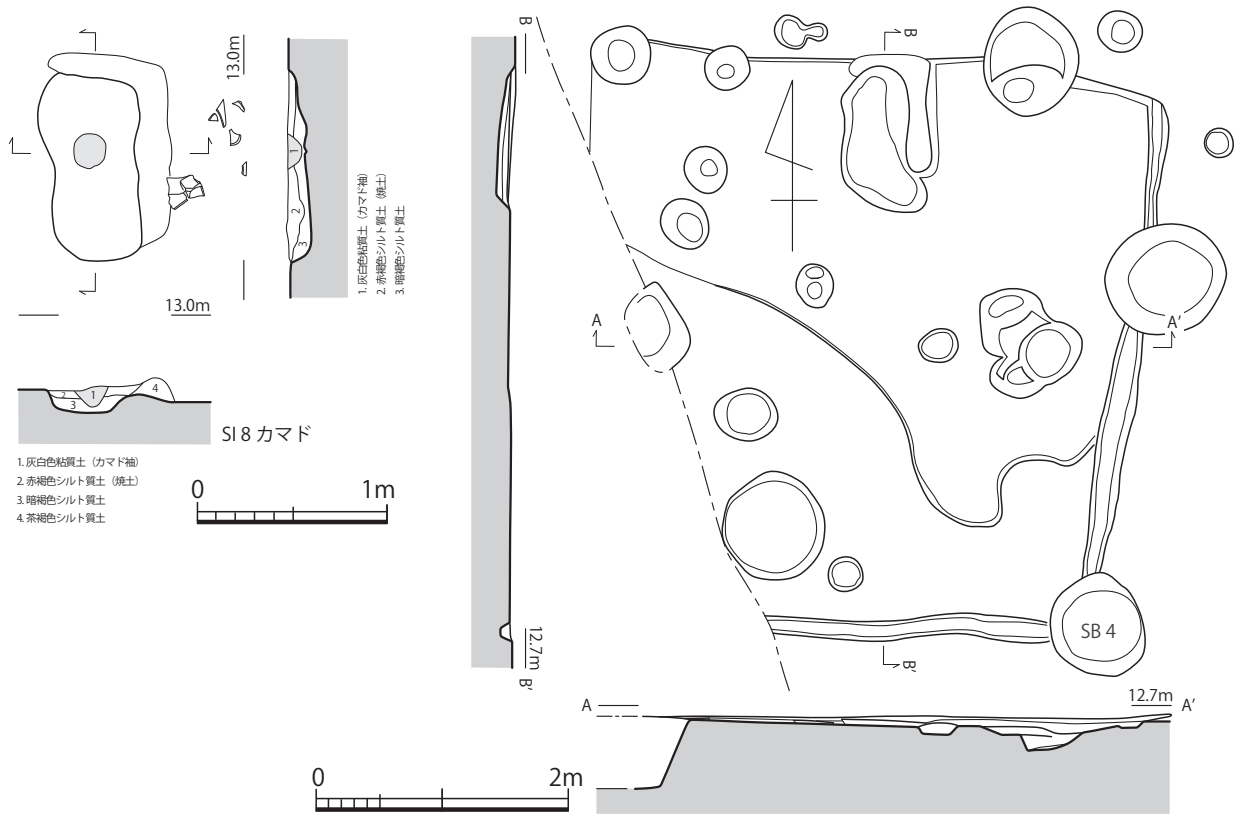
7次調査区の西端で検出した。南北軸468cm、東西軸450cmである。平面形は方形を呈する。方位はN-5°-Eである。削平が著しく、壁際溝を除けば南半は残存していない。床面までの深さは5cmである。東辺と南辺には幅25cm、深さ5cmの壁際溝が廻る。北辺中央にはカマドの袖の一部と焼土痕があり、カマド下層に楕円形の土坑を確認した。SI4に掘り込まれる。カマドの西隣から土師器の甕が出土した。



第 29 図 7 次調査 SI6 実測図 (1/60)



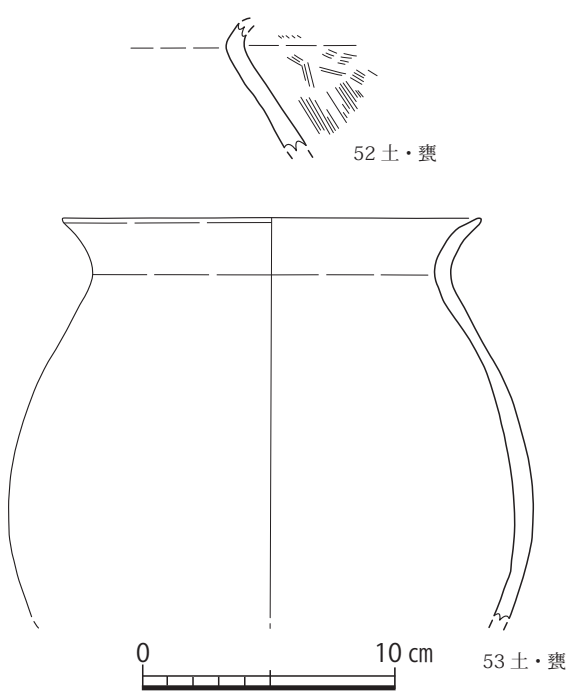
第 30 図 7 次調査 SI7 実測図 (1/60)



第 31 図 7 次調査 SI8 実測図 (1/40・1/60)

出土遺物 (第 32 図、図版 20)

52・53 は甕である。52 は頸部が湾曲し、肩はなだらかである。53 は頸部が湾曲し、口縁部が外反する。端部は薄く収める。肩の張りは弱い。



第 32 図 7 次調査 SI8 出土遺物実測図 (1/3)

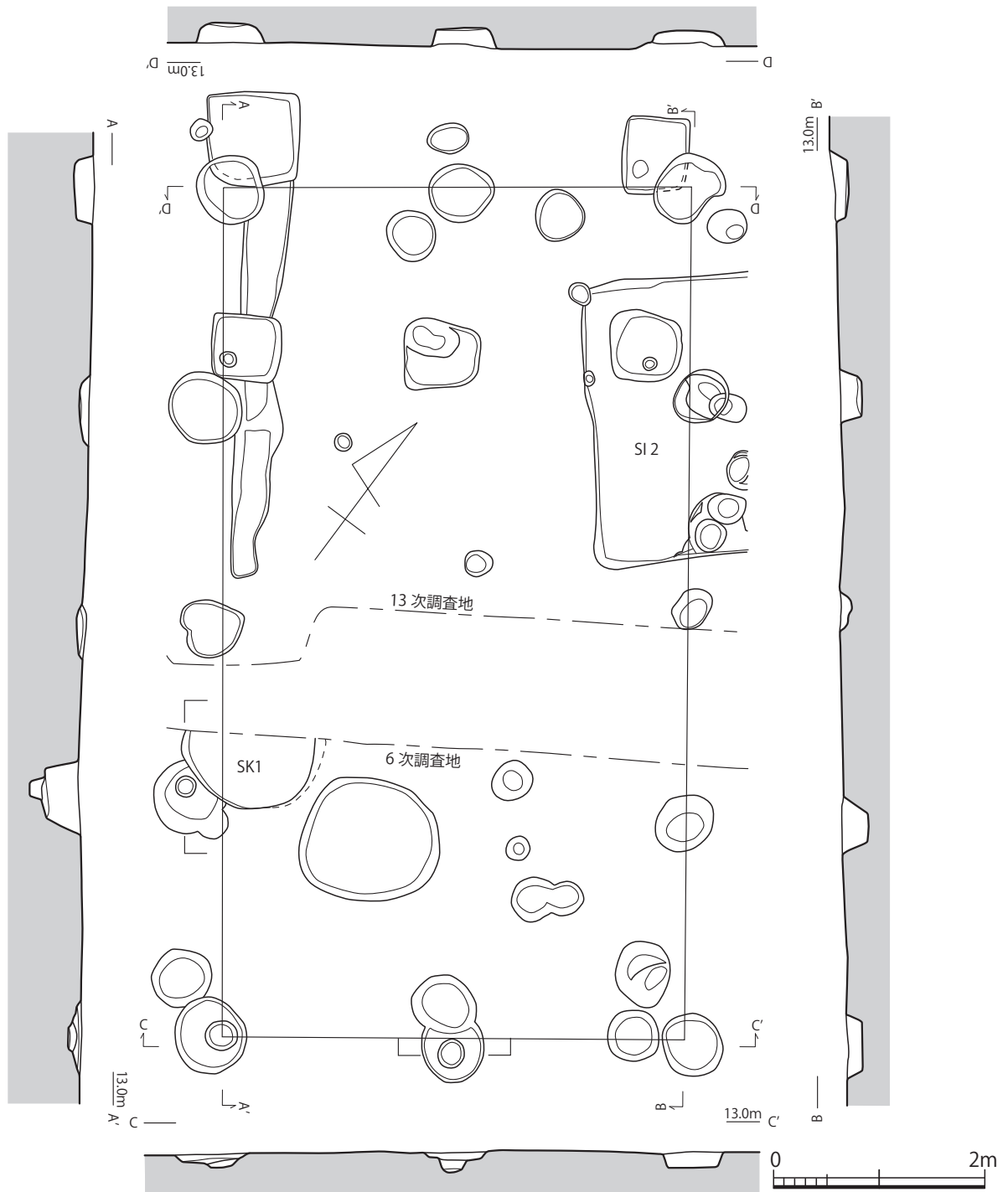
(2) 掘立柱建物

SB1 (第 33 図、図版 13)

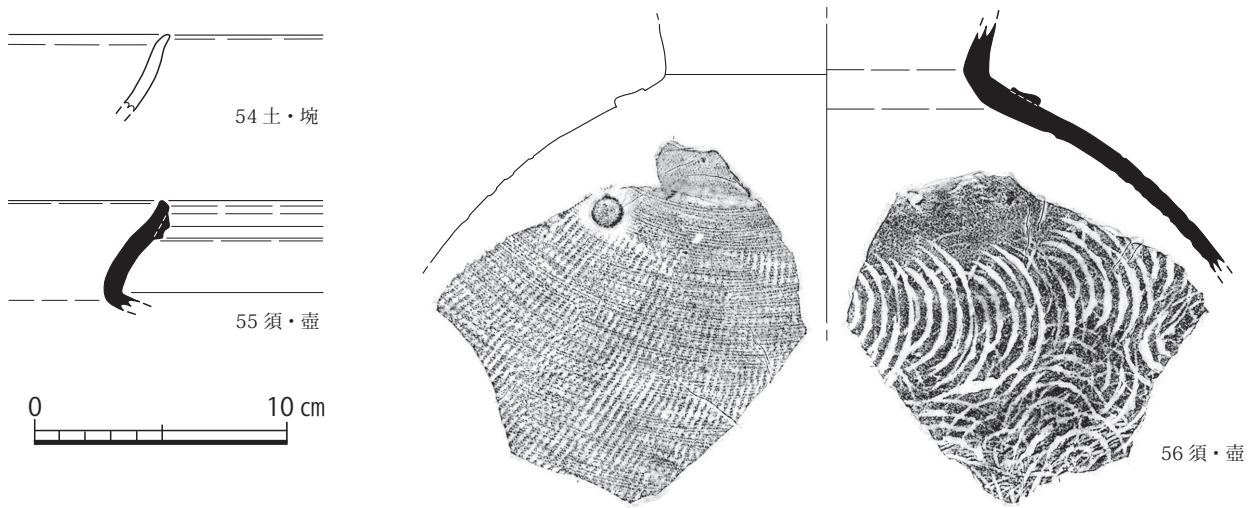
6 次調査区と 13 次調査区を跨いで検出した。桁行 4 間×梁行 2 間である。心々間の距離は桁行 800cm、梁行 430cm であり、柱間寸法は桁行 190～210cm、梁行 210～230cm である。主軸の方位は N-37° -W である。径 38～70cm、深さ 5～20cm の円形柱穴で構成される。柱痕から柱は直径 15cm と考えられる。北側梁行の柱穴 2 基は SB7 の柱穴と切り合い関係にあるが、検出面の観察では SB1 が SB7 を切っているように見受けられた。円形柱穴の方が先行すると思うほうが自然であろうが、出土遺物は両者とも古墳時代のものしかなく、明確な時期差は読み取れないため今後の検証を要する。ほか、SI2、SB2、SK1 を掘り込む。

出土遺物（第34図、図版20）

54は埴である。口縁部は内反し、端部で外方につまみ出す。55・56は須恵器壺である。55は口縁部が外反し、端部はやや内反する。外面は肥厚しており、断面形がM字状を呈する。56は頸部から肩部であり、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕をもつ。外面の肩部の頸部に近い箇所に円形張り付け文をもつ。



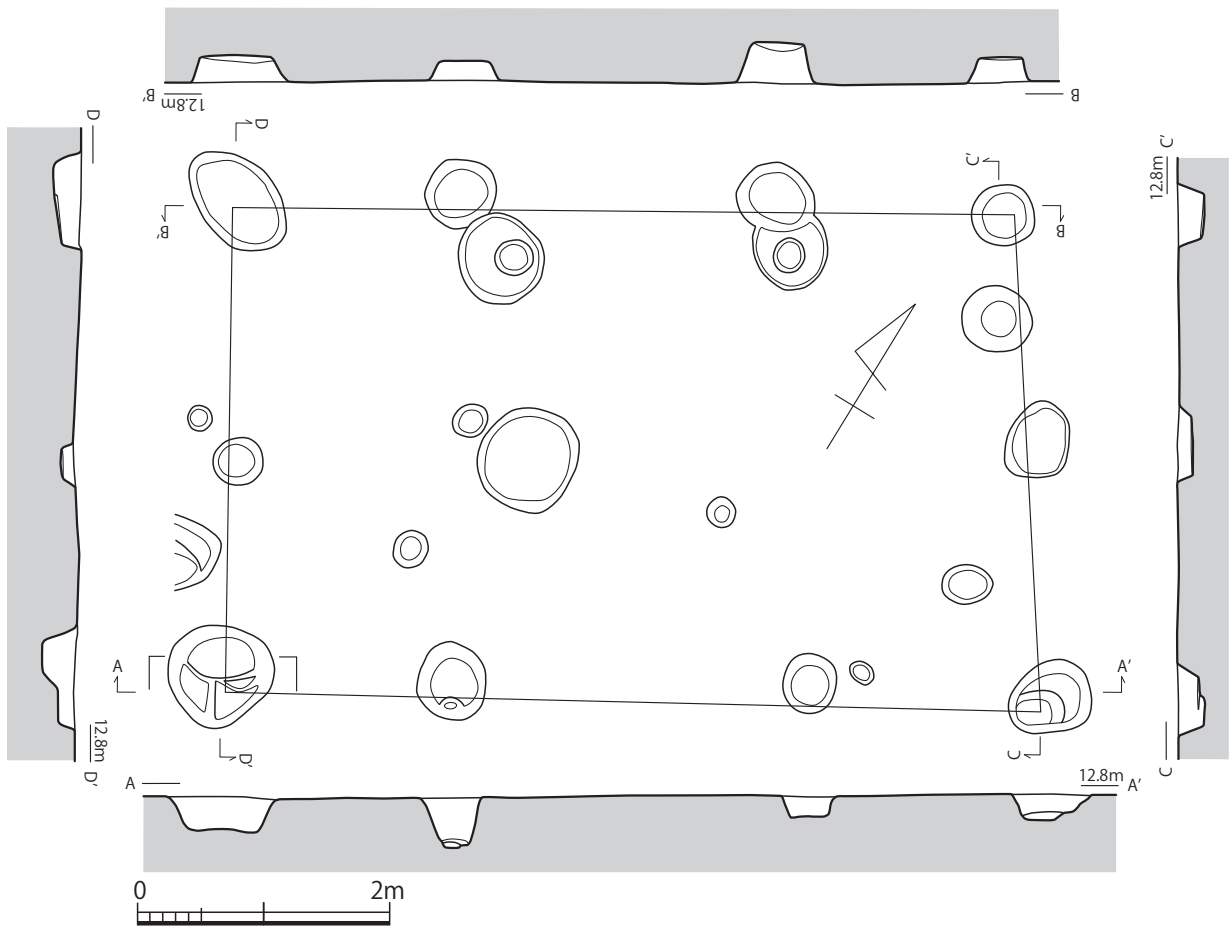
第33図 6・13次調査 SB1 実測図 (1/60)



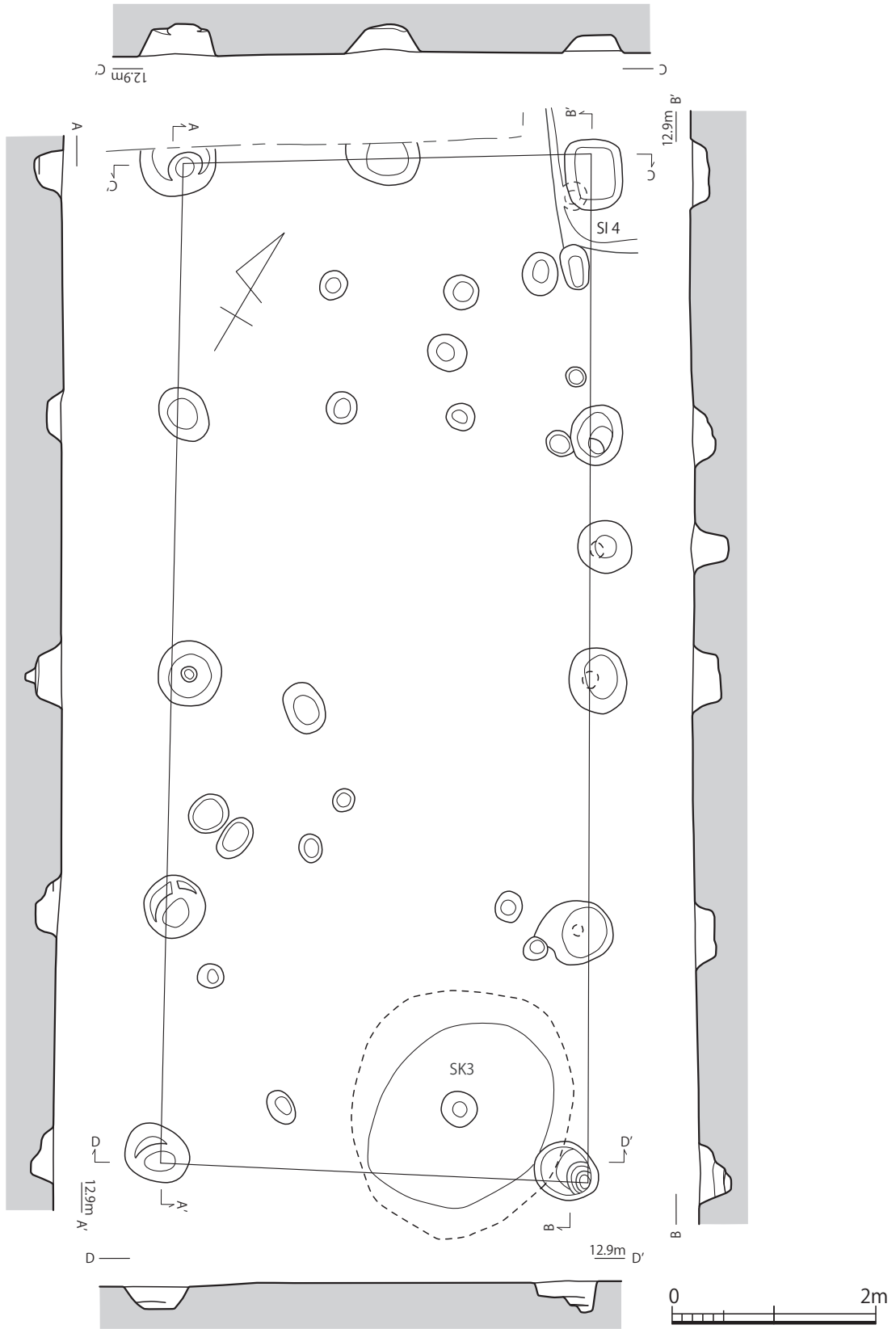
第 34 図 13 次調査 SB1 出土遺物実測図 (1/3)

SB2 (第 35 図、図版 13)

6 次調査区中央付近で検出した。桁行 3 間×梁行 2 間である。心々間の距離は桁行 620～655cm、梁行 365～395cm であり、柱間寸法は桁行 180～280cm、梁行 150～230cm である。主軸の方位は N-60°-E である。径 40～80cm、深さ 7～40cm の円形柱穴で構成される。柱痕から柱の直径 15～20cm と推測できる。東側の梁行北端の柱穴がやや西側によっているため、平面形は台形状を呈する。また、桁行中央は柱穴間隔が広くなる。SB1 とは一部柱穴が切り合い関係にあり、SB1 に先行するものと考えられる。出土遺物に土師器が少数あるが図化に耐えない。



第 35 図 6 次調査 SB2 実測図 (1/60)



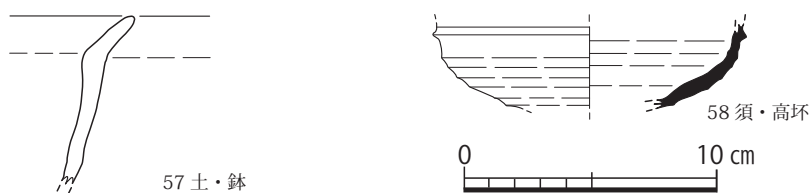
第36図 6次調査 SB3 実測図 (1/60)

SB3 (第36図、図版13)

6次調査区中央付近で検出した。南側の梁行中央の柱穴は確認できていないが、6次調査区の南側に続く7次調査区では桁行方向の柱穴を確認していないため、桁行4間×梁行2間であると考えられる。心々間の距離は桁行984～1014cm、梁行400～420cmであり、柱間寸法は桁行240～260cm、梁行200cmである。土層で柱の抜き取り痕を確認しており、底面を柱の直径とすれば10cmとなる。主軸の方位はN-30°-Wである。径40～63cm、深さ18～30cmの円形柱穴で構成される。SI4とSK3を掘り込む。

出土遺物 (第37図、図版20)

57は鉢である。口縁部は外反する。58は須恵器高坏の坏部であろう。



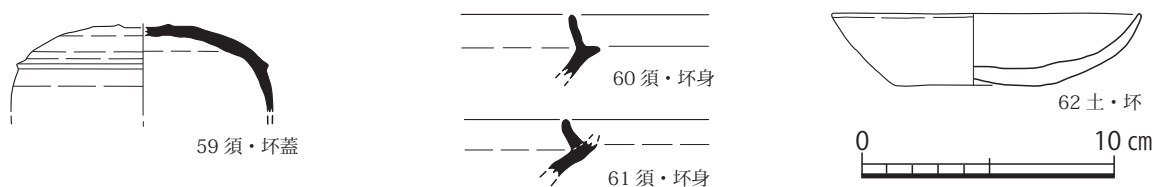
第37図 6次調査 SB3 出土遺物実測図 (1/3)

SB4 (第39図、図版14)

6次調査区南西隅から7次調査区西端にかけて検出した。桁行6間×梁行2間以上である。心々間の距離は桁行1200cm、梁行360cmであり、柱間寸法は桁行175～210cm、梁行185～190cmである。主軸の方位はN-32°-Wである。径70～80cm、深さ20～60cmの円形柱穴で構成される。土層では柱の抜き取り痕を確認しており、柱の直径は10～15cmと考えられる。埋土は主に暗褐色と褐茶色の2種であり、大部分は2層であるが、一部で1層もしくは3層となる。SI8を掘り込む。

出土遺物 (第38図、図版20)

59は須恵器坏蓋である。60・61は須恵器坏身である。62は土師器坏である。底面は平底であり、口縁部にかけて内反しながら立ち上がる。

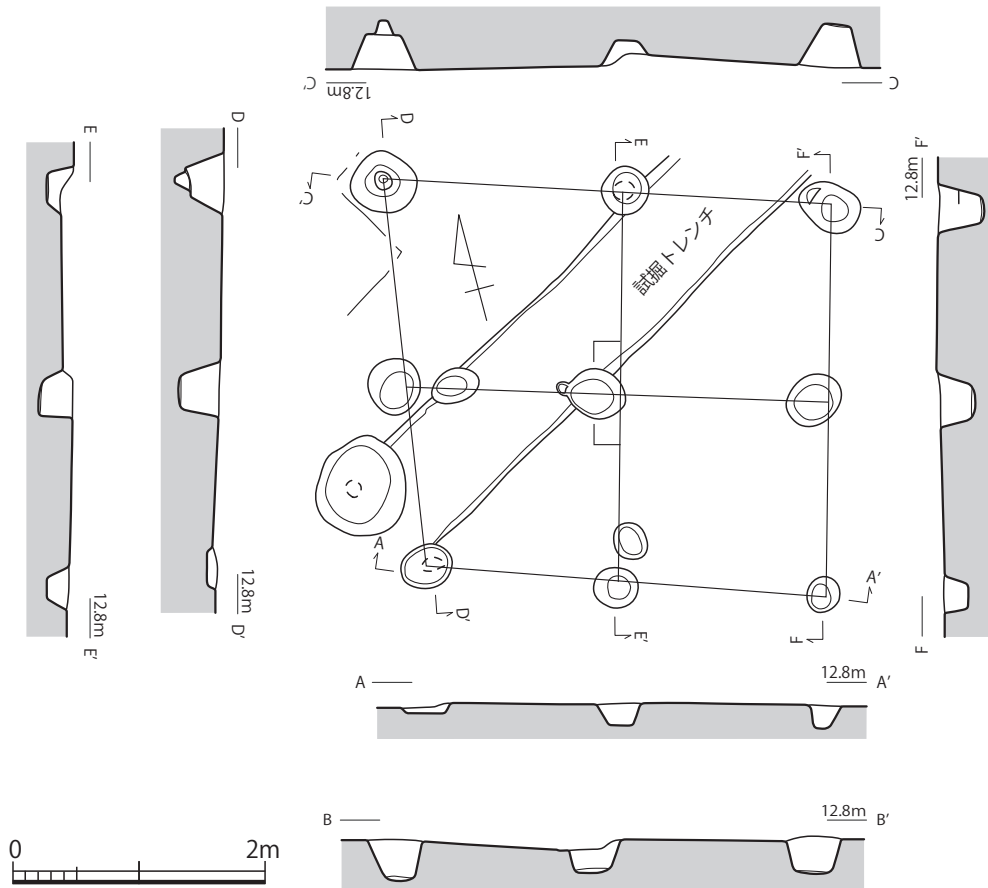


第38図 6・7次調査 SB4 出土遺物実測図 (1/3)

SB5 (第40図、図版14)

7次調査区の中央北側付近で検出した。2間×2間の総柱である。心々間の距離は南北軸306cm、東西軸320～354cmであり、柱間寸法は桁行150～190cmである。主軸の方位はN-15°-Eである。総

柱のSB5とSB6のみ方位がその他の掘立柱建物と大きく異なる。径23～51cm、深さ6～35cmの円形柱穴で構成される。西辺は南側を内側へ振るため平面形は台形を呈する。出土遺物に土師器があるが図化に耐えない。主軸の方位や規模からSB6と同時期と考えられる。



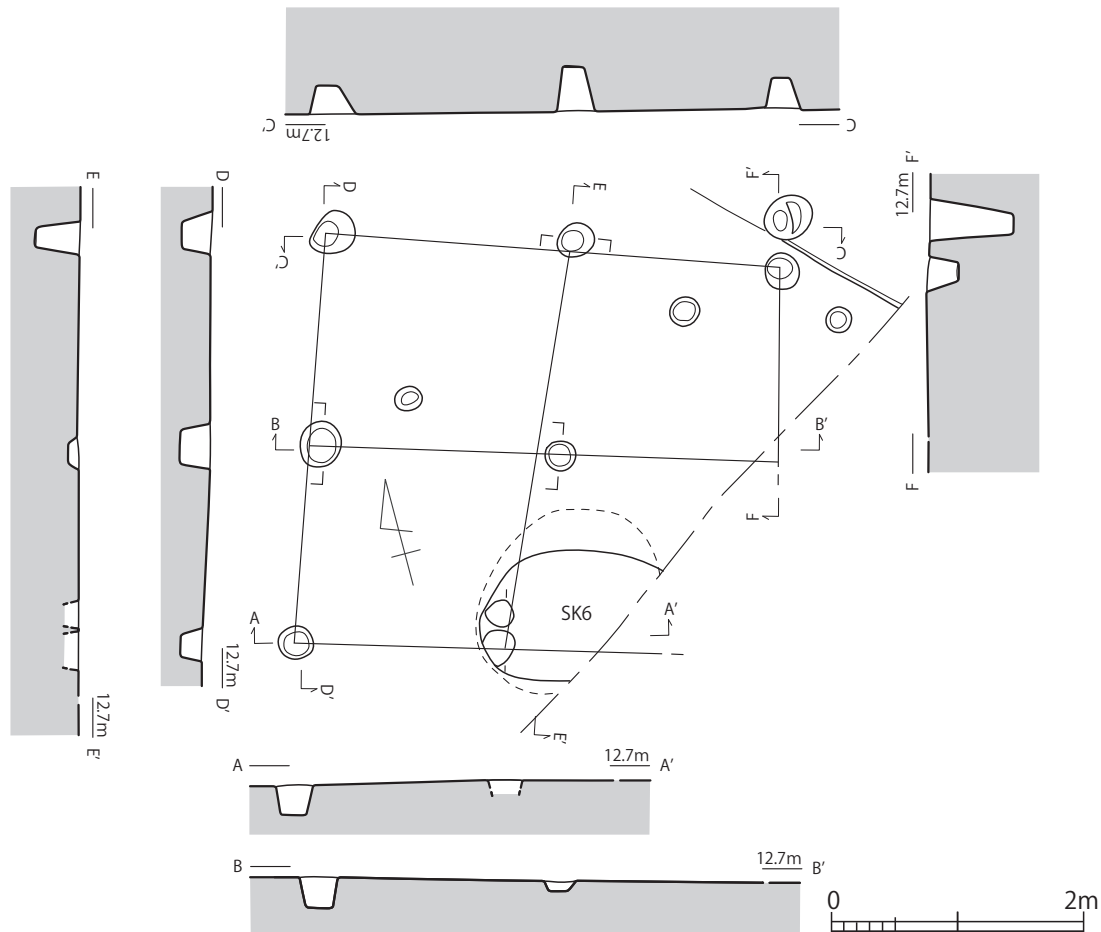
第40図 7次調査 SB5 実測図 (1/60)

SB6 (第41図、図版15)

7次調査区の中央南側付近で検出した。東辺の柱穴を全て検出できていないが、SB5と同じく2間×2間の総柱であると考えられる。心々間の距離は南北軸324cm、東西軸360cmであり、柱間寸法は162～192cmである。方位はN-18°-Eである。径30～36cm、深さ6～36cmの円形柱穴で構成される。SK6を掘り込む。小片だが須恵器環の口縁部が出土しており、6世紀後半以降と考えられる。

SB7 (第42図、図版15)

13次調査区の西側で検出した。桁行3間以上×梁行2間である。心々間の距離は桁行660cm以上、梁行400cmであり、柱間寸法は桁行155～290cm、梁行192～204cmである。主軸の方位はN-36°-Eである。1辺65～90cm、深さ20～40cmの方形柱穴で構成される。土層では柱の抜き取り痕を確認しており、柱の直径は10～15cmである。埋土は主に暗褐色シルト質土と褐色シルト質土の2種が使われており、堆積状況が互層のように見受けられるものもある。



第 41 図 7 次調査 SB6 実測図 (1/60)

SB1 とは一部切り合い関係にあり、検出面においては SB1 が SB7 を掘り込んでいられるように見受けられた。土層観察の結果は良好でなく、調査担当者として遺憾ながら判別はつかない。しかし、県道直方行橋線や東九州自動車道建設地の発掘調査で確認されている隅丸方形の柱穴で構成された 7 世紀後半以降の大型掘立柱建物と主軸が共通していることは時期を考えるうえで重要な事実であろう。円形柱穴のものも主軸は共通するため近似する時期とみられるが、官衛的性格をもつ隅丸方形の柱穴の方が後出と考えたほうが自然ではなかろうか。出土遺物は SB1、SB7 ともに少なく新旧関係ははっきりしない。SB1 が中世の遺構である可能性もあるが、主軸の方位の共通性や今回の調査地において中世の遺構と明確に言えるものは後述する SK7 のみであることを鑑みると低いではなかろうか。

出土遺物 (第 43 図、図版 20)

63・64 は高坏である。63 は脚部が直立的で裾部に向かって緩やかに開く。64 は中実の脚部である。短脚であり、稜をつけて裾部は開く。65 は甕である。外面はなだらかに外反するが内面はく字状を呈する。66 は甑の把手である。67～69 は須恵器である。67 は坏蓋であり、端部をわずかにつまみ出す。68 は高坏の口縁部であろうか。坏部の屈曲部に沈線を 1 条廻らす。口縁部は外反する。69 は壺の肩部であろうか。外面に格子目タタキ、内面に同心円当て具痕をもつ。外面には微量な自然釉が斑状にかかる。

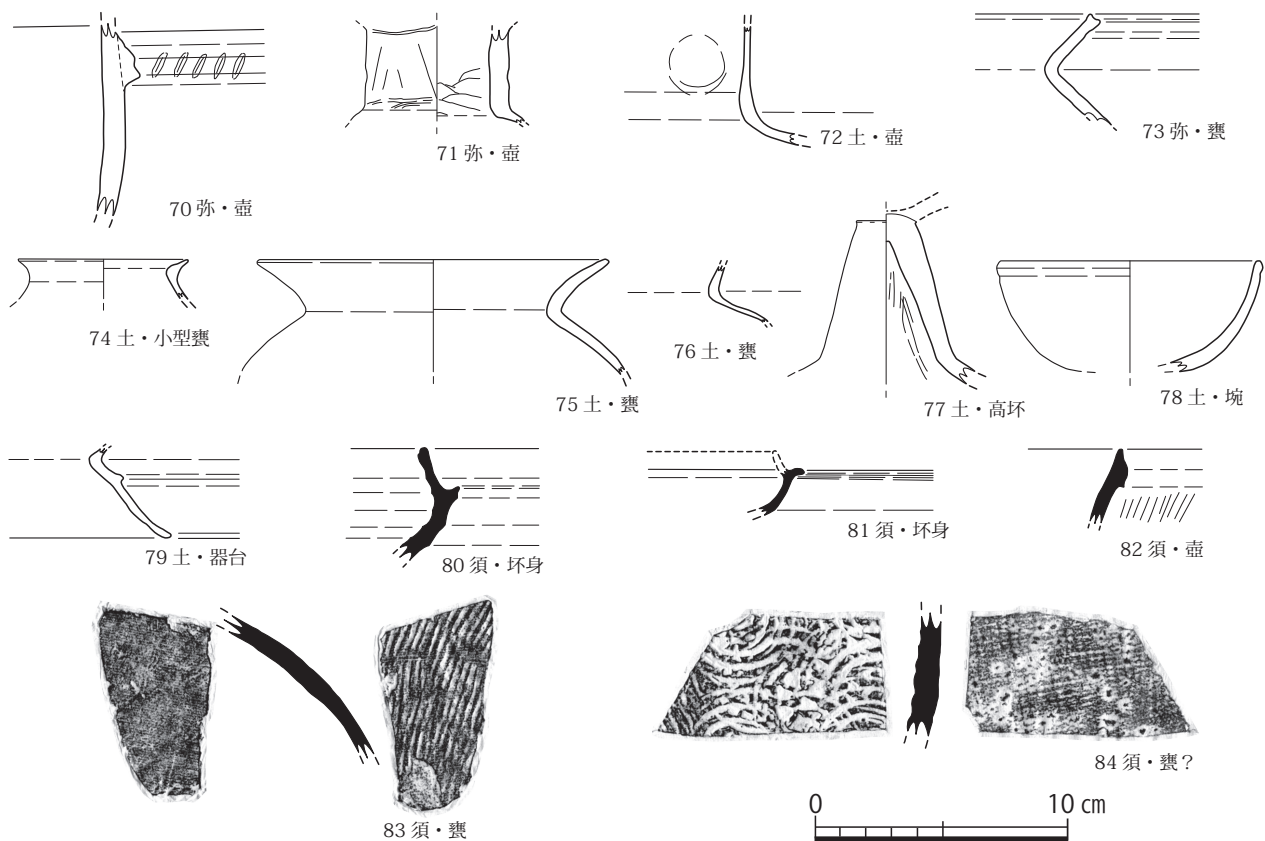
SB8 (第 44 図、図版 15・16)

6 次調査区北側から 13 次調査区東側にかけて検出した。桁行 5 間×梁行 2 間である。心々間の距離は桁行 760cm、梁行 420cm であり、柱間寸法は桁行 180～210cm、梁行 200～210cm である。主軸の

方位は N-59° -E である。深さ 50～80cm の隅丸方形の柱穴で構成される。土層で柱の抜き取り痕を確認しており、柱の直径は 10～20cm である。埋土は暗褐色シルト質土と黄褐色シルト質土の 2 種が用いられるが SB7 と比較すると全体的に 1 層の単位が厚い。一部の柱穴はブロックの混入具合を互層のように分層することも可能だろうが担当者によって判断が分かれるところであろう。SI3 と SI4 を掘り込む。

出土遺物 (第 45 図、図版 20・21)

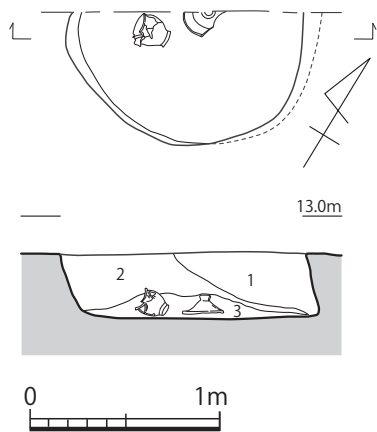
70～72 は壺である。70 は胴部であろうか。断面 M 字状の突帯を廻らし、突帯には刻み目を施す。71 は二重口縁壺の頸部であろう。72 は口縁部が薄く直立する。73～76 は甕である。73 は口縁部がく字状に外反し、端部は断面 M 字状に収める。74 は口縁部が短く外反する。75 は口縁部がく字状に外反しながら薄くなり、端部は丸く収める。76 は頸部が湾曲し、口縁部は短く外反するとみられる。77 は高坏の脚部である。上端には坏部の剥離した痕跡がある。裾部に向かって直線的に開き、屈曲部をもって裾部が広がる。78 は埴である。底面は丸底であろう。内反しながら立ち上がる。79 は鼓形器台である。80～84 は須恵器である。80 は坏身で受け部は短く、立ち上がりは長い。81 は坏身であるが、立ち上がりを欠く。82 は壺の口縁部である。外反しながら立ち上がるが端部はやや内反する。外面の口縁下部が肥厚する。83 は甕である。外面に平行タタキ、内面には当て具による円形の凹凸をもつ。84 は甕であろうか。外面に格子目タタキ、内面に同心円当て具痕をもつ。



第 45 図 6・13 次調査 SB8 出土遺物実測図 (1/3)

SB9 (第 46 図、図版 16)

6 次調査区南東側で検出した。桁行 2 間以上×梁行 2 間である。心々間の距離は桁行 485cm 以上、梁行 385cm であり、柱間寸法は桁行 230～240cm、梁行 195cm である。主軸の方位は N-59° -E である。

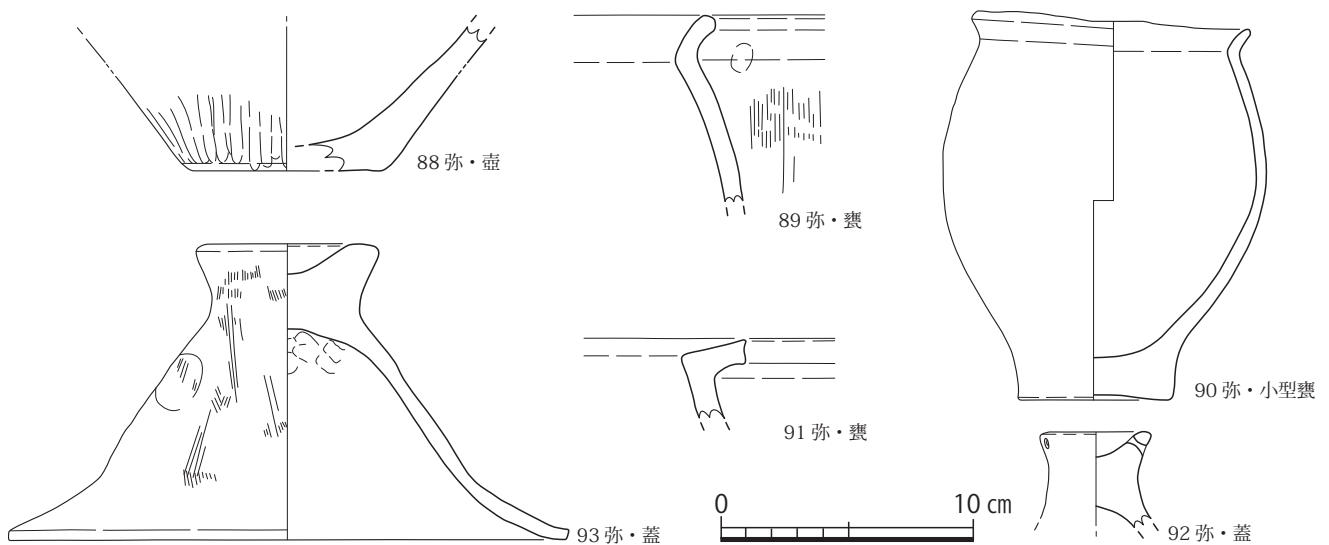


第48図 6次調査 SK1 実測図 (1/40)

(3) 土坑

SK1 (第48図、図版16)

6次調査区の北端で検出した。平面形は円形を呈するものと考えられる。検出面の直径125cm、深さ35cmを測る。底面は平坦であり、断面形は平行四辺形であるが、三角フラスコ状の掘方の片方が崩落したものか。底面中央付近から甕と蓋が完形に近い形で出土した。甕は横倒しになっていたものの、蓋は水平になっており、埋置された可能性もある。弥生時代中期の貯蔵穴であろう。



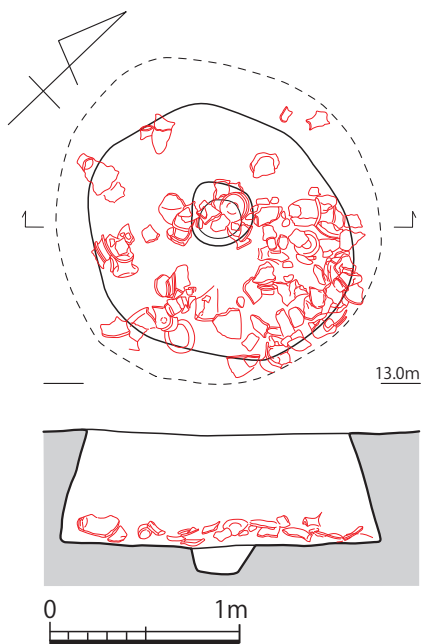
第49図 6次調査 SK1 出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第49図、図版21)

88は壺である。底部は平坦である。89～91は甕である。89は口縁部が短く外反する。90はほぼ完形である。底面はわずかに上げ底である。口縁部は短く外反する。91は口縁部の断面がL字状である。端部は断面形をM字状に収める。92・93は蓋である。92は摘み部に2ヶ所穿孔する。93は摘み部が中空であり裾部はなだらかに開く。

SK2 (第50図、図版17)

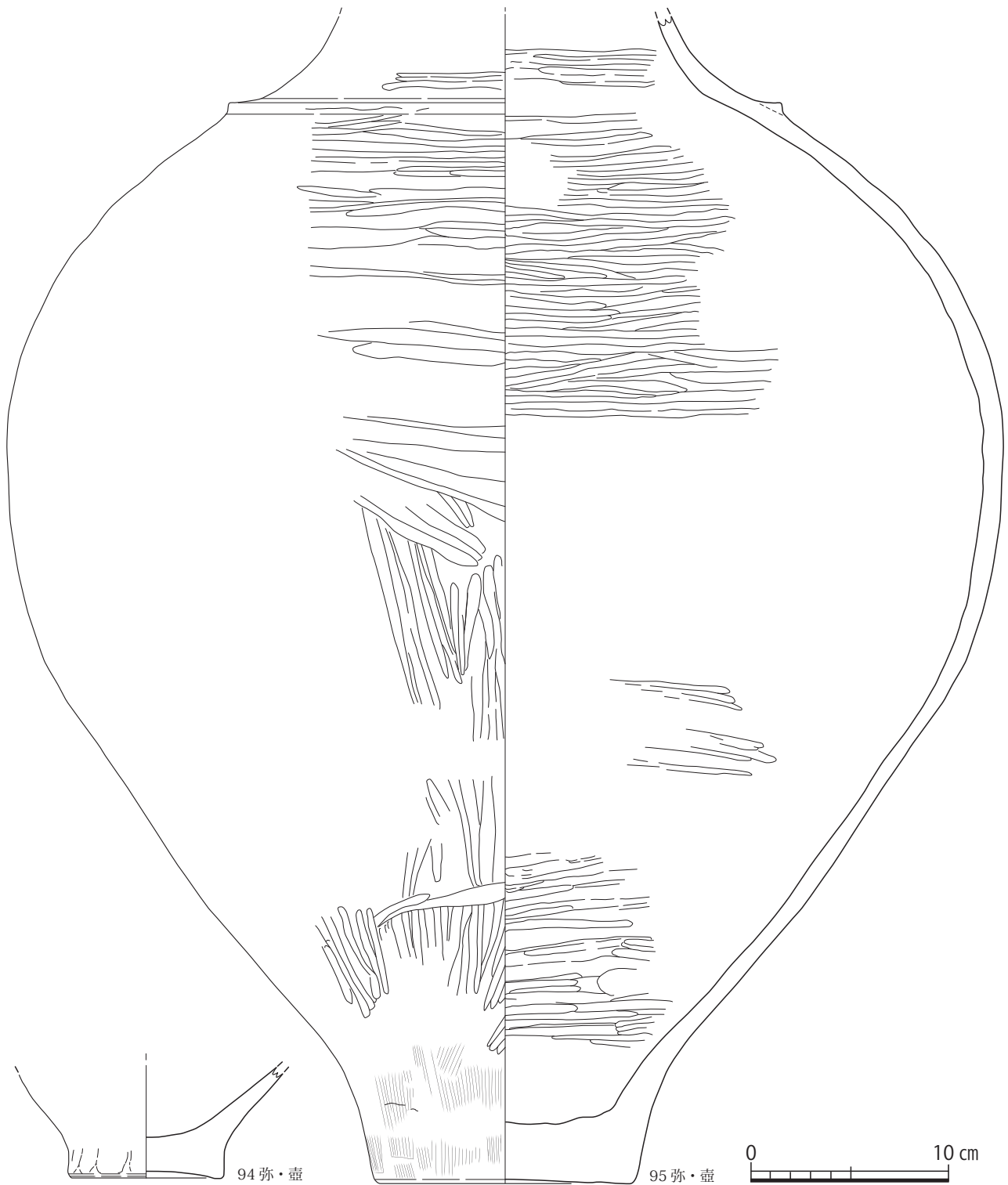
6次調査区東側中央付近で検出した。平面形は楕円形で長軸150cm、短軸120cm、深さ60cmを測る。断面形は三角フラスコ状である。床面は平坦であり、中央付近に柱穴を確認している。底面から廃棄されたとみられる弥生土器が多量に出土した。弥生時代中期の貯蔵穴であろう。



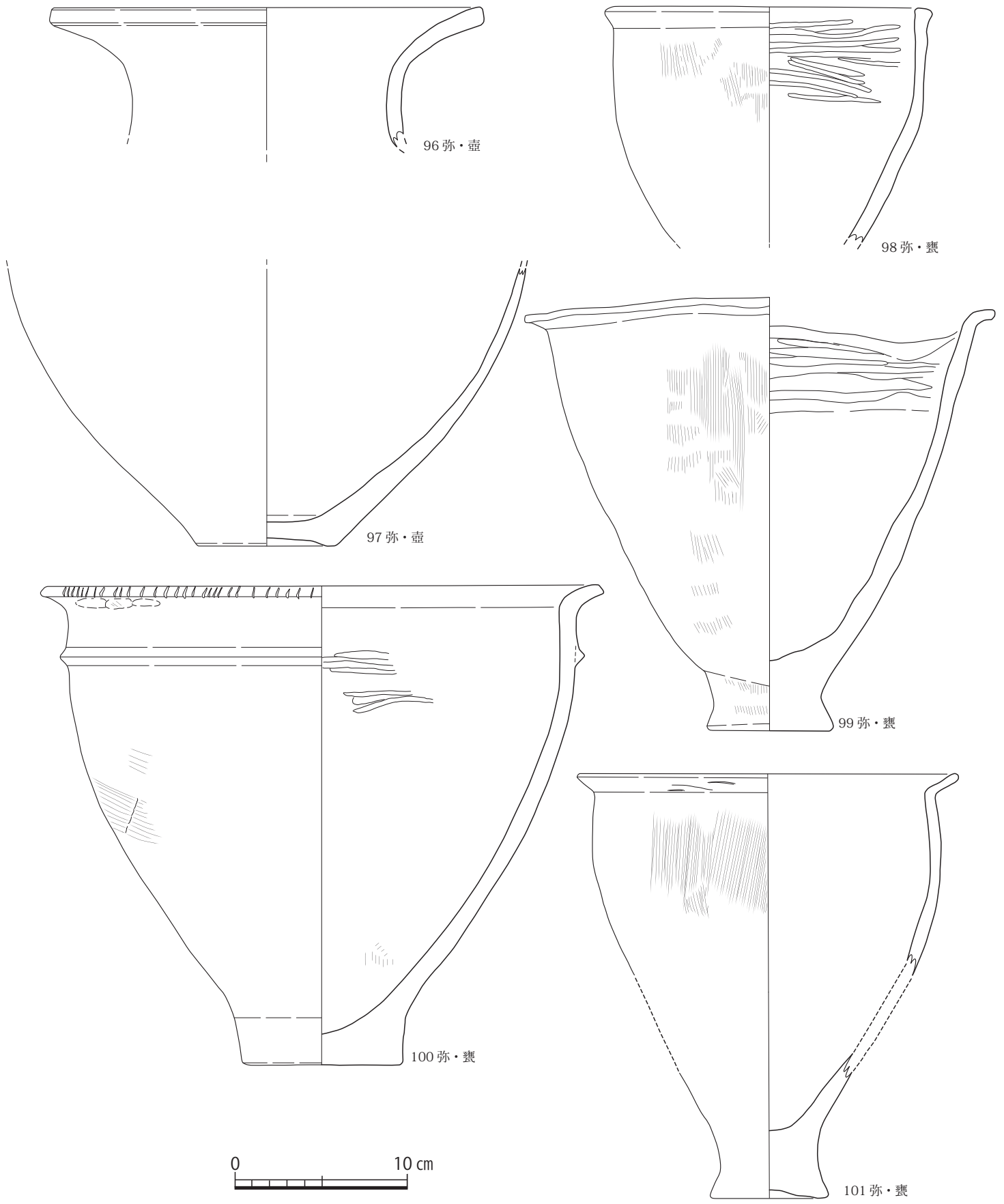
第50図 6次調査 SK2 実測図 (1/40)

出土遺物 (第 51 ~ 53 図、図版 21・22)

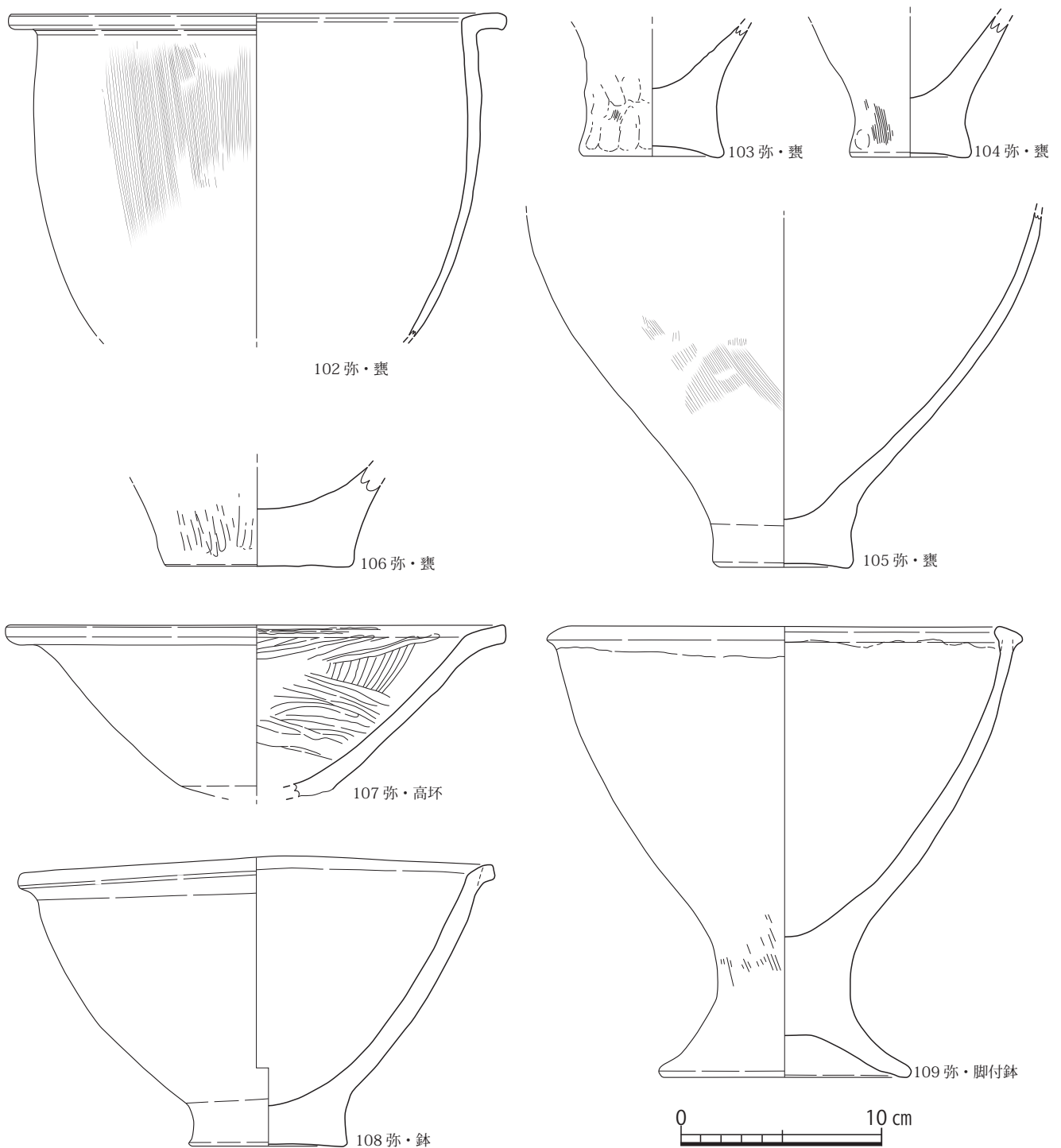
94 ~ 96 は壺である。94 は底部であり、上げ底となる。95 は口縁部を完全に欠く。底面はほぼ平坦である。肩部には断面三角形の突帯を廻らす。底部外面は縦方向のハケ調整だが、胴部下半は縦方向のミガキ、上半は横方向のミガキを施す。内面は底部から頸部まで横方向のミガキを施す。96 は口縁部であり、



第 51 図 6 次調査 SK2 出土遺物実測図 1 (1/3)

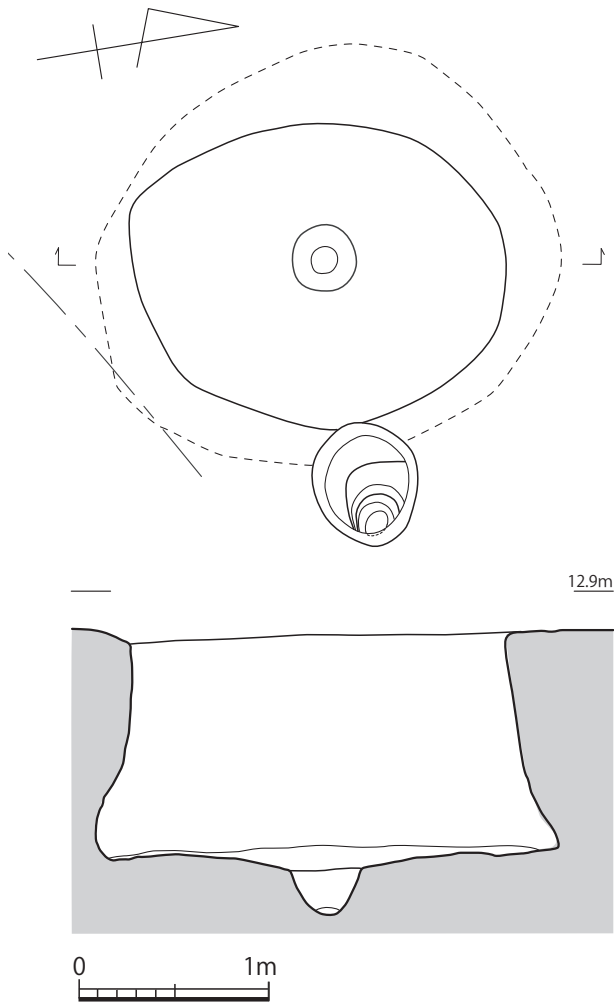


第 52 図 6 次調査 SK2 出土遺物実測図 2 (1/3)



第 53 図 6 次調査 SK2 出土遺物実測図 3 (1/3)

外反する。97～106 は甕である。97 は底部が上げ底となる。98 は胴部が最大径となる位置から立ち上がりが直立し、口縁端部の外面がわずかに外反する。99 は底面が平坦である。口縁部は水平に屈曲する。100 は底面が平坦である。口縁部は外反し、端部に刻み目を施す。口縁下部には断面三角形の突帯を廻らす。101 は上半と下半で分かれるが同一個体であろう。底部は上げ底である。口縁部は L 字形に屈曲する。102 は口縁部が L 字形に屈曲し、水平となる。103 は底部が上げ底である。104・105 はわずかに上げ底である。106 は底部が平坦である。107 は高坏の坏部である。坏部の底面からわずかに内反し



第54図 6次調査 SK3 実測図 (1/40)

ながら立ち上がり、口縁部は外反する。108は鉢である。底面はほぼ平坦である。口縁は短く外反する。109は脚付鉢である。底面は上げ底である。口縁端部は内外にやや肥厚し、鋤形の様相を呈する。

SK3 (第54図、図版17)

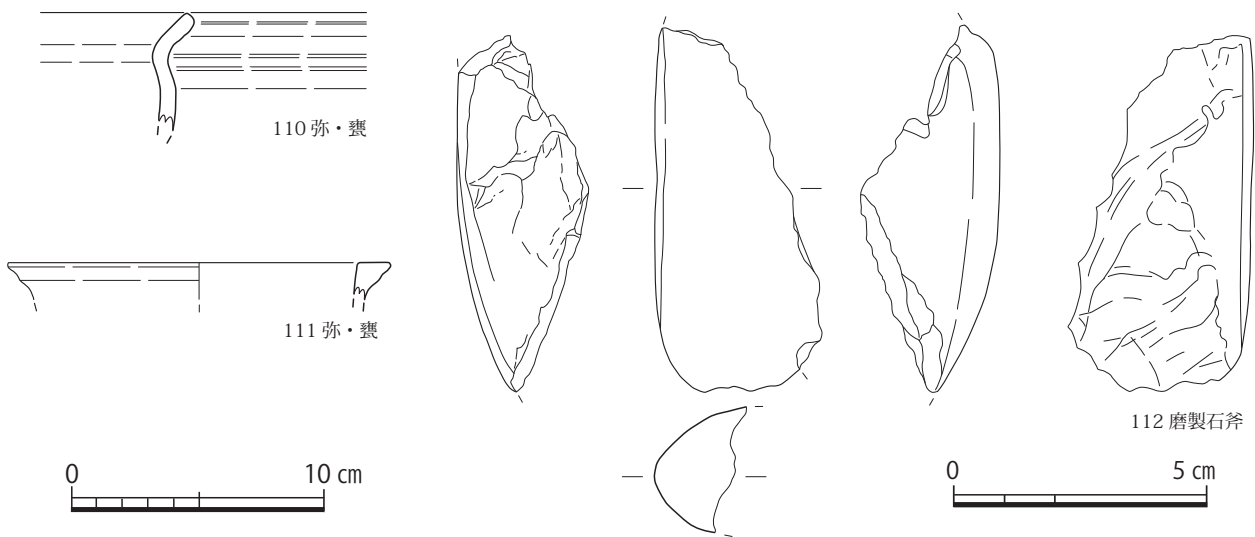
6次調査区中央南側で検出した。平面形は楕円形であり、長軸200cm、短軸160cm、深さ120cmを測る。断面形は三角フラスコ状である。底面は中央がやや低く、中央付近に柱穴を1基確認している。弥生時代中期の貯蔵穴であろう。

出土遺物 (第55図、図版22)

110・111は甕である。110は口縁部がなだらかに外反し、端部は平坦に収める。111は口縁部の断面が上端水平の直角三角形を呈する。112は磨製石器である。弥生時代の蛤刃石斧か。片側面を大きく欠き、刃部は細かく破断する。

SK4 (第56図、図版17)

6次調査区と7次調査区の境界で検出した。隣家の塀に近接していたため一部は未調査であるが、平面形は直径280cmの円形を呈するとみられる。断面形は逆台形である。深さは28cmを測る。底面は平坦であり、中央付近に柱穴を



第55図 6次調査 SK3 出土遺物実測図 (1/3・2/3)

1 基確認している。底面東端にあるピットは検出面から掘り込まれていたものである。図化していないが、弥生時代中期の甕の底部が出土した。

SK5 (第 57 図、図版 18)

7 次調査区中央付近で検出した。平面形はやや歪な円形であり、直径 140cm、深さ 32cm を測る。断面形は三角フラスコ状を呈する。底面は中央部がわずかに低く、凸レンズ状を呈する。中央東寄りに柱穴を 1 基確認した。底面からは弥生土器がまとまって出土しており、廃絶時に投棄されたものと考えられる。弥生時代中期の貯蔵穴であろう。

出土遺物 (第 58 図、図版 22・23)

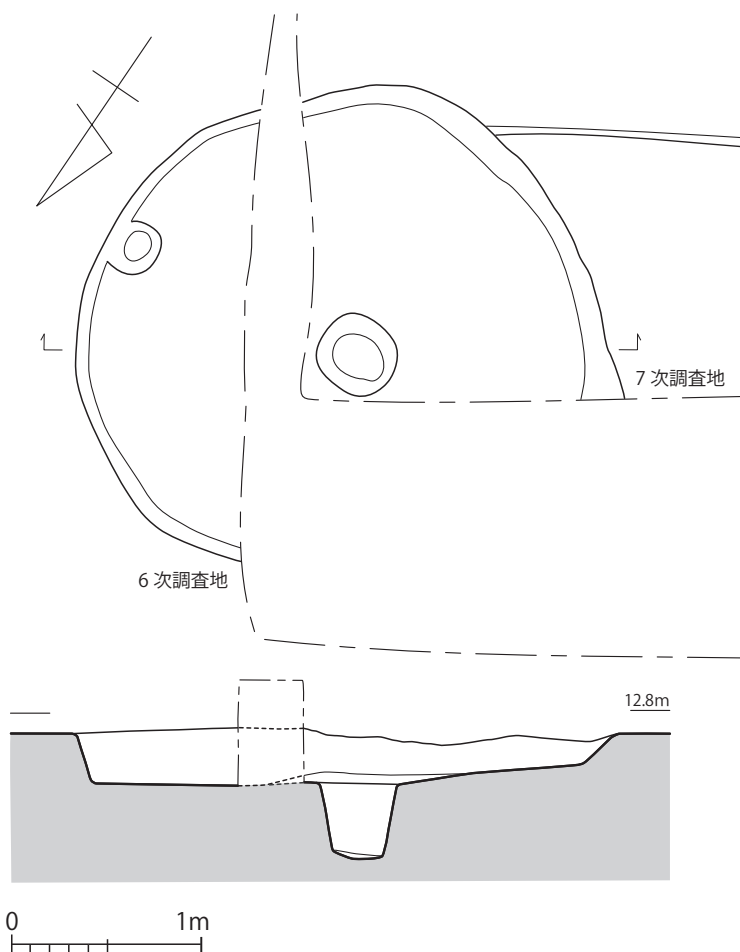
113～121 は甕である。113 は上半と下半に分かれるが同一個体か。口縁はなだらかに外反し、端部は平坦に収める。114 はやや頸部がくびれて口縁部が外反する。115～117 は口縁部が L 字形を呈する。116・117 は口縁端部の上端がわずかに反る。118 は底部外縁が平坦だが中央部が上げ底となる。119 は底面が上げ底である。120・121 は底面が平坦となる。122 は磨製石器である。弥生時代の蛤刃石斧か。刃部を欠く。

SK6 (第 59 図、図版 18)

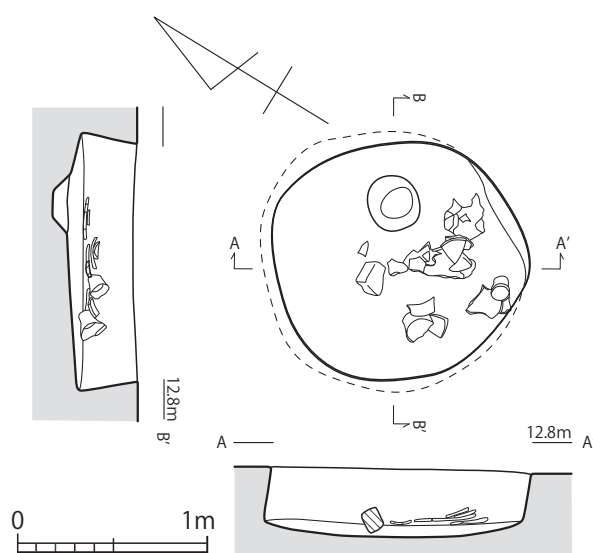
7 次調査区中央南端で検出した。全体の半分程度を検出しているとみられ、平面形は楕円形を呈するものと推測する。短軸で 130cm を測り、断面形は袋状を呈する。底面は平坦である。柱穴は確認していない。遺物は出土していないが、SK1～5 までと同じく弥生時代中期の貯蔵穴であろう。

SK7 (第 60 図、図版 18)

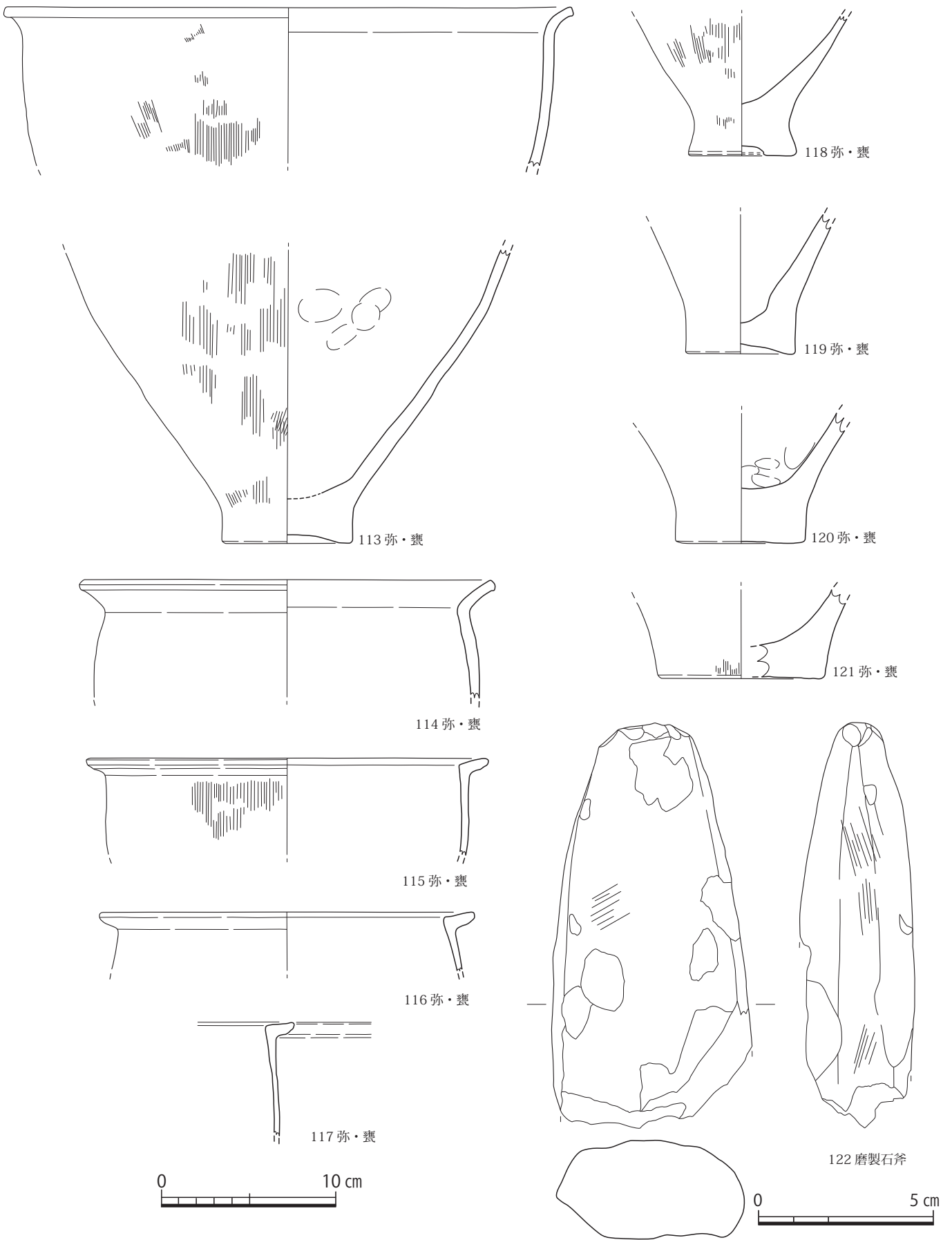
7 次調査区中央付近で検出した。平面形



第 56 図 6・7 次調査 SK4 実測図 (1/40)



第 57 図 7 次調査 SK5 実測図 (1/40)



第 58 図 7 次調査 SK5 出土遺物実測図 (1/3・2/3)

は長方形であり、長軸 96cm、短軸 68cm、深さ 20cm を測る。掘方は直線的に開きながら立ち上がる。底面にはシミのように暗灰色シルト質土が混ざっていたが、これを掘削したため底面は不整形となった。貼り床のように整形した痕跡であろうか。ほか、北西隅にピットが 1 基ある。出土遺物に青磁片があり、12 世紀後半以降であると考えられる。延永ヤヨミ園遺跡第 6・7・13 次調査において明確に中世の遺構といえるのはこの SK7 のみである。

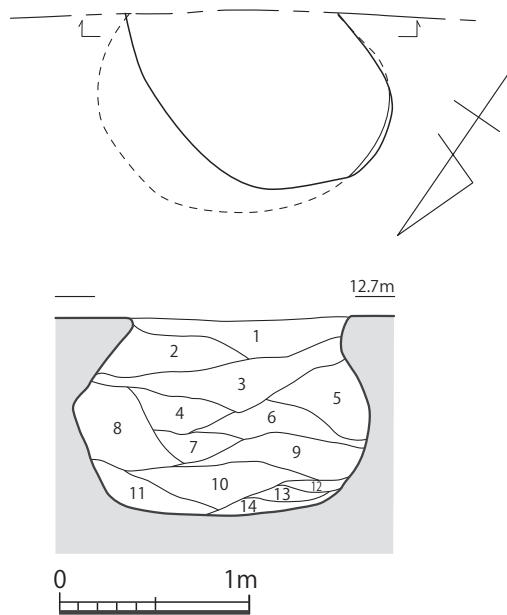
出土遺物 (第 61 図、図版 23)

123 は青磁である。同安窯系の小皿であろうか。外面に櫛目、内面に印刻による文様を施す。

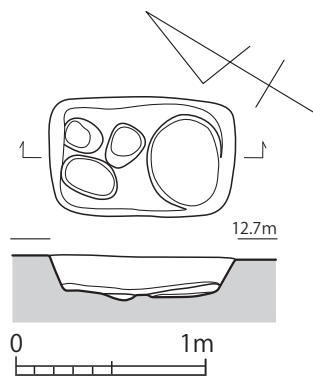
(4) 柱穴 (第 62 図、図版 23)

以下、柱穴から出土した遺物を掲載する。

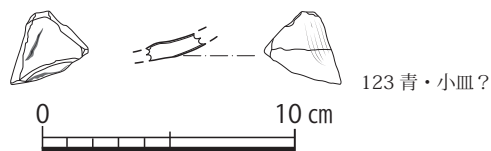
124 は甕である。底部は上げ底である。125 は高坏である。脚部上端には坏部の底面が張り付けられた様子が観察できる。脚柱の下半に透かし孔を 2 つもつ。裾部へ向かってなだらかに湾曲する。126 は甕である。口縁は短く外反し、端部は薄い。127 は器台である。裾部はふんばるよう開き、底面は平坦である。128 は鉢である。体部は内反し、口縁部は外反する。口縁部中央は器壁が厚くなる。129 は高坏の脚部であり、上端に坏部を張り付けるため概ね平行な刻み目を施す。130・131 は甕である。口縁部が外反し、端部は薄くつまみ出す。132・133 は須恵器である。132 は壺である。口縁部が外反し、端部外面が肥厚する。133 は壺の肩部であろうか。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕をもつ。134 は埴である。体部は内反し、口縁部はわずかに外反する。135 は壺の口縁部であり、外反する。端部は平坦に収める。136 は甕の口縁部である。頸部がく字状にくびれ、口縁部は外反する。端部に向けて器壁が薄くなり、端部はやや丸く収める。137 は製塩土器もしくは脚付鉢であろうか。138 は甕の口縁部であり、外反する。139 は鉢である。底部はわずかに平坦面を残す。口縁部はゆるやかに外反する。140 は高坏の坏部である。坏部は深く、口縁部は直線的に開き端部は外反する。141・142 は埴である。141 は底面が丸底であり、口縁端部は器壁が薄くなり先細る。142 は底面が丸底であり、口縁端部は外反する。



第 59 図 7 次調査 SK6 実測図 (1/40)

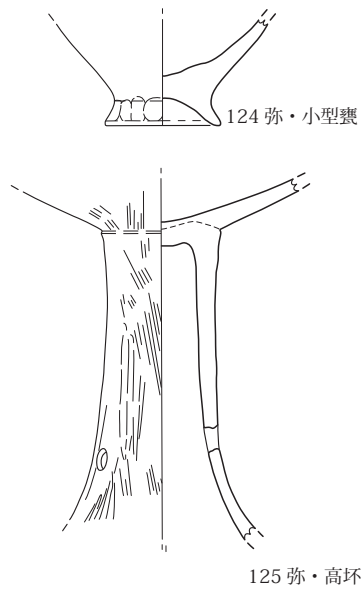


第 60 図 7 次調査 SK7 実測図 (1/40)

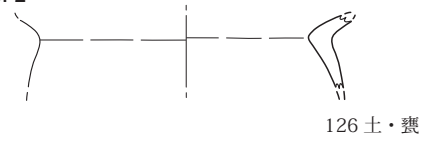


第 61 図 7 次 SK7 調査出土遺物実測図 (1/3)

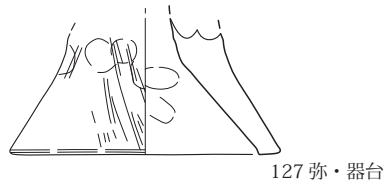
SP(6次) SP1



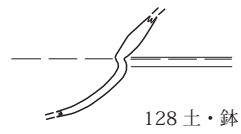
SP2



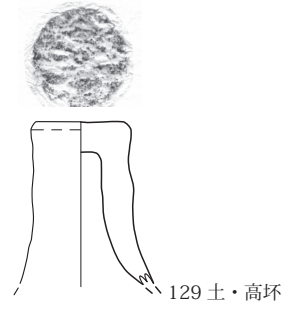
SP7



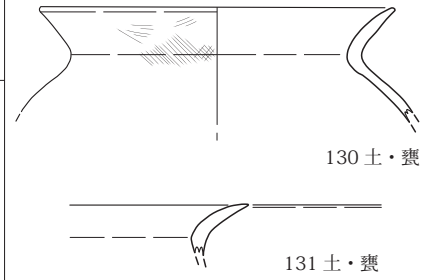
SP22



SP23



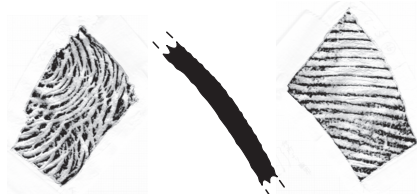
SP26



SP(7次) SP2

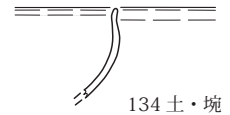


132 須・壺



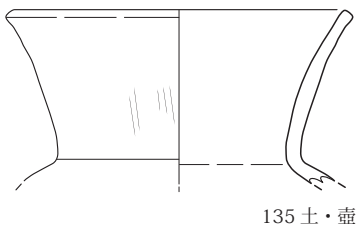
133 須・壺?

SP17

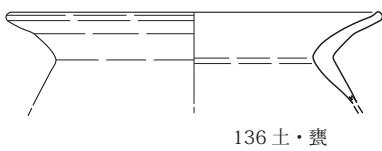


134 土・碗

SP(13次) SP4



135 土・壺

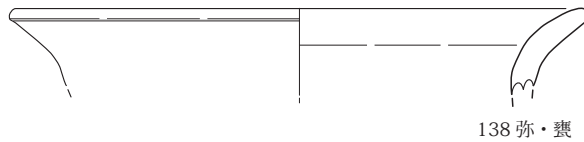


136 土・甕



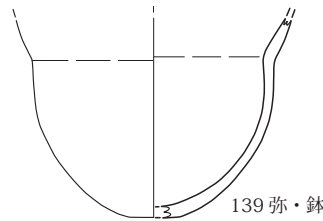
137 土・製塩土器?

SP14



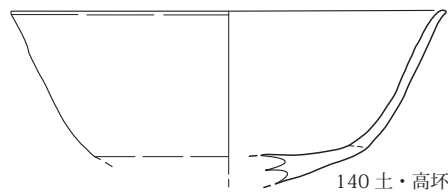
138 弥・甕

SP15



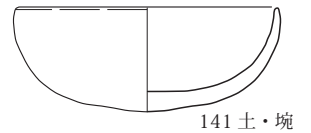
139 弥・鉢

SP18

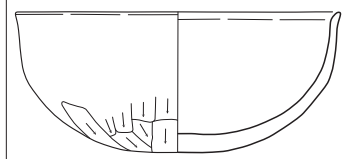


140 土・高环

SP21



141 土・碗



142 土・碗



第 62 図 6・7・13 次調査 SP 出土遺物実測図 (1/3)

第3節 結語

今回の調査では弥生時代～古墳時代の集落跡、古代の大型掘立柱建物跡を確認した。また、土坑1基のみであるが中世の遺構があることも確認できた。

弥生時代の遺構として弥生時代中期の貯蔵穴がある。明確に判断できるものはSK1～6の6基だが、SK1東隣の直径120cmを測る円形の溜まりなども貯蔵穴である可能性が考えられる。分布をみるとSK1を除けば6次調査地から7次調査地にかけて概ね南北一直線に並ぶ。SK1、2、4、5は浅く、SK3、6は深いといった違いはあるが、SK3、6の出土遺物は乏しく、前者と後者と時期差が生ずるかはっきりしない。今回の調査範囲では竪穴建物などの居住施設は確認できていないが、調査地北西約100mに位置する15次調査地(未報告)にて弥生時代中期の竪穴建物とみられる遺構1基を確認している。集落はより標高が高い北側に展開しているものであろうか。

古墳時代の遺構として竪穴建物が8～10基確認できた。SI1・9は平面では明確に区別できず単一のものとして認識して掘削したため遺物も混入してしまったが、壁際溝から類推する平面形から2基が重複しているとみてよいのではなかろうか。また、SI6付近で焼土を2か所確認しているが、カマドの火床を想起させる。そうであるならば1か所はSI6のカマドの痕跡としても、もう1基カマドを備えた竪穴建物があったと考えることができる。

それぞれの南北軸の方位をみるとSI1・9とカマドをもつSI8はほぼ北を向くのに対し、その他の竪穴建物は西に40°前後振れている。主軸の方位が共通することをもって同一時期と捉えるのであればSI1・9、SI8の群とSI2～7の群の2つに分けられる。SI1・9の出土遺物は土師器のみで4～5世紀が主となるが、把手付碗の把手らしき遺物から古墳時代後期と考えられる。SI8の出土遺物は少なく5世紀代の甕があるが、カマドを備えることから古墳時代後期と捉えることができる。SI2～7のグループをみるとSI6はカマドをもつ可能性があるとして上述したもののSI3、SI7は炉跡をもつことからSI1・9、SI8より先行するものではなかろうか。SI4から古墳時代後期の須恵器が出土しているため、両グループは後期の中で2時期に分けられることになる。後述するSB5、6も古墳時代後期以降のものであり主軸の方位もSI1・9、SI8と近似しているが、SB5とSI8は近すぎるため同時に建つとは考えにくく、さらに前後関係が生じるものと考えられる。

さて、方位について触れたが、SI2～7の南北軸の振れ幅は側柱の掘立柱建物跡の主軸と平行または直交に近い。調査地の西側から南側は谷となっており、旧地形は南に向かって下る状況が想定できる。すると旧地形の等高線を意識して構えられたことも想定できる。調査地東隣を走る市道も西に30°触れていることも興味深い。ただし、SI2～7が先行するのであれば、当初は主軸を西へ40度前後振っていたものがSI1・9、SI8の頃には南北を向き、後述する掘立柱建物群は再び西へ30度振ることになる。これをどのように解釈するか課題となる。

掘立柱建物は9棟を確認しているがSB5・6のみが総柱であり、ほかは側柱である。SB5は明確な出土遺物が無いが、SB6は出土した須恵器坏片から6世紀後半以降に位置付けられる。規模や方位からSB5も同時期と考えることができる。側柱の建物は円形の柱穴と隅丸方形の柱穴に分かれ、円形の柱穴はSB1～3のように小形で浅いものとSB4のように大型で深いものに分かれる。柱穴の形態を問わず、主軸の方位はいずれも西に30°もしくは東に60°振れているため相互に平行もしくは直交の関係にある。調査地から北東側約100mの地点で九州歴史資料館が東九州自動車道および県道直方行橋線建設に先立ち発掘調

査を実施しており、Ⅱ -2 区で 1 棟、V-1 b 区で三面庇の建物含め 3 棟の大型掘立柱建物が確認されているが、これらとも主軸は共通する。また、V -1 b 区西隣の 14 次調査地（未報告）でも西に 30° 触れた大型掘立柱建物を 2 棟確認している。

SB4、SB7～9 といった大型掘立柱建物の埋土は主に暗褐色と褐茶色の 2 種類が使われている。この 2 種はお互いにブロックとして混ざりあうものとほとんど混ざらないものがある。層序は各遺構の土層図に示したとおり SB4、7 は 1 層の単位が比較的薄く 2～3 層確認できるのに対し、同等以上の大きさや深さの柱穴をもつ SB8、9 は概ね 1 層と簡素化された状況がよみとれる。主軸も SB4・7 が西に 30°、SB8・9 が東へ 60° と異なるが、築造された時期の差異を示唆するものであろうか。

大型掘立柱建物からの出土遺物は少なく図化に耐えるものもほとんどないため時期を明確にするには根拠に乏しい。円形柱穴で構成された SB3 は SI4 を、SB4 は SI8 を掘り込むため、古墳時代後期以降と考えられる。隅丸方形の柱穴で構成される SB7～9 は主軸の方位の類似性から前述したⅡ区、V 区の大型掘立柱建物と同じく 7 世紀後半以降と考えられる。SB8 と SB3 は近すぎるため同時期に建つとは考えられず、円形柱穴が隅丸方形柱穴に先行し、SB8 が 7 世紀後半以降とするならば、SB3 は 7 世紀前半のものといえることができる。SB4 の出土遺物にある土師器坏も同時期のものではなかろうか。

中世の遺構として 1 基のみ SK7 がある。同安窯系の青磁小皿とみられる小片が 1 点出土している。当然ながら周辺にも中世の遺構が展開していると考えられるので今後の調査でも留意すべき点であろう。

各時代の遺構について上述したが、やはり大型掘立柱建物の存在が際立つ。Ⅱ区、V 区のものとも主軸が共通することは先に述べたが、調査地北西約 100m の 15 次調査地でも大型掘立柱建物跡を 2 棟確認しており、これらが同一の区画に属するものとするれば南北で約 80m 以上、東西で約 200m 以上となる。ただし、延永ヤヨミ園遺跡では区画溝によって 3 区画に分けられ変遷していくことが下原幸裕氏によって指摘されており（「豊前・延永ヤヨミ園遺跡と古代草野津」『福岡大学考古学論集 3』2020）、安易に同一時期、同一区画のものとして考えることはできない。これらは古代の湊「草野津」関連の遺構と考えられるが、調査によって明らかになったのは一部に過ぎず、その全体像については今後の調査を待たねばならない。

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
1	SI1・9	弥生土器	小壺	底径 2.5、残高 2.1	内：ナデ 外：ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内：橙 5YR 6/6 外：橙 5YR 6/6、黒褐 5YR 3/1	底部片	○	
2	SI1・9	弥生土器	壺 or 甕	復元底径 8.0、残高 2.5	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内：橙 7.5YR 6/6 外：にぶい赤褐 5YR 5/3	底部片	○	
3	SI1・9	土師器	甕	復元口径 16.0、残高 1.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外：橙 7.5YR 6/6	口縁部片	○	
4	SI1・9	土師器	甕	残高 7.1	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2.5mmの白色砂粒	内：橙 5YR 6/6、にぶい赤褐 5YR 5/4 外：にぶい赤褐 5YR 5/4	頸部～ 肩部片	○	
5	SI1・9	土師器	甕	残高 5.7	内：回転ナデ→ハケ 外：回転ナデ	やや良好	～1.5mmの白色砂粒	内：明赤褐 5YR 5/6 外：にぶい赤褐 5YR 5/4	口縁部～ 頸部片	○	
6	SI1・9	弥生土器	高坏	残高 2.3	内：ヨコナデ→ナデ 外：ヨコナデ→ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内外：橙 7.5YR 6/6	口縁部片	○	
7	SI1・9	土師器	高坏	残高 3.9	内：回転ナデ→ナデ→ヘラミガキ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外：橙 7.5YR 6/6	口縁部～ 頸部片	○	
8	SI1・9	土師器	高坏	復元口径 18.4、残高 3.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外：明赤褐 5YR 5/8	口縁部～ 頸部片	○	
9	SI1・9	土師器	高坏	残高 3.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～4mmの白色砂粒	内：橙 5YR 6/8 外：赤褐 5YR 4/8	口縁部～ 肩部片	○	
10	SI1・9	土師器	高坏	残高 5.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外：明赤褐 5YR 5/6	坏部片	○	
11	SI1・9	土師器	高坏	残高 4.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内：橙 5YR 6/8、明赤褐 5YR 5/6 外：にぶい赤褐 5YR 5/4	坏部片	○	
12	SI1・9	土師器	高坏	残高 5.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内：橙 5YR 6/6 外：橙 7.5YR 6/6	口縁部片	○	
13	SI1・9	土師器	高坏	復元口径 17.2、残高 7.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内外：明赤褐 5YR 5/8	坏部片	○	

表 5 出土遺物観察表

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
14	SI1・9	土師器	高坏	残高 2.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～3mmの白色砂粒 ～3.5mmの透白色砂粒	内：橙 7.5YR 7/6 外：橙 5YR 6/6	胴部片	○	
15	SI1・9	土師器	高坏	残高 6.5	内：回転ナデ→シボリ 外：回転ナデ→タテハケ	良好	～3mmの白色砂粒	内：褐灰 10YR 4/1 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	脚部片	○	
16	SI1・9	土師器	高坏	残高 1.1	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内外：明赤褐 5YR 5/8	脚部片	○	
17	SI1・9	土師器	高坏	復元底径 8.5, 残高 1.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外：明赤褐 2.5YR 5/8	脚部片	○	
18	SI1・9	土師器	高坏	復元口径 11.4, 残高 2.1	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～4mmの白色砂粒	内：明赤褐 5YR 5/8 外：明赤褐 5YR 5/6	脚部片	○	
19	SI1・9	土師器	坏	復元口径 9.0, 器高 2.9	内：回転ナデ→ナデ 外：回転ナデ→ナデ	良好	～2mmの透白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	口縁部～ 胴部片	○	
20	SI1・9	土師器	埴?	復元口径 15.2, 残高 4.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内：明赤褐 5YR 5/6 外：橙 5YR 6/8	口縁部～ 胴部片	○	
21	SI1・9	土師器	鉢	復元口径 17.4, 残高 2.6	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～1mmの白色砂粒	内：明赤褐 5YR 5/8 外：明赤褐 2.5YR 5/8	口縁部～ 体部片	○	
22	SI1・9	土師器	鉢	復元口径 16.2, 残高 5.6	内：回転ナデ→ヘラケズリ 外：回転ナデ	良好	～4mmの白色砂粒	内外：赤褐 5YR 4/6, 褐灰 5YR 4/1	口縁部～ 体部片	○	
23	SI1・9	土師器	把手?	残高 2.8	内：ナデ→ヘラケズリ 外：ナデ→オサエ	良好	～2mmの白色砂粒	内外：明赤褐 5YR 5/6	把手	○	
24	SI2	土師器	甕	残高 1.7	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内：橙 7.5YR 7/6 外：橙 5YR 6/6	口縁部～ 頸部片	○	
25	SI2	弥生土器	埴	復元口径 14.4, 残高 8.0	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	やや良好	～3mmの白色砂粒	内：橙 7.5YR 6/6 外：にぶい橙 7.5YR 6/4	口縁部～ 底部片	○	
26	SI2	弥生土器	鉢	復元口径 8.5, 復元底径 1.6, 器高 6.1	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～1mmの白色砂粒	内：橙 7.5YR 7/6 外：橙 7.5YR 6/6, 褐灰 7.5YR 4/1	口縁部～ 底部片	○	
27	SI3	弥生土器	壺	底径 4.0, 残高 2.0	内：ナデ 外：ナデ	良好	～4mmの透白色砂粒 ～4mmの白色砂粒	内外：橙 7.5YR 6/6	底部片	○	
28	SI3	弥生土器	甕	残高 3.6	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～2mmの透白色砂粒 ～2mmの白色砂粒	橙 5YR 6/6	底部片	○	
29	SI3	土師器	甕	復元口径 13.5, 残高 8.6	内：ナデ→ヘラケズリ 外：ナデ→ハケ	良好	～3mmの透白色砂粒 ～3mmの白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 7/2 外：灰白 10YR 8/2	口縁部～ 胴部片	○	
30	SI3	土師器	甕	残高 4.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～3mmの透白色砂粒 ～2mmの白色砂粒	内：明黄橙 10YR 7/6 外：橙 7.5YR 6/6	頸部片	○	
31	SI3	土師器	甕	復元口径 16.8, 残高 12.0	内：回転ナデ→ヘラケズリ 外：回転ナデ→ハケ	良好	～7mmの白色砂粒	内：橙 7.5YR 7/6 外：橙 2.5YR 6/6	口縁部～ 胴部片	○	
32	SI3	土師器	甕	復元口径 12.6, 残高 10.1	内：回転ナデ→ヘラケズリ 外：回転ナデ→ハケ	良好	～3mmの透白色砂粒 ～3mmの白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 6/4 外：明赤褐 2.5YR 5/6, にぶい黄橙 10YR 6/4	口縁部～ 胴部片	○	
33	SI3	土師器	甕	復元口径 8.6, 残高 11.6	内：ナデ→ヘラケズリ 外：ナデ	良好	～3mmの透白色砂粒	内：浅黄橙 10YR 8/4, にぶい黄橙 10YR 7/4 外：にぶい黄橙 10YR 7/4	口縁部～ 胴部片	○	
34	SI3	土師器	高坏	残高 2.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～3mmの透白色砂粒	内外：にぶい黄橙 10YR 7/4	坏部片	○	
35	SI3	土師器	鉢	復元口径 19.9, 復元底径 4.9, 残高 11.9, 5.1	内：回転ナデ→オサエ, ハケ 外：回転ナデ→ハケ, ヘラミガキ	良好	～4mmの白色砂粒	内外：橙 7.5YR 7/6	口縁部～ 底部片	○	
36	SI3	石製品	砥石	長 8.6, 幅 5.3, 厚 5.0, 重量 269.12g	—	—	—	灰 N 4/0, 暗灰 N 3/0	完形	○	
37	SI4	土師器	壺	復元口径 12.8, 残高 2.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～3mmの透白色砂粒 ～2mmの白色砂粒	内外：橙 5YR 6/8	口縁部片	○	
38	SI4	土師器	壺	復元口径 9.0, 器高 11.9	内：回転ナデ→不定方向ナデ 外：回転ナデ→不定方向ナデ	良好	～4mmの透白色砂粒 ～3mmの白色砂粒	内外：浅黄橙 10YR 8/4	ほぼ完形	○	
39	SI4	弥生土器	甕	復元口径 17.2, 残高 5.5	内：ヨコナデ→ハケ 外：ヨコナデ→ハケ→オサエ	良好	～4mmの白色砂粒	内外：橙 5YR 6/6	口縁部～ 胴部片	○	
40	SI4	土師器	甕	残高 3.4	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	良好	～3mmの透白色砂粒	内外：にぶい橙 7.5YR 7/4	口縁部片	○	
41	SI4	土師器	甕	復元口径 13.6, 残高 3.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 7/4, 灰 N 6/0 外：にぶい橙 7.5YR 7/4	口縁部～ 頸部片	○	
42	SI4	土師器	甕	復元口径 18.8, 残高 9.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ→ハケ	良好	～4mmの白色砂粒	内外：橙 5YR 7/6	口縁部～ 胴部片	○	
43	SI4	弥生土器	高坏	残高 7.8	内：ヨコナデ→シボリ 外：ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～3mmの白色砂粒	内外：橙 5YR 7/6	脚部片	○	
44	SI4	弥生土器	高坏	残高 3.1	内：ヨコナデ→オサエ 外：ヨコナデ→ハケ	良好	～3mmの白色砂粒	内外：橙 7.5YR 7/6	脚部片	○	
45	SI4	弥生土器	鉢	残高 3.7	内：ヨコナデ→ハケ→オサエ 外：ヨコナデ→ハケ	良好	～4mmの透白色砂粒	内外：橙 7.5YR 6/6	底部片	○	
46	SI4	弥生土器	鉢	復元口径 11.8, 器高 6.3	内：ヨコナデ→オサエ 外：ヨコナデ→ハケ	良好	～4mmの透白色砂粒	内：橙 5YR 7/6, にぶい橙 7.5YR 6/3 外：橙 5YR 6/6	1/2程度	○	
47	SI4	弥生土器	脚付鉢	残高 3.4	内：ヨコナデ→ハケ 外：ヨコナデ→タテハケ	良好	～2mmの白色砂粒	内外：黄灰 2.5Y 5/1, にぶい橙 7.5YR 7/4	底部片	○	
48	SI4	土師器	小型器台	口径 7.6, 底径 7.3, 器高 6.3	内：回転ナデ→オサエ 外：回転ナデ→オサエ	良好	～3mmの白色砂粒	内：橙 7.5YR 6/6, 黒褐 7.5YR 3/1 外：橙 7.5YR 6/6	ほぼ完形	○	
49	SI4	弥生土器	器台	復元口径 9.4, 復元底径 15.4, 器高 15.0	内：ヨコナデ→シボリ→ハケ 外：ヨコナデ→不定方向ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外：橙 7.5YR 7/6	1/2程度	○	
50	SI4	須恵器	高坏	残高 6.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～1mmの黒色砂粒	内外：灰 N 6/0	脚部片	○	2方向に透 窓
51	SI4	須恵器	高坏	復元底径 9.1, 残高 5.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	緻密	内外：灰 5Y 6/1	脚部片	○	
52	SI8	土師器	甕	残高 5.0	内：ナデ 外：ナデ→ハケ	良好	～2mmの白色砂粒	内：褐 7.5YR 4/4, 黒 7.5YR 2/1 外：にぶい褐 7.5YR 5/4, 明赤褐 2.5YR 5/6	頸部～ 胴部片	○	
53	SI8	土師器	甕	復元口径 16.8, 残高 16.0	内：ナデ 外：ナデ	良好	～8.5mmの赤茶色砂粒	内：にぶい橙 5YR 7/4 外：浅黄橙 10YR 8/4	口縁部～ 胴部片	○	
54	SB1	土師器	埴	残高 3.1	内：ナデ 外：ナデ	良好	～2.5mmの白色砂粒	内：橙 5YR 6/8 外：明褐 7.5YR 5/8	口縁部～ 体部片	○	
55	SB1	須恵器	壺	残高 4.4	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内：灰 N 6/0, 灰 N 5/0 外：灰 N 6/0	口縁部～ 頸部片	○	
56	SB1	須恵器	壺	残高 13.3	内：回転ナデ→(青海波文当具痕) 外：回転ナデ→タキ	良好	緻密	内：黄灰 2.5Y 6/1 外：灰黄 2.5Y 6/2	頸部～ 胴部片	○	耳あり

表6 出土遺物観察表

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
57	SB3	土師器	鉢	残高 6.8	内: ナデ 外: ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内外: 明赤褐 5YR 5/8	口縁部～ 胴部片	○	
58	SB3	須恵器	高坏	残高 3.4	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	緻密	内: 灰 N 5/0 外: 灰白 5Y 7/2	坏部片	○	無蓋高坏
59	SB4	須恵器	坏蓋	残高 3.5	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 灰 N 5/0 外: オリブ灰 5Y 5/1	坏身片	○	
60	SB4	須恵器	坏身	残高 2.5	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	緻密	内外: 灰 7.5Y 5/1	口縁部～ 受部片	○	
61	SB4	須恵器	坏身	残高 2.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外: 灰 N 6/0	口縁部～ 受部片	○	
62	SB4	土師器	坏	復元口径 12.4, 底径 6.2, 器高 2.9	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	緻密 5mmの白色砂粒	内外: 灰白 7.5Y 7/1	1/4 程度	○	
63	SB7	弥生土器	高坏	残高 11.0	内: ナデ→シボリー→ヘラケズリ 外: ナデ	良好	～3mmの透白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6 外: 橙 5YR 6/6	脚部片	○	
64	SB7	弥生土器	高坏	残高 4.6	内: ナデ→オサエ 外: ヨコナデ, ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/6, 橙 5YR 6/6 外: 橙 7.5YR 6/6	脚部片	○	
65	SB7	土師器	甕	残高 4.3	内: ナデ 外: ナデ	良好	～4mmの透白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 6/6	口縁部～ 頸部片	○	
66	SB7	土師器	瓶	残高 7.2	内: ナデ→ヘラケズリ 外: ナデ→オサエ	良好	～3mmの白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 7/4	把手片	○	
67	SB7	須恵器	坏蓋	残高 2.9	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～4mmの白色砂粒	内外: 灰 N/0	口縁部片	○	
68	SB7	須恵器	高坏?	残高 3.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～1mmの白色砂粒 ～1mmの黒色砂粒	内: 黄灰 2.5Y 6/1 外: 暗灰 N 4/0	口縁部片	○	
69	SB7	須恵器	壺?	残高 5.3	内: 回転ナデ→(青海波文当具痕) 外: 回転ナデ→タタキ	良好	～1mmの黒色砂粒	内: 灰白 N 7/0 外: にぶい黄橙 10YR 6/4	胴部片	○	自然軸付着
70	SB8	弥生土器	壺	残高 7.6	内: ナデ 外: ナデ→刻目突帯	良好	～3mmの透白色砂粒	内: 橙 2.5YR 7/6 外: 橙 5YR 7/6	胴部片	○	
71	SB8	弥生土器	壺	残高 3.5	内: ナデ→ヘラケズリ 外: ナデ	良好	～2mmの透白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 7/6	頸部片?	○	
72	SB8	土師器	直口壺	残高 3.7	内: 回転ナデ→オサエ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外: 橙 5YR 7/6	口縁部片	○	
73	SB8	弥生土器	甕	残高 4.4	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	良好	～1mmの白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 6/6	口縁部～ 頸部片	○	
74	SB8	土師器	小型甕	復元口径 6.8, 残高 1.6	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 橙 5YR 6/8 外: 橙 7.5YR 7/6	口縁部～ 頸部片	○	
75	SB8	土師器	甕	復元口径 13.6, 残高 4.4	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 7/6 外: 橙 5YR 6/6	口縁部～ 頸部片	○	
76	SB8	土師器	甕	残高 2.2	内: ナデ 外: ナデ	良好	～1mmの白色砂粒	内外: 浅黄橙 10YR 8/4	頸部片	○	
77	SB8	土師器	高坏	残高 6.8	内: 回転ナデ→シボリー 外: 回転ナデ→ヨコナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 灰褐 7.5YR 5/2, にぶい褐 7.5YR 5/3 外: 橙 7.5YR 6/6	脚部片	○	
78	SB8	土師器	埴	復元口径 10.4, 残高 4.5	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～1mmの白色砂粒	内: 明赤褐 2.5YR 5/6 外: 明赤褐 5YR 5/6	口縁部～ 底部片	○	
79	SB8	土師器	器台	残高 3.6	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～1mmの白色砂粒	内外: 黄橙 10YR 8/6	口縁部片	○	
80	SB8	須恵器	坏身	残高 4.5	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	～1mmの白色砂粒	内: 灰 6/0 外: 灰 4/0, 灰 6/0	口縁部～ 体部片	○	
81	SB8	須恵器	坏身	残高 2.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内: にぶい黄橙 10YR 6/4, 黒褐 10YR 3/1 外: 灰黄 10YR 5/2	口縁部～ 受部片	○	
82	SB8	須恵器	壺	残高 2.9	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	緻密	内外: 灰 N 6/0	口縁部片	○	
83	SB8	須恵器	甕	残高 5.5	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→タタキ	良好	緻密	内: 黄灰 2.5Y 6/1 外: 灰黄 2.5Y 7/2	胴部片	○	
84	SB8	須恵器	甕?	残高 4.8	内: 回転ナデ→(青海波文当具痕) 外: 回転ナデ→タタキ	良好	緻密	内: 灰白 N 7/0 外: 灰黄 2.5Y 7/2	胴部片	○	
85	SB9	須恵器	坏身	残高 2.2	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～1mmの白色砂粒	内外: 灰 5Y 6/1	受部～ 体部片	○	
86	SB9	須恵器	坏身	残高 4.3	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～1mmの白色砂粒	内: にぶい赤褐 5YR 4/4, 灰白 2.5Y 7/1 外: 灰黄褐 10YR 6/2, 黒 2.5Y 2/1	口縁部～ 体部片	○	蓋の口縁附着 自然軸付着
87	SB9	須恵器	坏身?	残高 1.5	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→回転ヘラケズリ	良好	～0.5mmの白色砂粒	内: 灰 N 5/0 外: 灰黄 2.5Y 6/1	体部片	○	
88	SK1	弥生土器	壺	復元底径 7.6, 残高 5.8	内: ナデ 外: ナデ→ヘラミガキ	良好	～3mmの透白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6, にぶい褐 7.5YR 5/3 外: にぶい褐 7.5YR 6/3, 褐灰 7.5YR 4/1	胴部～ 底部片	○	
89	SK1	弥生土器	甕	残高 7.5	内: ナデ 外: ナデ→オサエ, ハケ	良好	～4mmの透白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/8 外: 赤褐 5YR 4/6	口縁部～ 胴部片	○	
90	SK1	弥生土器	小型甕	口径 10.8, 底径 6.1, 器高 15.6	内: ナデ 外: ナデ	良好	～4.5mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6 外: 明赤褐 2.5YR 5/8, 橙 7.5YR 6/8	ほぼ完形	○	
91	SK1	弥生土器	甕	残高 3.1	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 赤褐 5YR 4/8, 灰褐 5YR 4/2 外: にぶい赤褐 5YR 5/4, にぶい赤褐 5YR 4/3	口縁部～ 頸部片	○	
92	SK1	弥生土器	蓋	摘部径 4.3, 残高 3.8	内: ナデ 外: ナデ	良好	～3mmの透白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/6, 灰黄褐 10YR 4/2 外: 明赤褐 2.5YR 5/6, 明赤褐 5YR 5/6	摘部片	○	
93	SK1	弥生土器	蓋	復元口径 22.4, 器高 11.8	内: ナデ 外: ナデ→ハケ	良好	～6mmの透白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6 外: 橙 7.5YR 6/6, 黄灰 2.5Y 4/1	2/3 程度	○	
94	SK2	弥生土器	壺	底径 7.6, 残高 5.7	内: ヨコナデ→オサエ 外: ヨコナデ→オサエ	良好	～4mmの白色砂粒	内: 灰褐 7.5YR 4/2, にぶい褐 7.5YR 5/3 外: 橙 2.5YR 6/6, 橙 5YR 6/6	底部片	○	
95	SK2	弥生土器	壺	底径 13.2, 残高 59.7	内: ヨコナデ→ヘラミガキ 外: ヨコナデ→ヘラミガキ, ハケ, オサエ	良好	～2mmの黒色砂粒 ～5mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6 外: 橙 7.5YR 6/6, 褐灰 7.5YR 4/1	1/3 程度	○	
96	SK2	弥生土器	壺	復元口径 25.0, 残高 8.3	内: ヨコナデ→ヘラミガキ 外: ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 明赤褐 2.5YR 5/6 外: にぶい赤褐 5YR 5/4	口縁部～ 胴部片	○	
97	SK2	弥生土器	壺	復元底径 8.2, 残高 16.3	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→オサエ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 明赤褐 2.5YR 5/6, 暗赤褐 5YR 3/2 外: 赤 10R 5/8, 赤黒 10R 2/1	胴部～ 底部片	○	
98	SK2	弥生土器	甕	口径 17.7, 残高 13.9	内: ヨコナデ→ヘラミガキ 外: ヨコナデ→ハケ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 褐灰 7.5YR 4/1 外: 橙 2.5YR 6/6	口縁部～ 胴部片	○	
99	SK2	弥生土器	甕	口径 27.5, 底径 7.4, 器高 25.5	内: ナデ→ヘラミガキ 外: ナデ→ハケ	良好	～3mmの白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 6/6	1/8 程度	○	

表 7 出土遺物観察表

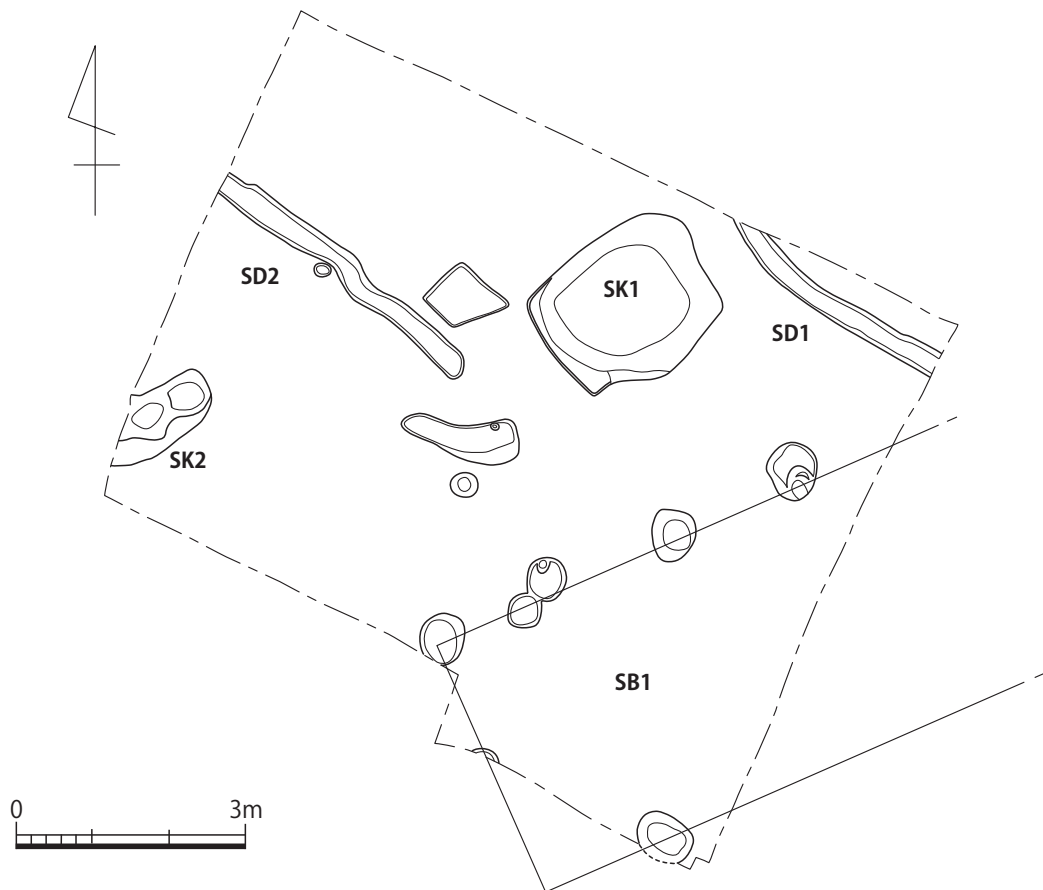
掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
100	SK2	弥生土器	甕	復元口径 32.5, 底径 9.4, 器高 28.2	内: ヨコナデ→ヘラミガキ, ハケ 外: ヨコナデ→ハケ, 刻目突帯	良好	～4mmの白色砂粒	内: 明黄褐 10YR 7/6, 褐灰 10YR 4/1 外: 明黄褐 10YR 7/6, 黒褐 10YR 3/1	1/3程度	○	
101	SK2	弥生土器	甕	復元口径 22.0, 残高 11.9, 8.6	内: ヨコナデ→オサエ 外: ヨコナデ→ハケ	良好	～3mmの白色砂粒	内外: 明赤褐 2.5YR 5/6, にぶい赤褐 5YR 4/4	1/2程度	○	
102	SK2	弥生土器	甕	復元口径 25.0, 残高 16.4	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→ハケ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 赤 10R 5/6, 明赤褐 5YR 5/6 外: 赤 10R 5/6, 明赤褐 2.5YR 5/6	口縁部～ 胴部片	○	
103	SK2	弥生土器	甕	底径 6.8, 残高 6.4	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→ハケ, オサエ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 褐灰 7.5YR 4/1, にぶい橙 7.5YR 7/4 外: 橙 5YR 6/6, 灰褐 7.5YR 5/2	底部片	○	
104	SK2	弥生土器	甕	底径 5.8, 残高 7.1	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→ハケ→オサエ	良好	～3mmの白色砂粒	内: にぶい赤褐 5YR 5/3, にぶい赤褐 5YR 5/4 外: 明赤褐 5YR 5/6, 明赤褐 2.5YR 5/8	底部片	○	
105	SK2	弥生土器	甕	底径 7.1, 残高 18.2	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→ハケ	良好	～4mmの透白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/6 外: 橙 5YR 6/6	胴部～ 底部片	○	
106	SK2	弥生土器	甕	底径 9.0, 残高 5.0	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～3.5mmの白色砂粒	内: 橙 2.5YR 6/6 外: 灰褐 5YR 4/2, にぶい赤褐 5YR 5/4	底部片	○	
107	SK2	弥生土器	高坏	口径 25.0, 残高 8.6	内: ナデ→オサエ, ヘラミガキ 外: ナデ	良好	～4mmの白色砂粒	内: 明赤褐 2.5YR 5/8, 黒褐 7.5YR 3/1 外: 褐 7.5YR 4/6, 明赤褐 2.5YR 5/6	口縁部～ 坏部片	○	
108	SK2	弥生土器	鉢	復元口径 23.8, 底径 8.0, 器高 14.7	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	良好	～4mmの透白色砂粒	内外: 明赤褐 2.5YR 5/6	2/3程度	○	
109	SK2	弥生土器	脚付鉢	復元口径 21.8, 復元底径 12.8, 器高 22.8	内: ナデ→オサエ 外: ナデ→オサエ→ハケ	良好	～3.5mmの白色砂粒	内: 赤 10R 5/6 外: 赤 10R 5/6, 赤褐 10R 5/4	2/3程度	○	
110	SK3	弥生土器	甕	残高 4.7	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 6/4, にぶい赤褐 7.5YR 7/4 外: 褐灰 5YR 4/1, 灰褐 7.5YR 4/2	口縁部～ 頭部片	○	
111	SK3	弥生土器	甕	復元口径 15.2, 残高 1.5	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 灰褐 7.5YR 4/2 外: 黒褐 7.5YR 3/2	口縁部片	○	
112	SK3	石製品	磨製石斧	残長 7.0, 残幅 3.4, 残厚 3.0, 重量 76.32g	—	—	—	灰白 5Y 7/1, 灰黄 2.5Y 6/2	小片	○	
113	SK5	弥生土器	甕	復元口径 32.8, 復元底径 7.6, 残高 9.0, 17.0	内: ナデ→オサエ 外: ナデ→ハケ	良好	～5mmの白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/6, にぶい橙 5YR 6/4 外: 灰褐 5YR 4/2, 赤褐 7.5YR 4/6	全体の1/6 程度	○	
114	SK5	弥生土器	甕	復元口径 23.6, 残高 6.8	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→ヘラミガキ?	良好	～4mmの白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/6 外: 明赤褐 5YR 5/6, オリブ黒 5Y 3/1	口縁部～ 胴部片	○	
115	SK5	弥生土器	甕	復元口径 23.0, 残高 5.6	内: ナデ 外: ナデ→ハケ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/6 外: にぶい赤褐 5YR 4/3, 明赤褐 5YR 5/6	口縁部～ 胴部片	○	
116	SK5	弥生土器	甕	復元底径 21.6, 残高 3.4	内: ナデ 外: ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/6 外: 灰褐 5YR 4/2	口縁部～ 胴部片	○	
117	SK5	弥生土器	甕	残高 6.6	内: ナデ 外: ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 明褐 7.5YR 5/6 外: 明赤褐 5YR 5/6	口縁部～ 胴部片	○	
118	SK5	弥生土器	甕	底径 6.5 残高 9.7	内: ナデ 外: ナデ→ハケ	良好	～3.5mmの白色砂粒	内: にぶい赤褐 5YR 5/4, 灰褐 5YR 4/2 外: 赤褐 5YR 4/6, にぶい赤褐 5YR 4/3	底部～ 胴部片	○	
119	SK5	弥生土器	甕	復元底径 6.4, 残高 8.1	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→オサエ	良好	～3.5mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6 外: 明赤褐 2.5YR 5/6	底部～ 胴部片	○	
120	SK5	弥生土器	甕	復元底径 7.5, 残高 7.5	内: ナデ 外: ナデ→オサエ	良好	～5mmの透白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6 外: 明褐 7.5YR 5/8	底部～ 胴部片	○	
121	SK5	弥生土器	甕	復元底径 9.6, 残高 5.2	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→ハケ	良好	～4mmの白色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 5/3, 黒褐 7.5YR 3/1 外: 明赤褐 5YR 5/6, 黒褐 7.5YR 3/2	底部～ 胴部片	○	
122	SK5	石製品	磨製石斧	残長 11.6, 幅 5.5, 厚 3.1, 重量 296.78g	—	—	—	灰 7.5Y 5/1, にぶい橙 7.5YR 7/3	下部部欠損	○	
123	SK7	青磁	小皿?	残高 1.1	内: ロクロナデ→施軸 外: ロクロナデ→櫛目文→施軸	良好	緻密	素地: にぶい黄橙 10YR 8/3 釉: 灰オリブ 7.5Y 5/2	体部片	○	同安系
124	SP1	弥生土器	小型甕	復元底径 4.6, 残高 4.3	内: ナデ→オサエ 外: ナデ→オサエ	良好	～2mmの白色砂粒	内: にぶい黄橙 10YR 7/4 外: にぶい黄橙 10YR 7/2, 褐灰 10YR 4/1	胴部～ 底部片	○	
125	SP1	弥生土器	高坏	残高 14.5	内: ナデ 外: ナデ→ハケ→ヘラミガキ	良好	～4.5mmの透白色砂粒	内: 灰褐 7.5YR 4/2 外: 橙 5YR 6/6, 灰褐 5YR 4/2	坏部～ 脚部片	○	
126	SP2	土師器	甕	残高 2.9	内: ナデ 外: ナデ	良好	～3mmの透白色砂粒	内: にぶい褐 7.5YR 5/4 外: にぶい橙 7.5YR 6/4	頭部～ 胴部片	○	
127	SP7	弥生土器	器台	残高 5.4	内: ナデ→オサエ 外: ナデ→オサエ→ハケ	良好	～4mmの白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 6/4, 灰褐 7.5YR 5/2	脚部片	○	
128	SP22	土師器	鉢	残高 3.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～2.5mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 7/6 外: 橙 7.5YR 7/6, にぶい黄橙 10YR 6/3	体部片	○	
129	SP23	土師器	高坏	残高 6.5	内: ナデ→シボリ 外: ナデ	良好	～4mmの白色砂粒	内: 浅黄橙 10YR 8/4 外: 浅黄橙 10YR 8/3	脚部片	○	
130	SP26	土師器	甕	復元口径 14.0, 残高 4.7	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→ハケ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 7/6, にぶい橙 7.5YR 6/4 外: 橙 5YR 6/6, 黒褐 5YR 3/1	口縁部～ 肩部片	○	
131	SP26	土師器	甕	復元口径 10.3, 残高 2.1	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～2.5mmの白色砂粒	内: 橙 5YR 6/6 外: 明赤褐 5YR 5/6	口縁部～ 頭部片	○	
132	SP2	須恵器	壺	残高 2.7	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→灰被り	良好	～2mmの白色砂粒	内: 灰白 N 6/0 外: 褐灰 10YR 6/1, オリブ黒 5Y 3/1	口縁部～ 頭部片	○	自然釉付着
133	SP2	須恵器	壺?	残高 5.8	内: 回転ナデ→(青海波文当具痕) 外: 回転ナデ→タタキ	良好	～2mmの白色砂粒	内外: 灰 N 6/0	胴部片	○	
134	SP17	土師器	埴	残高 2.6	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	やや良好	～5.5mmの白色砂粒	内: 褐 10YR 4/6 外: 明赤褐 5YR 5/6, 黒褐 7.5YR 3/1	口縁部～ 体部片	○	
135	SP4	土師器	壺	復元口径 12.4, 残高 7.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→タテハケ	良好	～2mmの白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 6/4	口縁部～ 頭部片	○	
136	SP4	土師器	甕	復元口径 15.0, 残高 3.6	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	良好	～4mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 7/6, にぶい褐 7.5YR 5/3 外: 橙 7.5YR 6/6, 橙 7.5YR 7/6	口縁部～ 頭部片	○	
137	SP4	土師器	製塩土器?	残高 2.2	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→オサエ→ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外: にぶい橙 2.5YR 7/4	坏部片	○	
138	SP14	弥生土器	甕	復元口径 22.8, 残高 3.4	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～1mmの白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 7/6	口縁部片	○	
139	SP15	弥生土器	鉢	復元口径 11.0, 残高 8.1	内: 回転ナデ→ヘラナデ 外: 回転ナデ→ヘラナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 灰褐 7.5YR 4/2, 褐灰 7.5YR 4/1 外: 褐 7.5YR 4/3, 褐灰 7.5YR 4/1	体部片	○	
140	SP18	土師器	高坏	口径 17.5, 残高 7.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/6 外: 赤褐 5YR 4/8	坏部片	○	
141	SP21	土師器	埴	復元口径 10.4, 器高 4.2	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～3mmの透白色砂粒 ～2mmの白色砂粒	内外: 橙 5YR 6/6, 明赤褐 2.5YR 5/8	1/4程度	○	
142	SP21	土師器	埴	復元口径 13.0, 器高 5.6	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→オサエ→ヘラケズリ	良好	～2.5mmの白色砂粒	内: にぶい赤褐 5YR 4/3, 赤褐 5YR 4/6 外: 灰褐 5YR 4/2, 明赤褐 2.5YR 5/6	1/2程度	○	

表 8 出土遺物観察表

第5章 福原長者原遺跡 第11次調査

第1節 遺跡の概要（第63図、図版24）

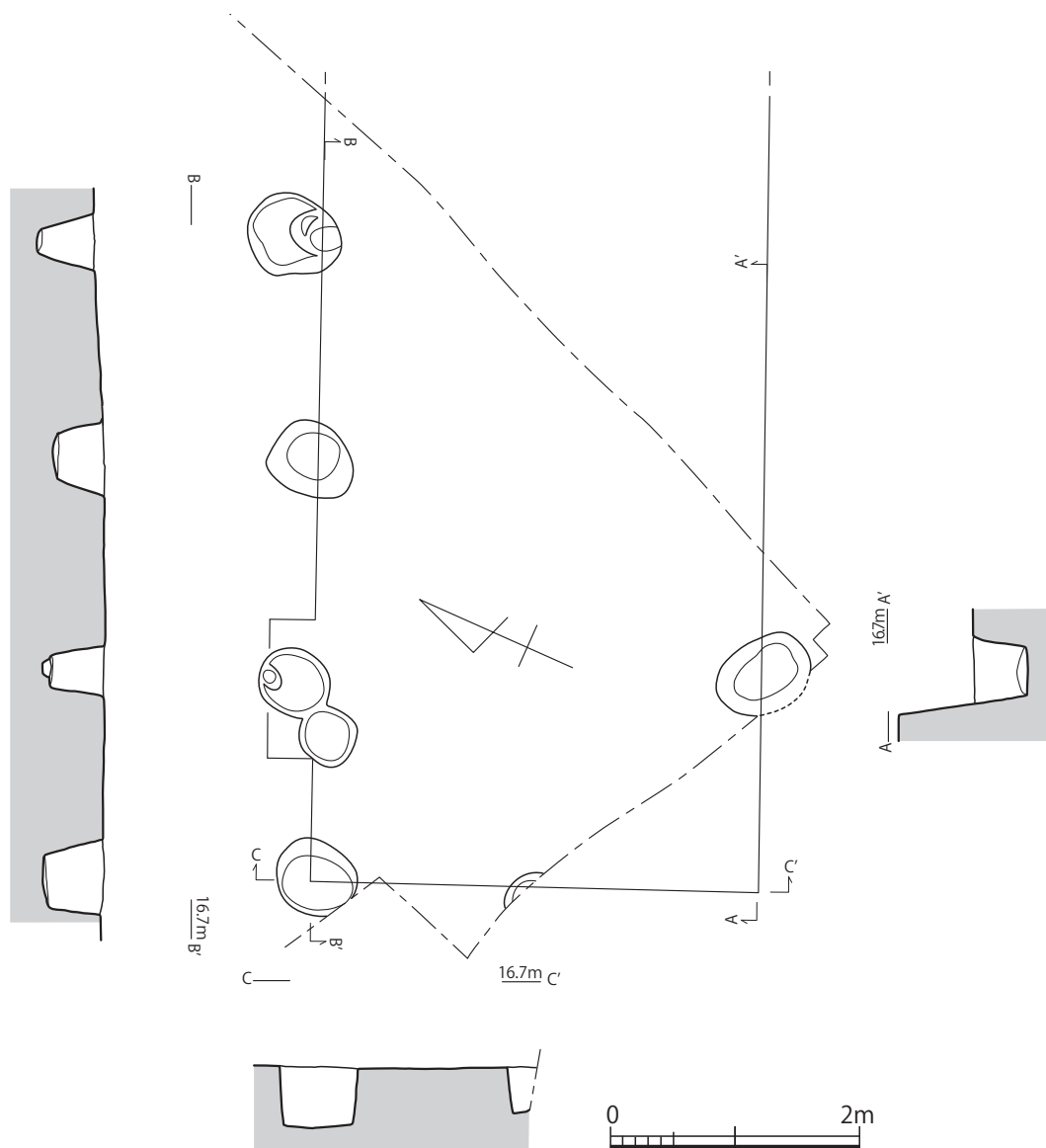
行橋市南端中央にある八景山の北麓から北側へ広がる台地上であり、調査地付近の標高は約15mである。調査地南側約120mには東九州自動車道建設に先立つ発掘調査によって明らかになった国指定史跡「福原長者原官衙遺跡」が立地するが、本章で述べる11次調査地との間には東西方向に小さな谷筋が走る。調査地一帯はもともと周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、令和2年度の確認調査結果をうけ、福原長者原官衙遺跡を包含する周知の埋蔵文化財包蔵地「福原長者原遺跡」を北側へ延伸したものである。福原長者原遺跡ではこれまでの発掘調査で官衙関連の遺構のほか縄文時代や古墳時代の竪穴建物などを確認しているが、今回の調査では官衙関連の遺構や遺物は確認していない。所在地は行橋市南泉一丁目140番5、調査面積は88㎡である。



第63図 福原長者原遺跡遺構配置図（1/100）

第2節 遺構と遺物

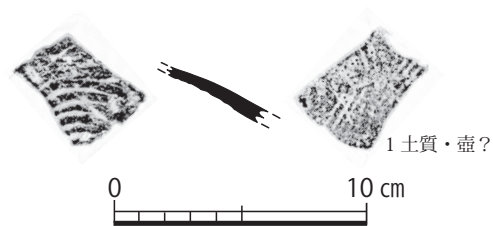
(1) 掘立柱建物



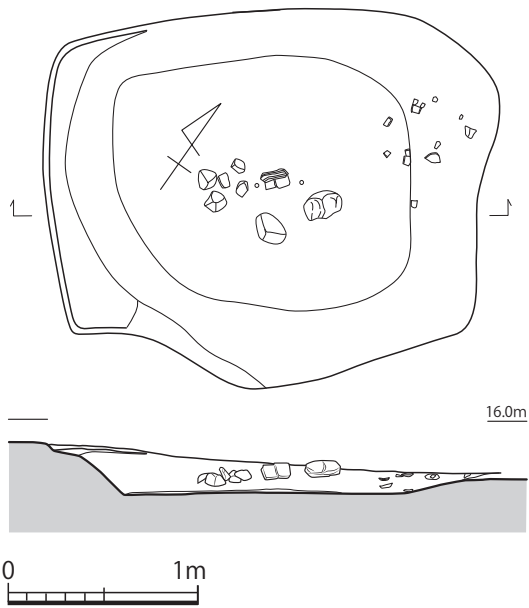
第64図 SB1 実測図 (1/60)

SB1 (第64図、図版24)

調査区の南東隅で検出した。桁行3間以上×梁行2間以上である。心々間の距離は桁行530cm以上、梁行365cmであり、柱間寸法は心々間で桁行165～180cm、梁行約180cmである。主軸はN-67°-Eである。直径54～78cm、深さ42～48cmの円形柱穴で構成される。土層では柱の抜き取り痕を確認しており、



第65図 SB1 出土遺物実測図 (1/3)



第66図 SK1 実測図 (1/40)

底面の幅から柱の直径 10cm と推測できる。国指定史跡「福原長者原官衙遺跡」で確認している掘立柱建物とは主軸が異なるため同一時期ではないと考えられる。出土遺物は土師質土器の小片 1 点のみだが、7 世紀頃の遺構であろうか。

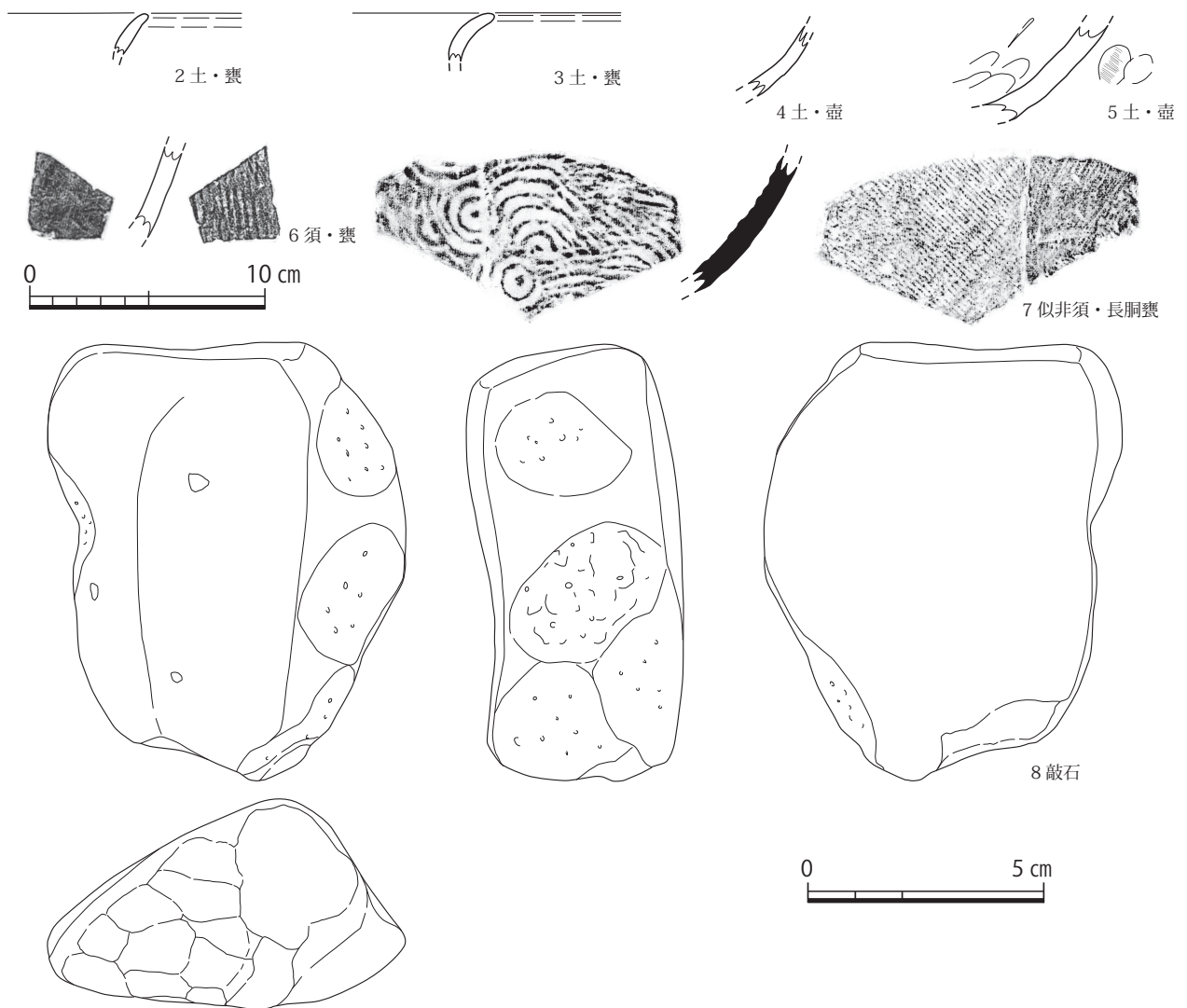
出土遺物 (第 65 図、図版 25)

壺の肩部であろうか。須恵器製作技法の模倣をしており、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕をもつ。

(2) 土坑

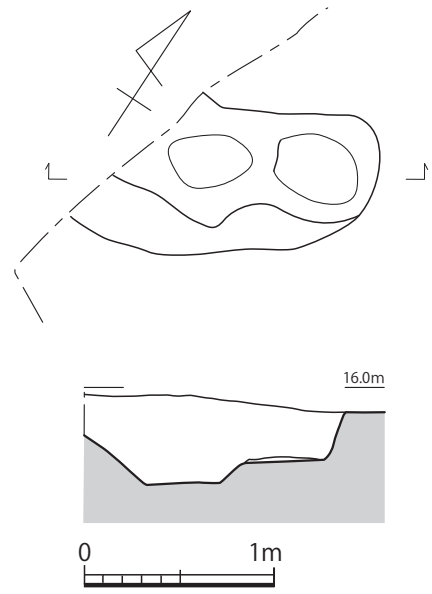
SK1 (第 66 図、図版 24)

調査区の北側中央で検出した。平面形はやや不整形な隅丸方形であり、長軸で 225cm、短



第67図 SK1 出土遺物実測図 (1/3・2/3)

軸で220cm、深さは24cmを測る。また、南西側には掘方に沿って奥行10～32cmのテラスをもつ。底面は平坦であり、掘方は緩やかに外反しながら立ち上がる。SK1の中央付近および北東側で土師器の細片少数と礫が出土した。状況から廃絶時に投棄したものと考えられる。7世紀頃の遺構であろうか。



第68図 SK2 実測図 (1/40)

出土遺物 (第67図、図版25)

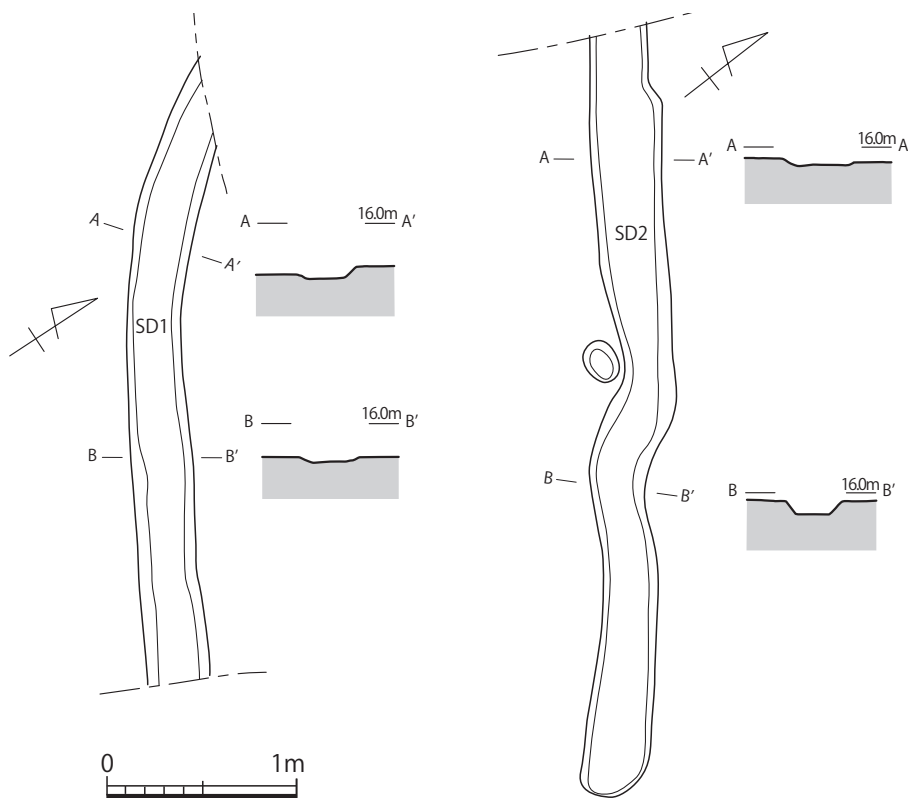
2～3は甕の口縁部であろうか。2はゆるやかに外反する。3は丸く外反する。4～5は体部片である。5は内外面にオサエが認められる。6は須恵器甕の体部片である。外面に平行タタキ、内面に当て具によるわずかな窪みをもつ。7は土師質土器である。須恵器の製作技法を模倣しており、外面にタタキ、内面に同心円当て具痕をもつ。8は敲石か。

SK2 (第68図、図版25)

調査区南西隅で検出した。調査区壁際で掘方が立ち上がることから全体の8割程度は検出できていると考えられ、平面形は楕円形を呈するとみられる。長軸で170cm以上、短軸で80cm、深さは48cmを測る。掘方の西側にテラスをもつ。掘方は西側で屹立し、東側は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

(3) 溝

SD1 (第69図、図版25)



第69図 SD1・SD2 実測図 (1/40)

調査区の東隅で検出した。北側から湾曲して南東側へ伸びる。幅 30～36cm、深さ 5cm、断面形は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

SD2 (第 69 図、図版 25)

調査区の西側から中央付近にかけて検出した。幅 30～36cm、深さ 3～5cm、断面形は逆台形を呈する。指向が SD1 と概ね平行であり、幅、深さ、断面形が共通しているため両者は関連するものであろう。遺物は出土していない。

第 3 節 結語

今回の調査では遺構密度は低く、遺物もほとんど出土していないが、福原長者原官衙遺跡の北側にも遺跡が展開していることが明確になった。しかし、福原長者原官衙遺跡に関連するとみられる遺構は確認していない。SB1 は比較的大型の柱穴をもつが、主軸は大きく東へ振れている。福原長者原官衙遺跡の掘立柱建物跡、回廊、大溝はいずれも南北方向もしくは東西方向を意識して造られていることからすると異なる時期のものである可能性が高いのではないだろうか。SK2 から土師器の小片がわずかに出土しているが、6 世紀後半～7 世紀前半に位置づけられるものと推測する。これらのことから、当遺跡は福原長者原官衙遺跡に先行する集落跡であると考えられる。

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
1	SB1	土師質土器	壺?	残高 2.2	内: 回転ナデ (青海波状文当具痕) 外: 回転ナデ→タキ	不良	～1.5mm の透白色砂粒	内: にぶい黄橙 10YR 7/4 外: 明褐 7.5YR 5/6, にぶい黄橙 10YR 7/3	肩部片	○	
2	SK1	土師器	甕	残高 1.8	内: ナデ 外: ナデ	良好	～4mm の白色砂粒	内: 橙 5YR 6/6 外: 橙 7.5YR 6/6	口縁部片	○	
3	SK1	土師器	甕	残高 2.2	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～3mm の白色砂粒	内: 橙 5YR 6/6 外: 明赤褐 5YR 5/8	口縁部片	○	
4	SK1	土師器	壺	残高 1.8	内: ナデ 外: ナデ	良好	～2mm の白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 6/6	胴部片	○	
5	SK1	土師器	壺	残高 4.1	内: 回転ナデ→ヘラケズリ, オサエ 外: 回転ナデ→オサエ	良好	～2mm の白色砂粒	内外: 橙 5YR 6/6	胴部～底部片	○	
6	SK1	須恵器	甕	残高 3.9	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ→タキ	良好	～1mm の白色砂粒	内: 灰白 2.5Y 7/1 外: 黄灰 2.5Y 5/1	胴部片	○	自然袖付着
7	SK1	似非須恵土師器	長胴甕	残高 5.9	内: 回転ナデ (青海波状文当具痕) 外: 回転ナデ→タキ→ハケ	良好	緻密	内: 浅黄橙 10YR 8/4 外: にぶい黄橙 10YR 6/4	胴部片	○	
8	SK1	石製品	蔽石	長 9.4, 幅 7.6, 厚 4.4, 重量 421.06g	—	—	—	にぶい黄橙 10YR 7/4	完形	○	

表 9 出土遺物観察表

第6章 福富侍島遺跡

第1節 遺跡の概要（第70図、図版26）

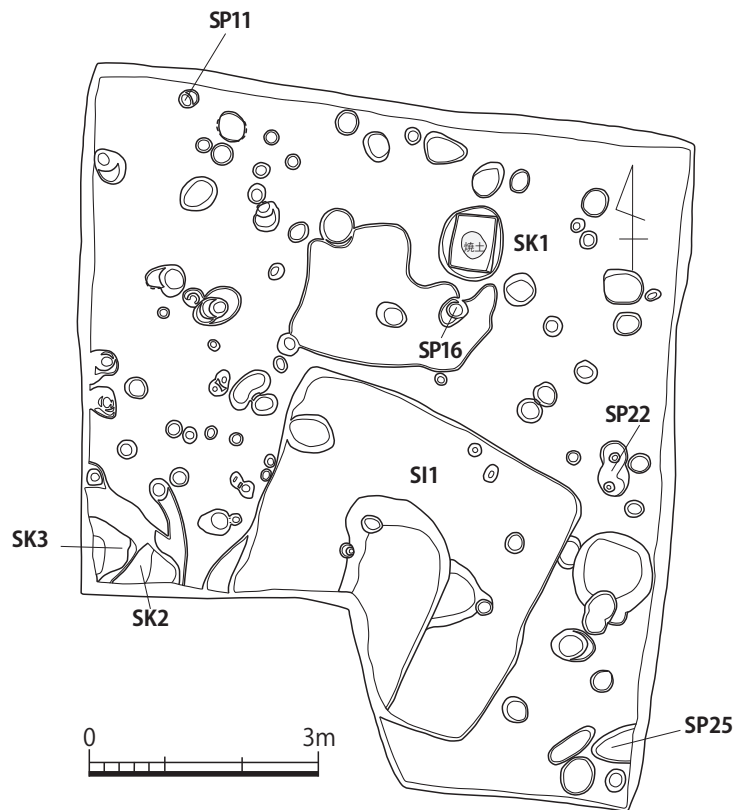
福原長者原官衙遺跡が所在する台地から北西へ伸びる丘陵の先端付近に広がる。標高は約9mである。現在、丘陵は平成筑豊鉄道が南北方向に横切るあたりで分断されているため、南北約300m、東西約120mの独立丘陵の様相を呈する。分断されているのは丘陵の西隣を北流する今川の旧河道の影響であろうか。丘陵上は県営団地となっており、造成工事中に弥生時代中期以降の土器や土師器が多量に出土したと記録されている（行橋市遺跡調書「福富侍島遺跡」昭和46年）。令和2年度に実施した確認調査および発掘調査が当遺跡における初めての調査であり、以下にその詳細を述べる。所在地は行橋市西泉七丁目1108番6、調査面積は72㎡である。

第2節 遺構と遺物

（1）竪穴建物

SI1（第71図、図版26・27）

調査区の南側で検出した。建物の南西隅は調査区外であるため全体は検出できていないが、東辺365cm、北辺410cmの方形プランである。掘方はやや開きながら直線的に立ち上がる。壁際溝はもたない。SI1南辺中央から中心部にかけて緩やかに窪んでいることからベッド状遺構を備えているものと考えられる。ただし、床面では湧水が発生して軟弱地盤であったため掘方は明瞭ではない。ベッド状遺構は南側に向かって開くコ字状で備えられており、奥行は110～130cmである。明確な支柱穴は不明。なお、掘削中、土



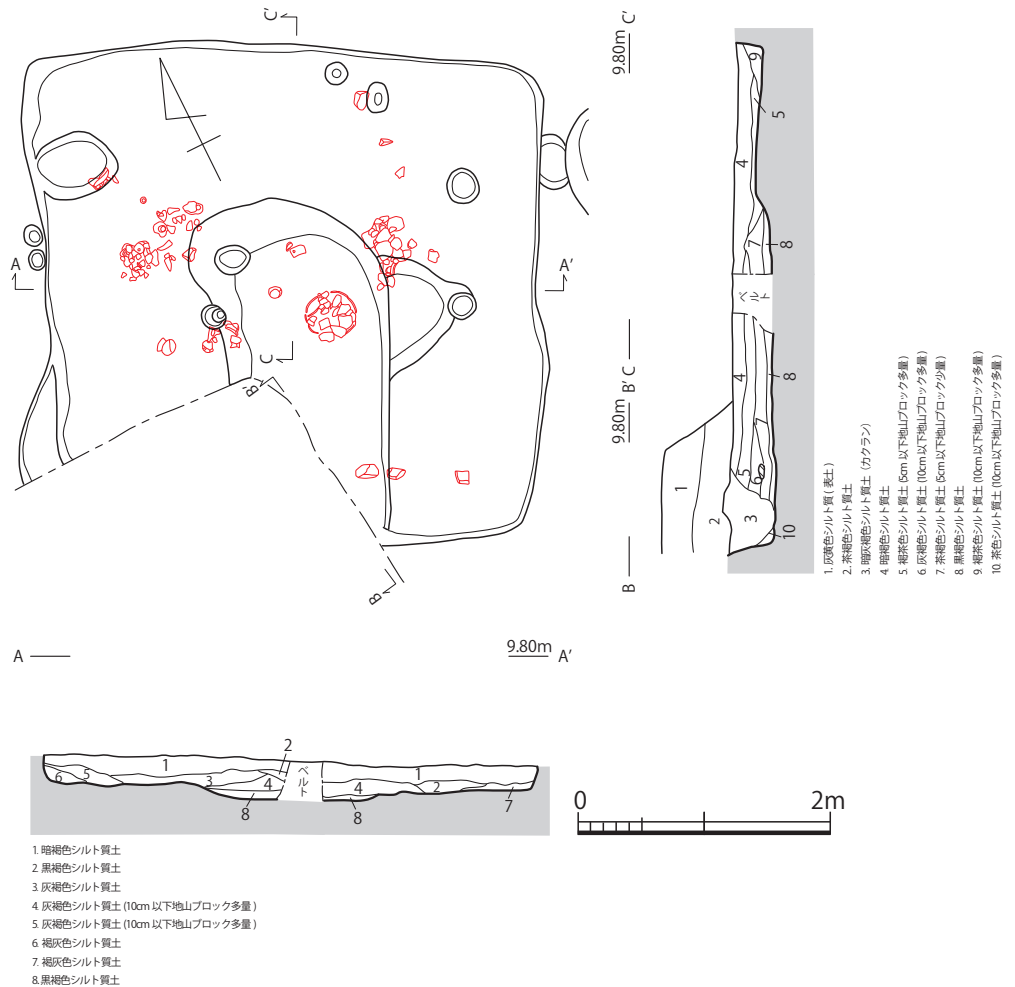
第70図 福富侍島遺跡遺構配置図（1/100）

師器や石器がまとまって出土した。出土位置は床面ではなく、土層図中の1.暗褐色シルト質土の底面付近であり、一括して投棄されたものと考えられる。これらの遺物から5世紀頃には廃絶したものと考えられる。ほか、図化していないが黒曜石の細かい薄片が多量に出土している。また、底部に回転糸切痕をもつ土師器坏等の中世遺物があるが、SI1を掘り込んでいた未検出の遺構の出土遺物が混入したものであろう。

出土遺物（第72～74図、図版29・30）

1～12は壺である。1は口縁部であり、内面に貝殻施文が認められる。2は二重口縁壺の口縁であろう。3は口縁部が外反し端部をやや丸く収める。内面の頸部には明瞭な屈曲部をもつ。4・5は肩部である。外面がハケ調整、内面にオサエとケズリを施す。6は断面形が台形を呈する突帯に斜格子文様を施す。7

～9は小壺である。7は底部に円形の粘土板を張り付け平坦とする。内面には大胆な指ナデを施す。8は表面の磨滅が著しい。9は内面に粘土ヒモの継ぎ目をもつ。内面には1条の工具痕がつく。10は底部付近から丸みを帯びており、胴部は球形を呈するものか。内面にケズリを施す。11はほぼ完形である。内面は横方向に細かい単位のケズリを施し、器壁が薄い。12は上半と下半の2つに分かれているが同一個体であると考えられる。頸部の内面には粘土ヒモの継ぎ目をもつ。胴部は球形を呈するものか。13～20は甕である。



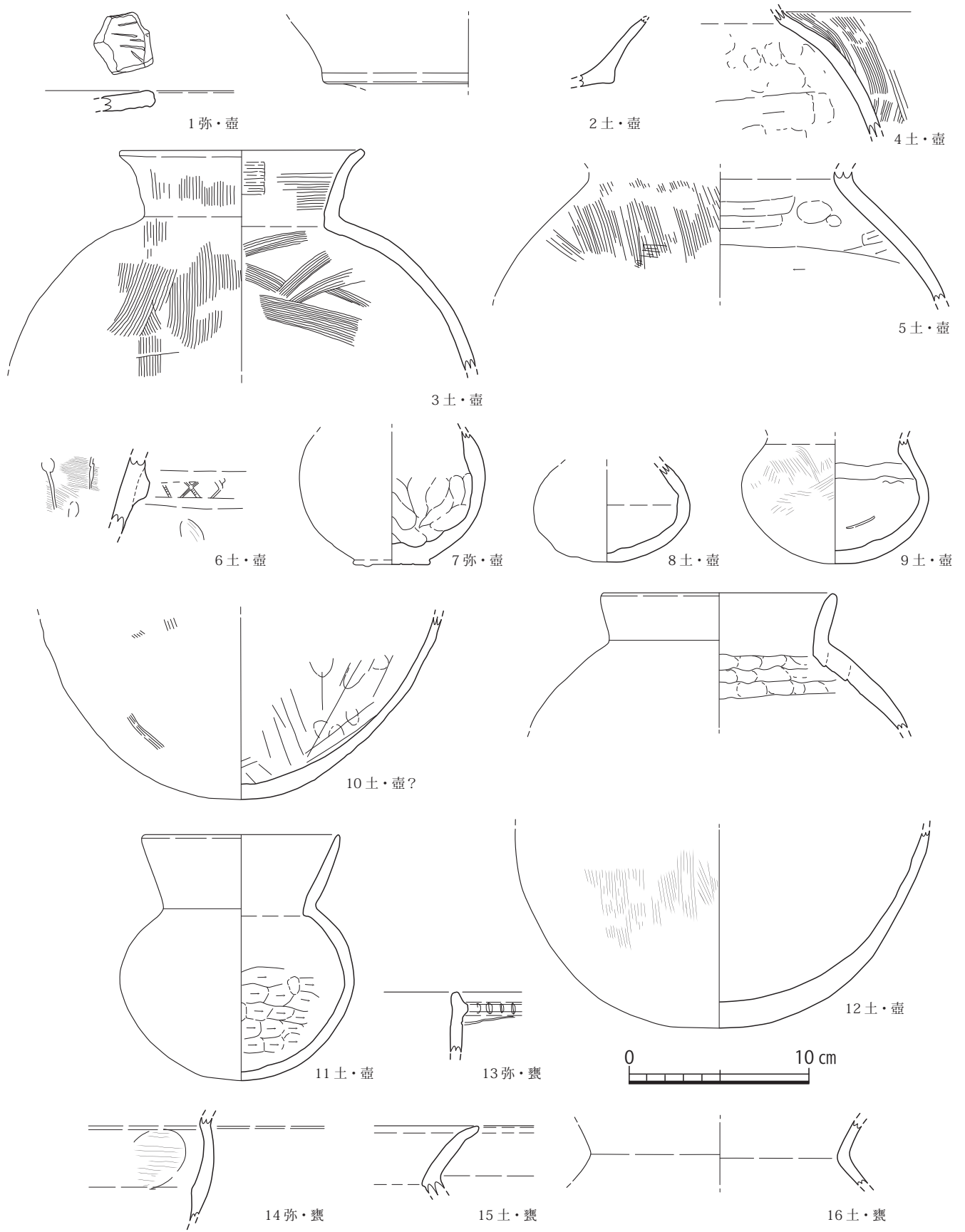
第71図 SI1実測図 (1/60)

13は口縁下部の突帯に刻み目を施し、突帯の下に沈線を1を認める。14は甕の頸部であろう。15は頸部がく字状に屈曲し、口縁部が外反する。端部はさらに外反する。16は頸部片であり、く字状に屈曲する。17は口縁が外反し、先端は先細る。頸部内面に口縁部の継ぎ目が確認できる。18は口縁が直立気味に立ち上がり、先端がやや先細る。頸部内面に口縁部の継ぎ目が確認できる。19は頸部がだならかであり、口縁部はゆるやかに外反して端部は丸く収める。20は弥生土器の甕の底部である。底面は残存していない。21～28は高坏である。21は坏部で口縁部は外反する。22は脚部の上半である。23は坏部と脚部の接合部であり、坏部の見込みに粘土塊を充填している。24は裾部に向かってなだらかに開くが内面に屈曲部をもつ。25は内外面ともになだらかに開く。26は裾部に向かってなだらかに開くが、内面に緩やかな屈曲部をもつ。27は脚部に膨らみをもち、ゆるやかな屈曲部をもって裾部が広がる。28は脚部が直線的に開き、稜をもって裾部が開く。29・30は土師器の皿、31・32は土師器の坏である。磨滅が著しいが29と32の底面には回転糸切の痕跡がある。33～35は瓦器塊である。36～38は敲石である。各所に敲打痕をもつ。39は砥石である。わずかに擦痕を認める。40は大型砥石である。砥面は範囲が狭く、表面がやや粗いため使用頻度は高くないと考えられる。

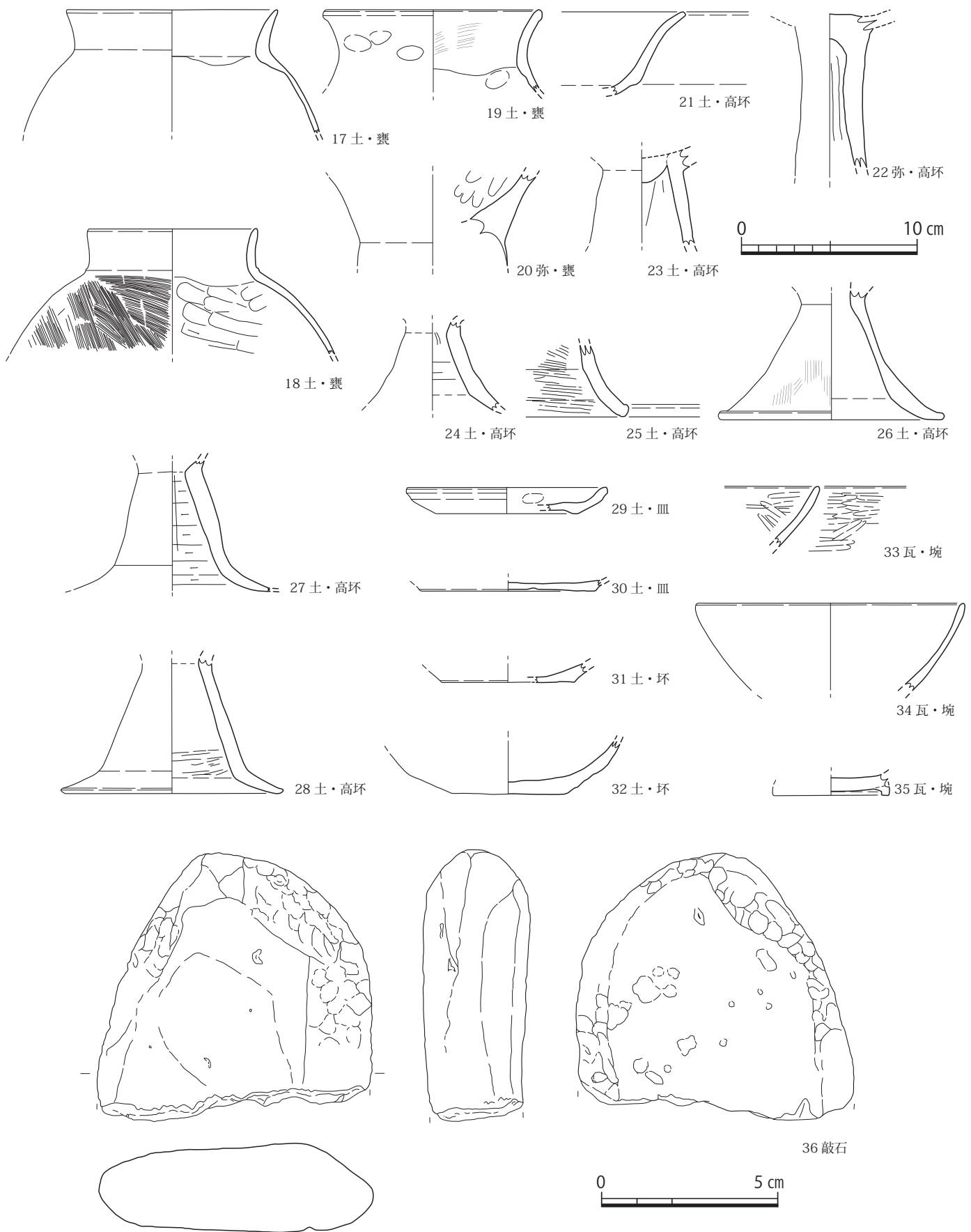
(2) 土坑

SK1 (第75図、図版27)

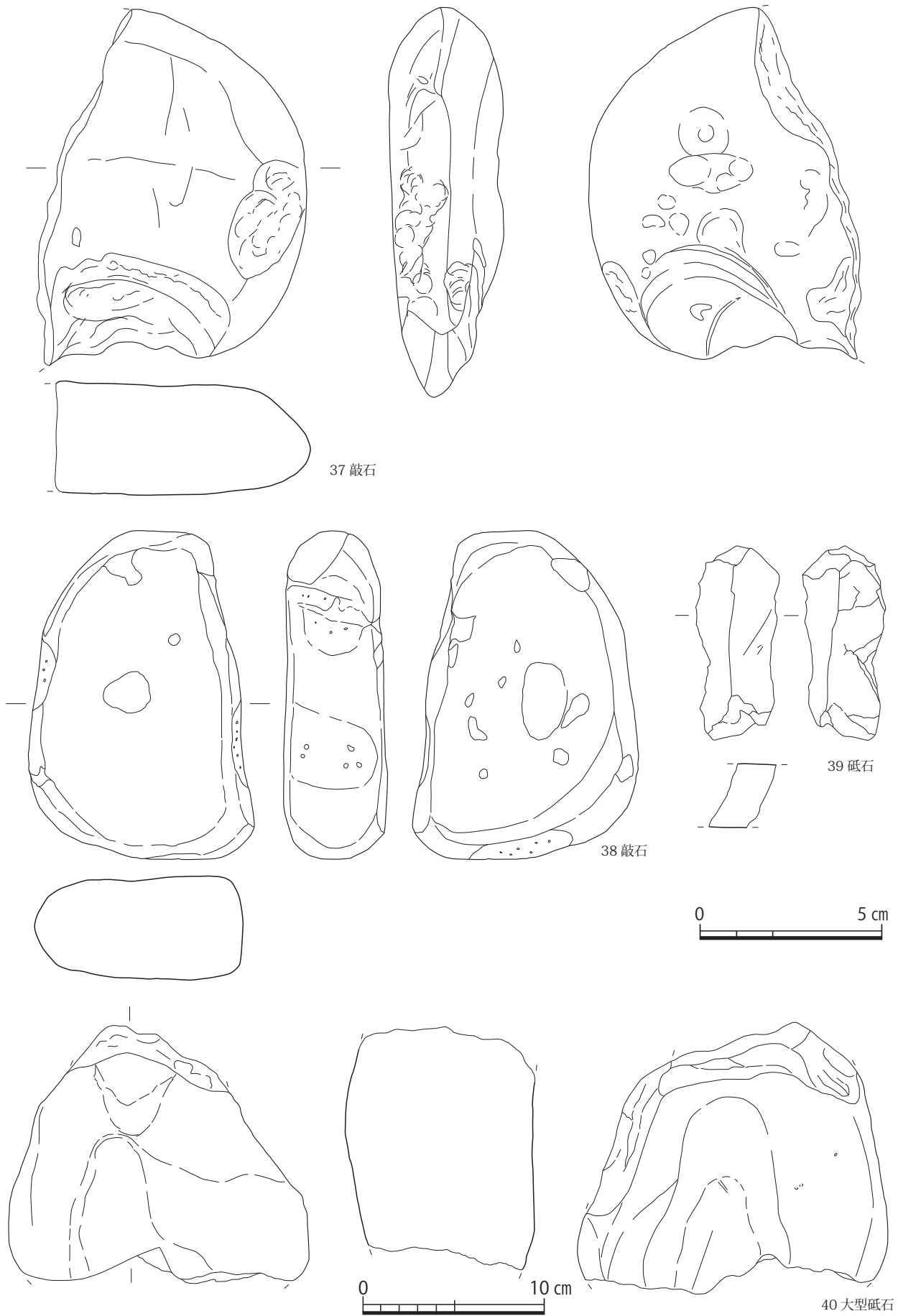
調査区の北側中央にて検出した。掘方上端が円形になっているが、これは単なる掘りすぎである。平面形は方形であり、長軸で74cm、短軸で58cm、深さ16cmを測る。底面中央には焼土を確認した。遺物は出土していない。



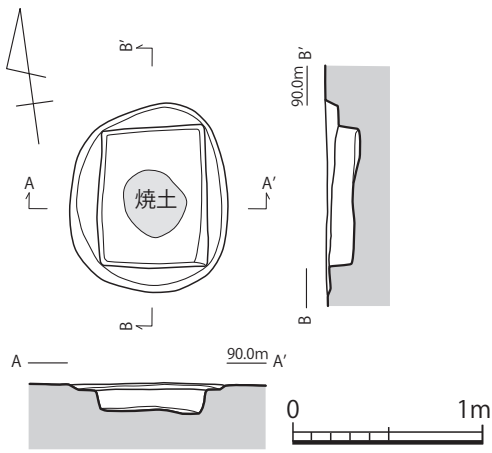
第 72 図 S11 出土遺物実測図 1 (1/3)



第 73 图 S11 出土遺物実測图 2 (1/3・2/3)



第 74 図 SI1 出土遺物実測図 3 (1/3・2/3)



第75図 SK1 実測図 (1/40)

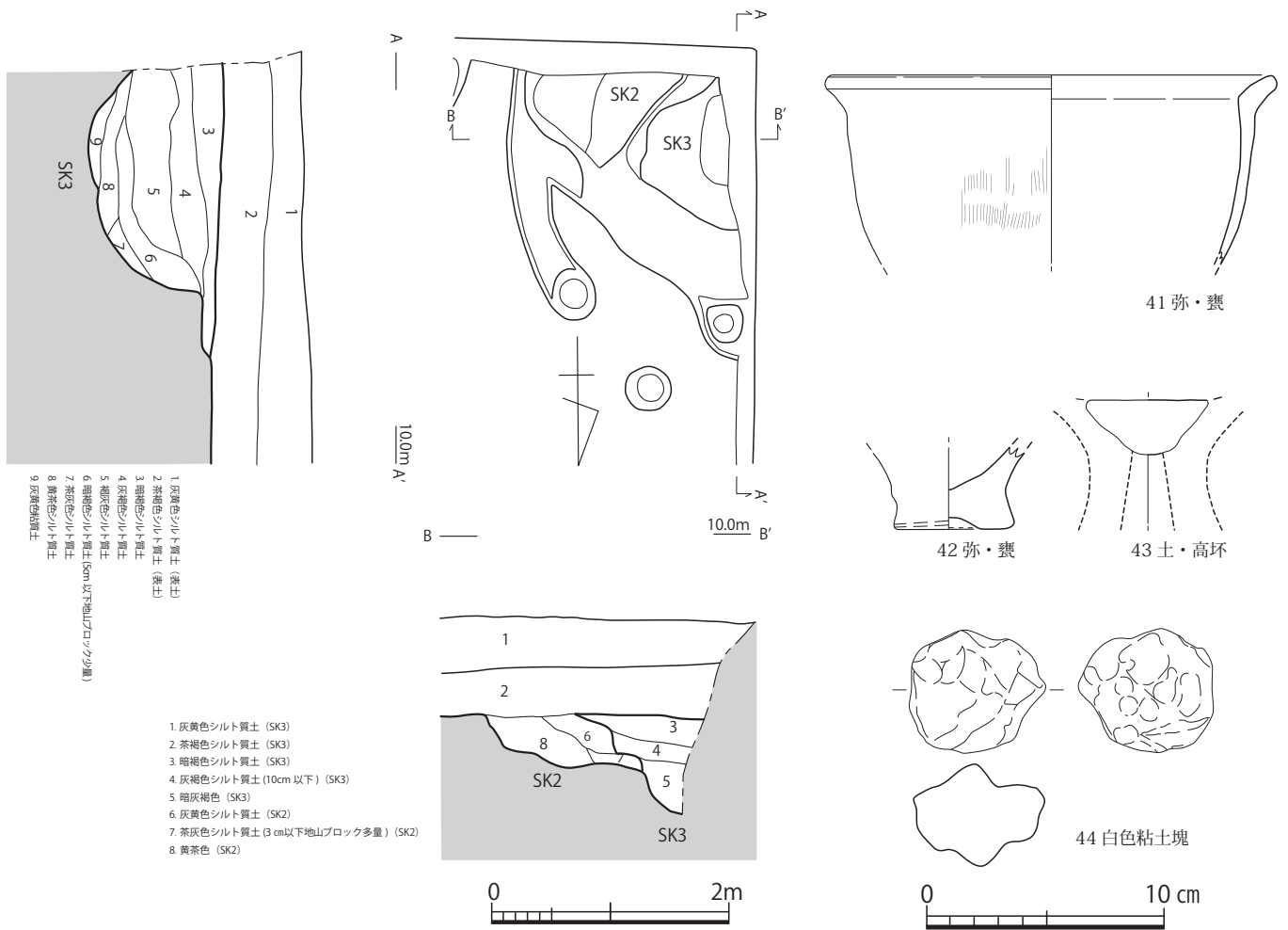
SK2・SK3 (第76図、図版28)

調査区の南西隅で検出した。平面形は不明である。当初、同一の遺構と認識して掘削していたが、途中でテラスを確認したため異なる遺構が切り合っているものと判断した。土層観察の結果、テラスを底面とする土坑をSK2、凸レンズ状の断面をもつ土坑をSK3とした。SK2はSK3に切られる。SK2は底面が水平気味ではあるが凹凸をもち、掘方は内反気味に立ち上がる。SK3は断面形が凸レンズ上を呈し、内反しながらほぼ直立するまで立ち上がる。いずれも弥生土器が出土しており、弥生時代中期の遺構と考えられる。

出土遺物

SK2 (第77図、図版30)

41～42は甕である。41は頸部内面に稜線をもって外反する。42は底部であり、底面中央は上げ底となる。43は高坏の坏部と脚部の接合部に充填していた粘土塊である。44は白色粘土塊である。砂粒や藁は混入していない。

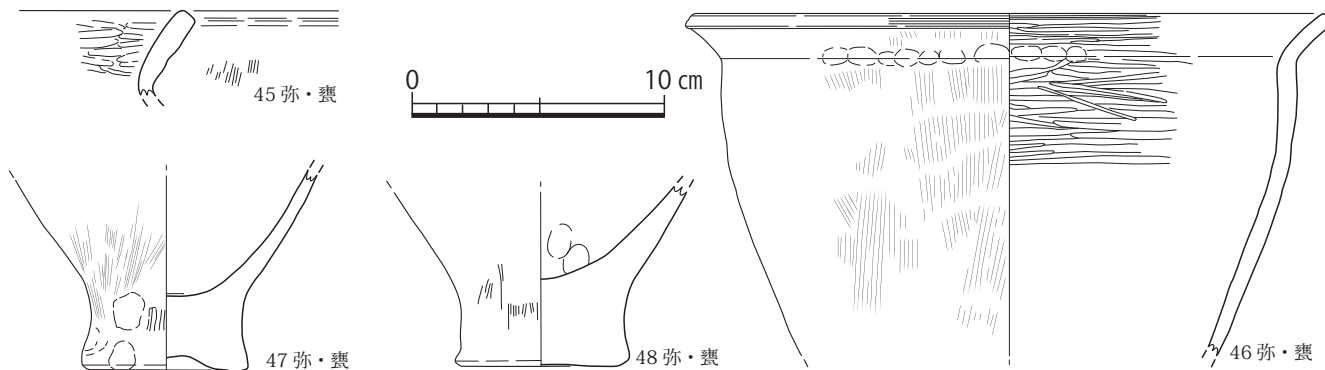


第76図 SK2・SK3 実測図 (1/60)

第77図 SK2 出土遺物実測図 (1/3)

SK3 (第 78 図、図版 30)

45～48は甕である。45は口縁であり、端部を平坦に調整する。46は頸部がなだらかに屈曲し、口縁部が外反する。口縁端部は下部に向かってわずかにつまみ出す。47は底部であり、外縁は平坦だが中央は上げ底となる。48は底部であり、底面は平坦である。

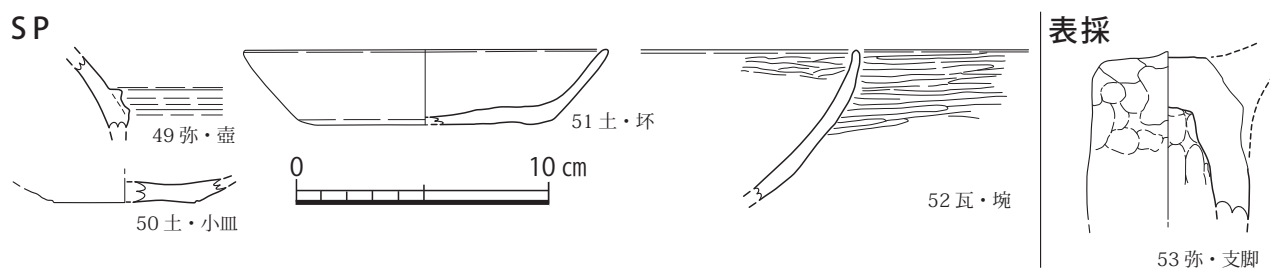


第 78 図 SK3 出土遺物実測図 (1/3)

(3) 柱穴・表採 (第 79 図、図版 30)

以下、柱穴からの出土遺物を報告する。

49は壺の肩部とみられ、断面 M 字状の突帯を巡らす。50は小皿、51は坏である。摩滅が著しく底部には回転糸切の痕跡が確認できない。52は瓦器碗である。内外面ともに横方向のミガキを施す。



第 79 図 SP・表採出土遺物実測図 (1/3)

第 3 節 結語

今回の調査では竪穴建物 1、土坑 3 基を確認した。竪穴建物からは 5 世紀代の土師器や大型砥石などが出土したほか、土坑からは弥生時代中期の土器が出土していることから、福富侍島遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期にかけての集落跡が展開しているものと考えられる。また、柱穴のほか混入ではあるが竪穴建物から中世遺物が出土しているため「侍島」の小字どおり、12 世紀後半から 13 世紀の遺構が展開していることも間違いない。最後に補足として、令和 3 年度に調査地南側隣接地で実施した浄化槽設置工事立会で東西方向に伸びる幅約 2 m、深さ約 1 m、断面凸レンズ状の大溝を確認したことを明記しておく。SK3 と規模や形状が類似しているほか弥生土器の出土を確認している。環濠の存在も想定できよう。

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
1	S11	弥生土器	壺	残高 1.2	内：ナデ 外：ナデ→貝殻施文	良好	～3mmの白色砂粒	内：橙 7.5YR 7/6、にぶい橙 7.5YR 6/4 外：橙 7.5YR 6/6	口縁部片	○	
2	S11	土師器	壺	残高 3.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	～7mmの透白色砂粒	内：にぶい黄橙 10YR 6/4 外：明黄褐 10YR 6/6	口縁部片	○	
3	S11	土師器	壺	復元口径 13.5、残高 12.5	内：回転ナデ→ハケ 外：回転ナデ→ハケ	良好	～4mmの白色砂粒	内：黒 N 1.5/0 外：橙 7.5YR 7/6	口縁部～胴部片	○	
4	S11	土師器	壺	残高 4.9	内：回転ナデ→ヘラケズリ、オサエ 外：回転ナデ→ハケ	良好	～3mmの透白色砂粒	内：橙 5YR 7/6 外：橙 5YR 6/6	頸部～胴部片	○	

表 10 出土遺物観察表

掲載番号	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	写真	備考
5	S11	土師器	壺	残高 7.1	内: 回転ナデ→ヘラケズリ 外: 回転ナデ→ハケ→ヨコナデ	良好	～3mmの透白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/8 外: 明褐 7.5YR 5/8	頸部～ 胴部片	○	
6	S11	土師器	壺	残高 4.2	内: 回転ナデ→ヘラケズリ, ハケ 外: 回転ナデ→ヘラケズリ, 斜格子文刻目	良好	～3mmの白色砂粒	内: 褐 7.5YR 4/3 外: にぶい橙 7.5YR 6/4	突帯部片	○	
7	S11	弥生土器	壺	復元底径 4.0, 残高 7.5	内: ヨコナデ→ヨコナデ, オサエ 外: ヨコナデ→ヨコナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 黄褐 10YR 5/6 外: 灰黄褐 10YR 4/2	1/4程度	○	
8	S11	土師器	壺	残高 5.5	内: ナデ→オサエ 外: ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 黒褐 7.5YR 3/1 外: にぶい赤褐 5YR 4/4	胴部～ 底部片	○	
9	S11	土師器	小壺	残高 6.9	内: 回転ナデ→ヨコナデ, (工具痕) 外: 回転ナデ→ヨコナデ→ハケ	良好	～5mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6, にぶい褐 7.5YR 5/3 外: 橙 7.5YR 6/6, 灰褐 7.5YR 5/2	3/4程度	○	
10	S11	土師器	壺?	残高 10.2	内: 回転ナデ→ヘラケズリ, オサエ 外: 回転ナデ→ハケ, オサエ	良好	～5mmの透白色砂粒	内: 褐灰 10YR 4/1 外: にぶい黄橙 10YR 6/4	底部片	○	
11	S11	土師器	壺	口径 11.0, 器高 13.9	内: 回転ナデ→ヘラケズリ, オサエ 外: 回転ナデ	良好	～4mmの白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 7/6	ほぼ完形	○	
12	S11	土師器	壺	復元口径 13.0, 口縁部残高 7.7, 底部残高 11.2	内: 回転ナデ→オサエ 外: 回転ナデ→タテハケ	良好	～6mmの白色砂粒	内: にぶい黄橙 10YR 7/4 外: 明黄褐 10YR 7/6	1/3程度	○	
13	S11	弥生土器	甕	残高 3.3	内: ナデ 外: ナデ→刻目突帯	良好	～2mmの白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 6/6	口縁部片	○	
14	S11	弥生土器	甕	残高 5.2	内: ヨコナデ→オサエ, 工具ナデ 外: ヨコナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 7/4 外: 橙 7.5YR 7/6	頸部～ 肩部片	○	
15	S11	土師器	甕	残高 2.7	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～5mmの白色砂粒	内: 黒褐 10YR 3/1 外: にぶい黄橙 10YR 7/4	口縁部片	○	
16	S11	土師器	甕	残高 3.7	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内外: にぶい橙 7.5YR 7/4	頸部～ 肩部片	○	
17	S11	土師器	甕	復元口径 12.2, 残高 7.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6 外: 橙 5YR 6/6	口縁部～ 胴部片	○	
18	S11	土師器	甕	復元口径 11.0, 残高 8.1	内: 回転ナデ→ヘラケズリ 外: 回転ナデ→ハケ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6, 橙 5YR 6/6 外: 橙 5YR 6/6	口縁部～ 肩部片	○	
19	S11	土師器	甕	復元口径 12.0, 残高 4.8	内: 回転ナデ→ハケ, オサエ 外: 回転ナデ→オサエ	良好	～1mmの白色砂粒	内: 明赤褐 5YR 5/6 外: 明赤褐 5YR 5/8	口縁部片	○	
20	S11	弥生土器	甕	残高 5.1	内: ナデ→オサエ 外: 回転ナデ	良好	～4mmの透白色砂粒	内: にぶい黄橙 10YR 6/4 外: 橙 7.5YR 6/6	底部片	○	
21	S11	土師器	高坏	残高 4.8	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内外: 浅黄橙 10YR 8/3	口縁部～ 胴部片	○	
22	S11	弥生土器	高坏	残高 9.4	内: ヨコナデ→シボリ 外: ヨコナデ	良好	～1mmの透白色砂粒	内外: 浅黄橙 10YR 8/4	脚部片	○	
23	S11	土師器	高坏	残高 4.6	内: 回転ナデ→シボリ 外: 回転ナデ	良好	～4mmの透白色砂粒	内: 褐灰 5YR 4/1 外: 明赤褐 5YR 5/6	坏部～ 脚部片	○	円盤充てん法
24	S11	土師器	高坏	残高 5.1	内: 回転ナデ→シボリ→ヘラケズリ 外: 回転ナデ	良好	～4.5mmの白色砂粒	内: にぶい褐 7.5YR 5/4 外: 明褐 7.5YR 5/6	脚部片	○	
25	S11	土師器	高坏	残高 4.1	内: 回転ナデ→ハケ 外: 回転ナデ→ハケ, ヘラミガキ	良好	～2mmの透白色砂粒	内: にぶい黄橙 10YR 6/4 外: にぶい黄橙 10YR 7/4	脚部片	○	
26	S11	土師器	高坏	復元底径 13.0, 残高 7.4	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内外: 浅黄橙 7.5YR 8/4	脚部片	○	
27	S11	土師器	高坏	残高 7.5	内: 回転ナデ→シボリ→ヘラケズリ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内: にぶい黄橙 10YR 7/2 外: 橙 2.5YR 7/6, 浅黄橙 10YR 8/4	脚部片	○	
28	S11	土師器	高坏	復元底径 12.8, 残高 7.8	内: 回転ナデ→ヘラケズリ 外: 回転ナデ	良好	～2mmの透白色砂粒	内: 明赤褐 2.5YR 5/6 外: 明赤褐 2.5YR 5/8	脚部片	○	
29	S11	土師器	皿	復元口径 11.4, 復元底径 8.2, 器高 1.4	内: ロクロナデ→オサエ 外: ロクロナデ→(板状圧痕)	良好	～2mmの白色砂粒	内外: にぶい黄橙 10YR 7/3	1/6程度	○	
30	S11	土師器	皿	復元底径 10.0, 残高 0.6	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ	良好	～2mmの白色砂粒	内: にぶい赤褐 5YR 5/4 外: にぶい橙 7.5YR 6/4	底部片	○	
31	S11	土師器	坏	復元底径 7.6, 残高 1.1	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→糸切り	良好	～2mmの白色砂粒	内: 橙 7.5YR 6/6 外: 橙 7.5YR 6/6, にぶい黄橙 10YR 6/4	体部～ 底部片	○	
32	S11	土師器	坏	底径 6.6, 残高 3.0	内: ロクロナデ→オサエ 外: ロクロナデ→回転糸切り(板状圧痕)	良好	～4mmの白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 7/6	底部片	○	
33	S11	瓦器	埴	残高 3.5	内: ロクロナデ→ヘラミガキ 外: ロクロナデ→ヘラミガキ	良好	～1mmの透白色砂粒	内: 灰黄褐 10YR 6/2, 灰 5Y 6/1 外: 灰白 5Y 7/1, 灰白 2.5Y 8/1	口縁部～ 体部片	○	
34	S11	瓦器	埴	復元口径 15.5, 残高 5.0	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ	良好	～1mmの黒色砂粒	内: 黄灰 2.5Y 4/1, 灰白 2.5Y 8/2 外: 淡黄 2.5Y 8/3, 灰 5Y 5/1	口縁部～ 体部片	○	
35	S11	瓦器	埴	復元高台径 6.6, 残高 1.2	内: ロクロナデ→不定方向ナデ 外: ロクロナデ	やや良好	緻密	内: 灰 5Y 5/1, 灰 5Y 6/1 外: 灰黄 2.5Y 7/2	底部～ 高台部片	○	
36	S11	石製品	敲石	残長 7.7, 幅 7.8, 厚 2.5, 重 233.35g	—	—	—	にぶい黄橙 10YR 6/4	1/2程度	○	
37	S11	石製品	敲石	長 21.0, 幅 7.2, 厚 3.0, 重 338.97g	—	—	—	にぶい黄橙 10YR 6/4	1/2程度	○	
38	S11	石製品	敲石	長 9.1, 幅 2.7, 厚 2.9, 重 273.51g	—	—	—	にぶい黄橙 7.5YR 6/4	完形	○	
39	S11	石製品	砥石	残長 5.4, 残幅 2.2, 厚 1.8, 重量 25.46g	—	—	—	浅黄 2.5Y 7/3	小片	○	
40	S11	石製品	大型砥石	残長 15.2, 幅 17.3, 厚 10.5, 重量 4220g	—	—	—	にぶい黄橙 10YR 6/3	1/2程度	○	
41	SK2	弥生土器	甕	復元口径 18.8, 残高 8.0	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ→タテハケ	良好	～3mmの白色砂粒	内: にぶい橙 7.5YR 6/4 外: にぶい褐 7.5YR 6/3	口縁部～ 胴部片	○	
42	SK2	弥生土器	甕	底径 5.1, 残高 3.5	内: ナデ→ヘラケズリ 外: ナデ→オサエ	良好	～3mmの白色砂粒	内: にぶい褐 7.5YR 6/3, 褐灰 7.5YR 5/1 外: にぶい橙 7.5YR 6/4	底部片	○	
43	SK2	土師器	高坏	残高 2.3	内: 回転ナデ→オサエ 外: 回転ナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内: にぶい褐 7.5YR 5/4 外: 橙 5YR 6/6	坏部片	○	円盤充てん法
44	SK2	土製品	白色粘土塊	残長 5.2, 残幅 5.7	—	—	—	灰白 2.5Y 8/1, にぶい黄橙 10YR 6/4	小片	○	
45	SK3	弥生土器	甕	残高 3.4	内: ヨコナデ→ハケ 外: ヨコナデ→ヘラミガキ	良好	～4mmの白色砂粒	内外: 明赤褐 5YR 5/6	口縁部片	○	
46	SK3	弥生土器	甕	復元口径 25.2, 残高 13.7	内: ヨコナデ→オサエ→ヘラミガキ 外: ヨコナデ→ハケ→オサエ	良好	～3mmの白色砂粒	内外: 橙 5YR 6/6, にぶい赤褐 5YR 5/4	口縁部～ 胴部片	○	
47	SK3	弥生土器	甕	復元底径 6.2, 残高 8.0	内: ナデ 外: ナデ→ハケ, オサエ	良好	～2.5mmの白色砂粒	内: 褐灰 10YR 4/1, 橙 5YR 6/6 外: 明赤褐 5YR 5/6, にぶい赤褐 5YR 5/4	底部片	○	
48	SK3	弥生土器	甕	底径 6.9, 残高 7.0	内: ナデ→オサエ 外: ナデ→ハケ	良好	～4mmの白色砂粒	内: にぶい赤褐 5YR 5/4 外: 明赤褐 2.5YR 5/6	底部片	○	
49	SP11	弥生土器	壺	残高 2.9	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	良好	～3mmの白色砂粒	内外: 橙 7.5YR 7/6	突帯部片	○	
50	SP25	土師器	小皿	復元底径 5.7, 残高 1.0	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→回転糸切り	良好	緻密	内外: 橙 7.5YR 7/6	底部片	○	
51	SP16	土師器	坏	復元底径 10.2, 器高 3.0	内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→(板状圧痕)	良好	～5mmの白色砂粒	内外: にぶい褐 7.5YR 5/4, にぶい赤褐 5YR 5/4	1/3程度	○	
52	SP16	瓦器	埴	残高 6.0	内: ロクロナデ→ヘラミガキ 外: ロクロナデ→ヘラミガキ	良好	～2mmの白色砂粒	内: 灰白 10YR 8/2 外: 褐灰 7.5YR 4/1, 灰白 10YR 8/2	口縁部～ 体部片	○	
53	表探	弥生土器	支脚	残高 6.8	内: ヨコナデ→オサエ 外: ヨコナデ→オサエ	良好	～6mmの透白色砂粒	内: 橙 7.5YR 7/6 外: 明黄褐 10YR 7/6	脚部片	○	

表 11 出土遺物観察表

圖 版



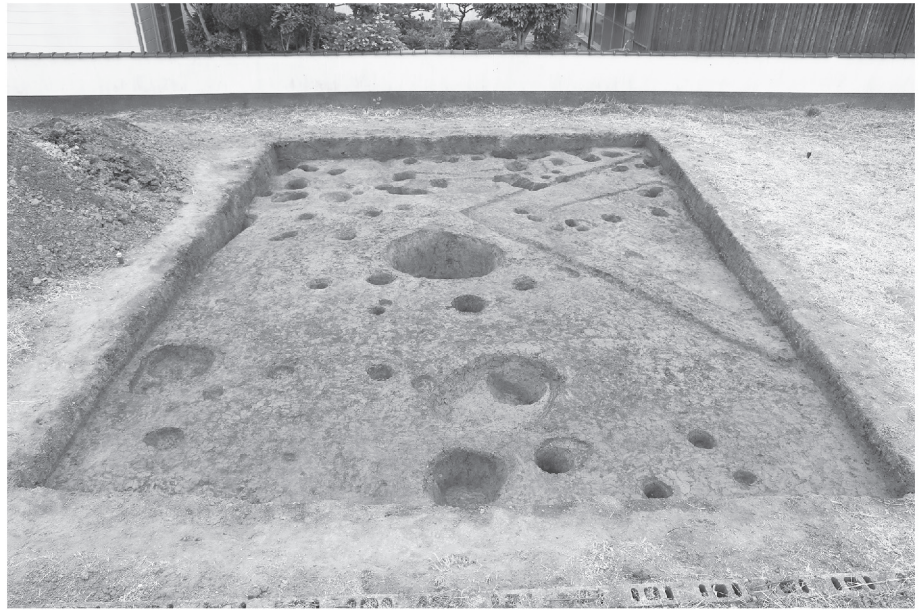
1947年3月11日 米軍撮影(国土地理院ホームページより転載)

延永ヤヨミ園遺跡の位置



1947年3月11日 米軍撮影(国土地理院ホームページより転載)

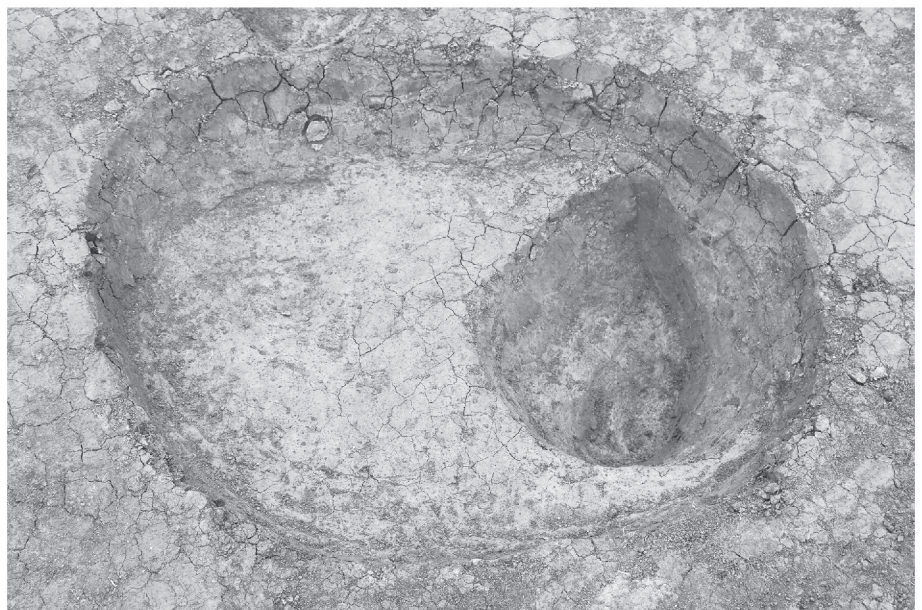
福原長者原遺跡・福富侍島遺跡の位置



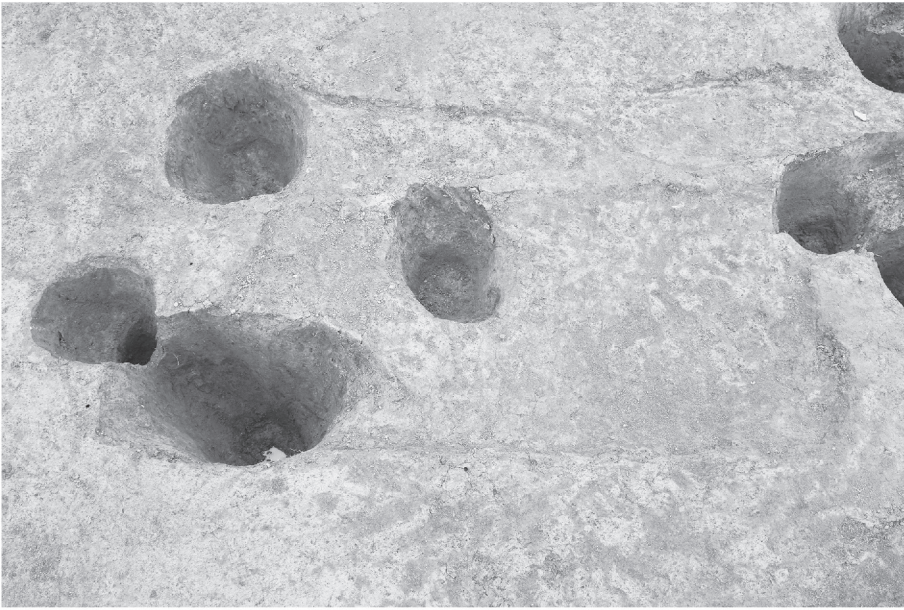
1. 延永ヤヨミ園遺跡
第5次調査全景(西から)



2. S11 完掘状況(北西から)



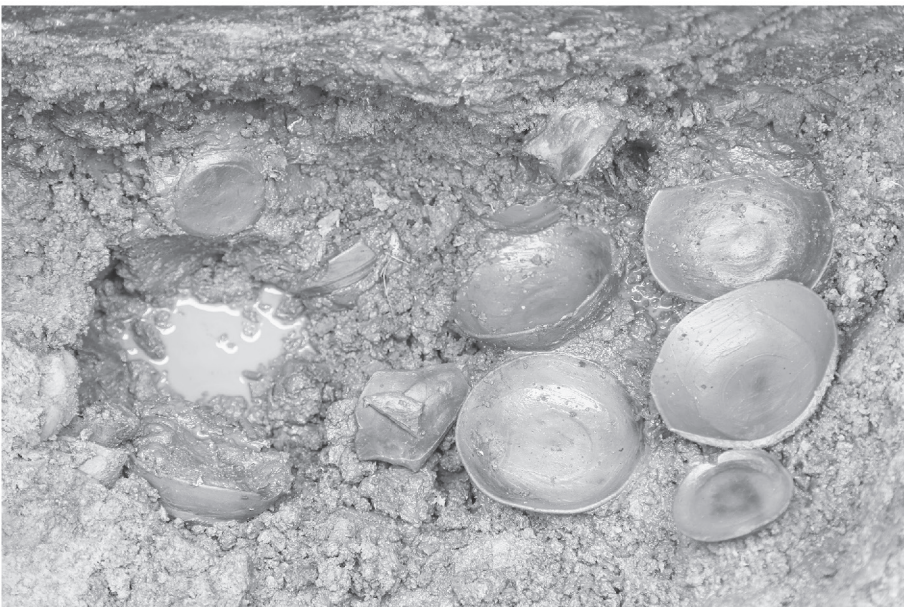
3. SK1 完掘状況(西から)



1. SK2 完掘状況 (西から)



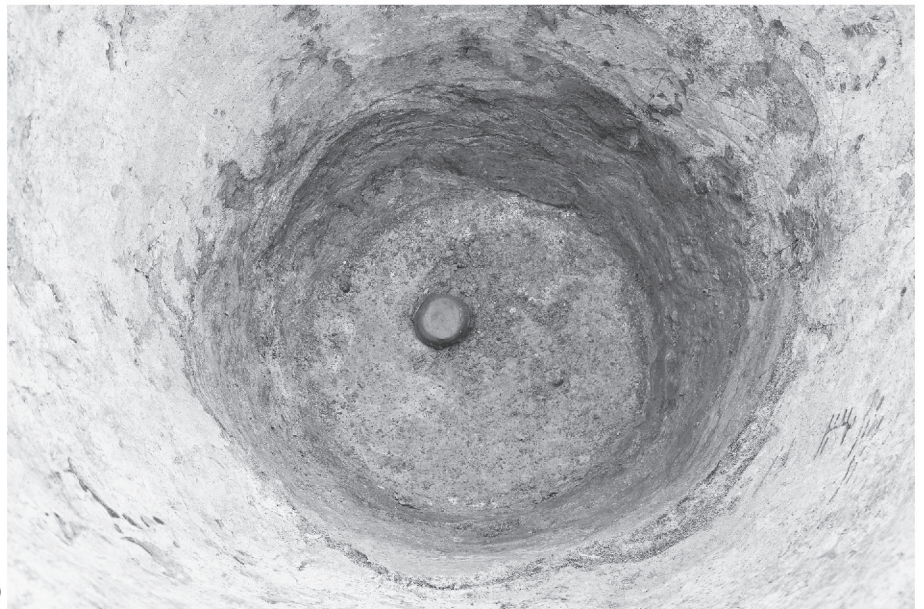
2. SE1 遺物出土状況 1 (南から)



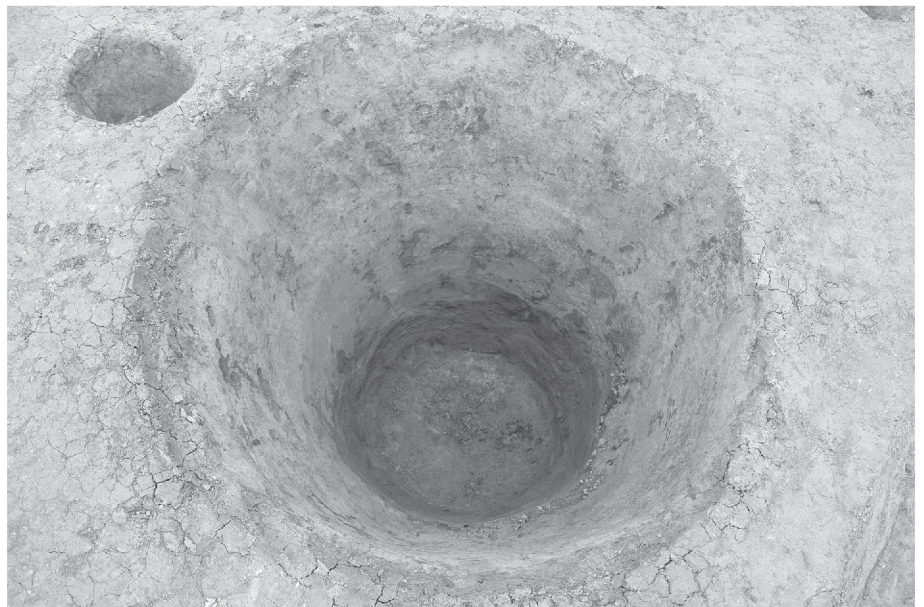
3. SE1 遺物出土状況 2 (南から)



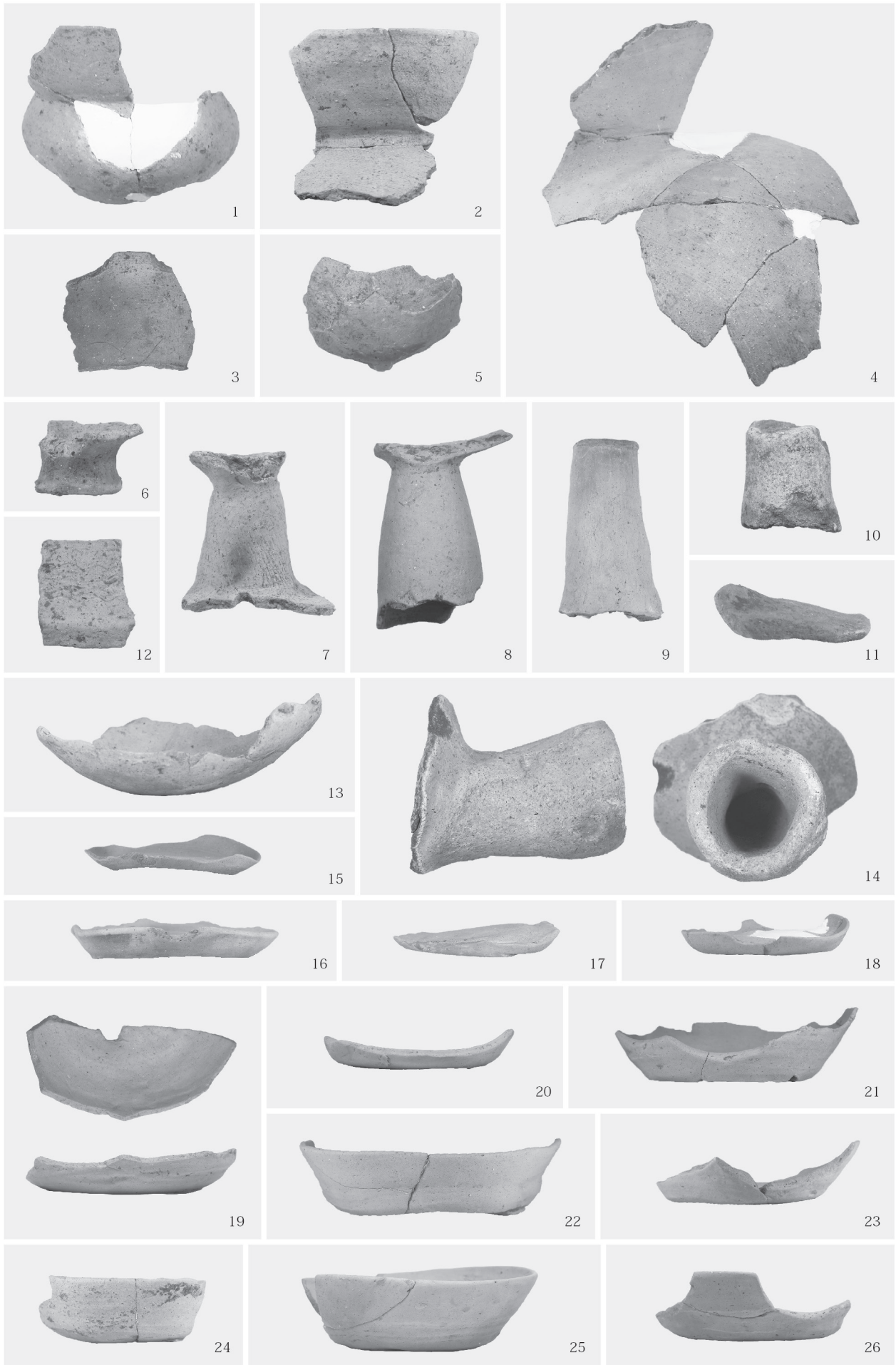
1. SE1 土層観察状況 (南から)



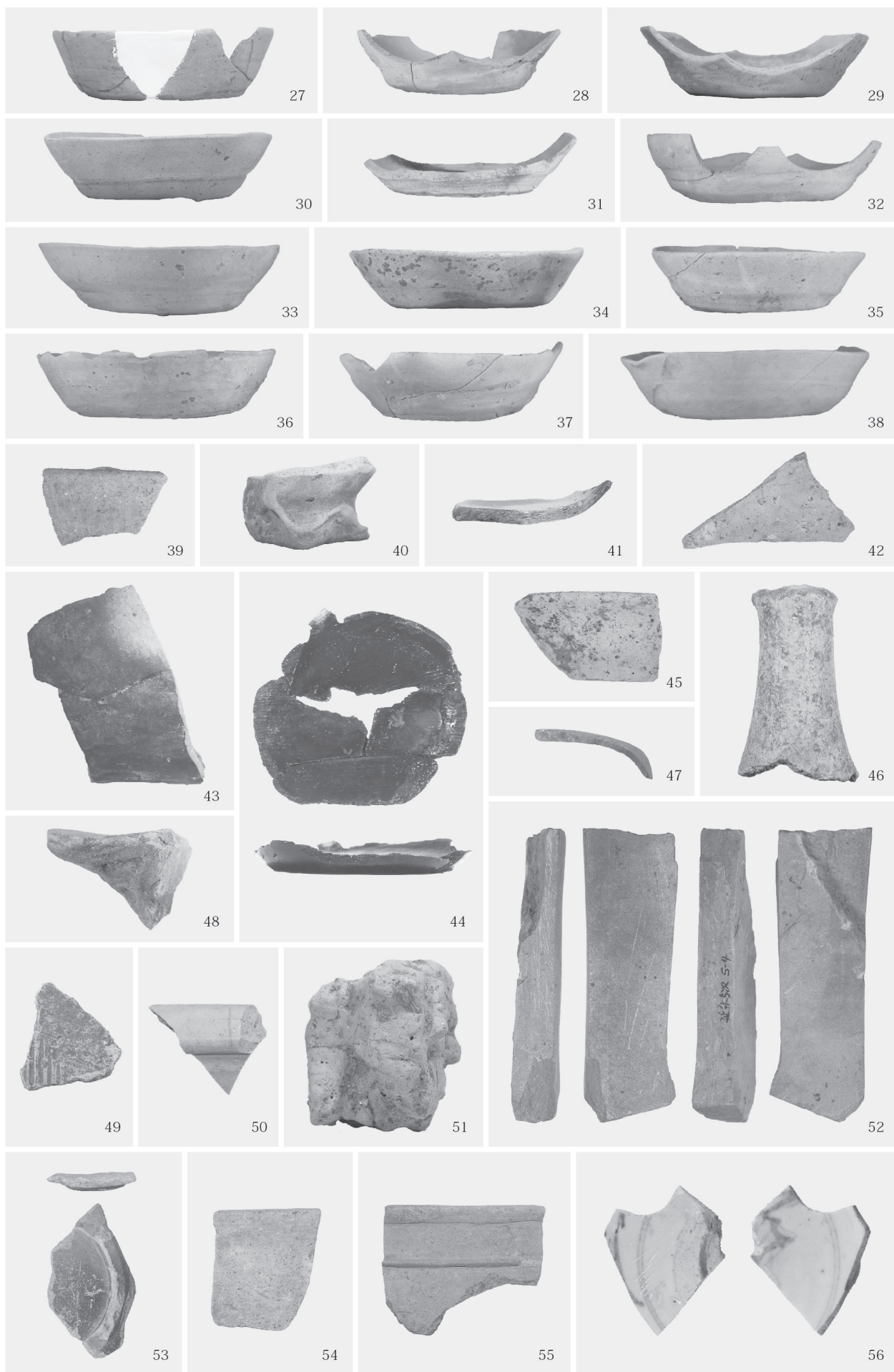
2. SE1 遺物出土状況3 (南から)



3. SE1 完掘状況 (南から)



出土遺物 1



出土遺物 2



1. 延永ヤヨミ園遺跡
第6次調査全景1(北から)



2. 延永ヤヨミ園遺跡
第6次調査全景2(北西から)



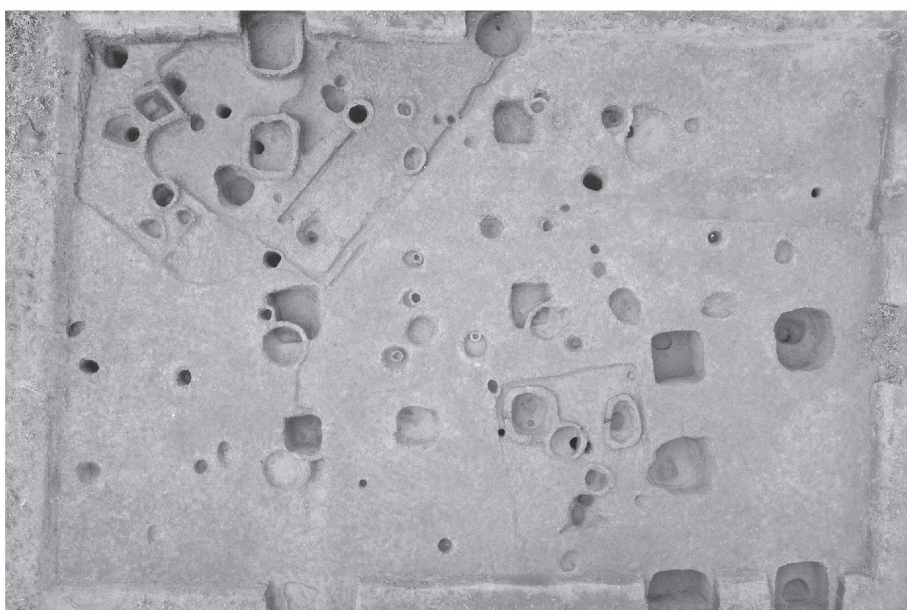
3. 延永ヤヨミ園遺跡
第6次調査全景3(南東から)



1. 延永ヤヨミ園遺跡
第7次調査全景(北東から)



2. 延永ヤヨミ園遺跡
第13次調査全景(北東から)



3. 延永ヤヨミ園遺跡
第13次調査空中写真
(右が北東)



1. 13次調査
SI1、SI9 完掘状況（南から）



2. 13次調査
SI2 完掘状況（南東から）



3. 6次調査
SI3 完掘状況（南東から）



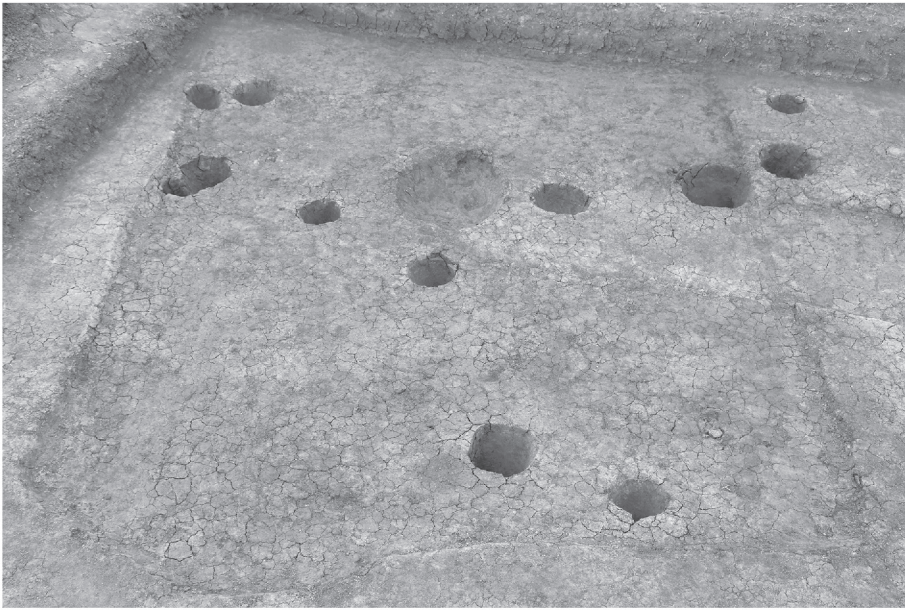
1. 6次調査
SI4 完掘状況 (南東から)



2. 6次調査
SI5 完掘状況 (南西から)



3. 7次調査
SI6 完掘状況 (南東から)



1. 7次調査
SI7 完掘状況（北西から）



2. 7次調査
SI8 完掘状況（東から）



3. 7次調査
SI8 カマド検出状況（南から）

1. 13次調査
SB1 完掘状況（北西から）



2. 6次調査
SB2 完掘状況（北東から）



3. 6次調査
SB3 完掘状況（南東から）

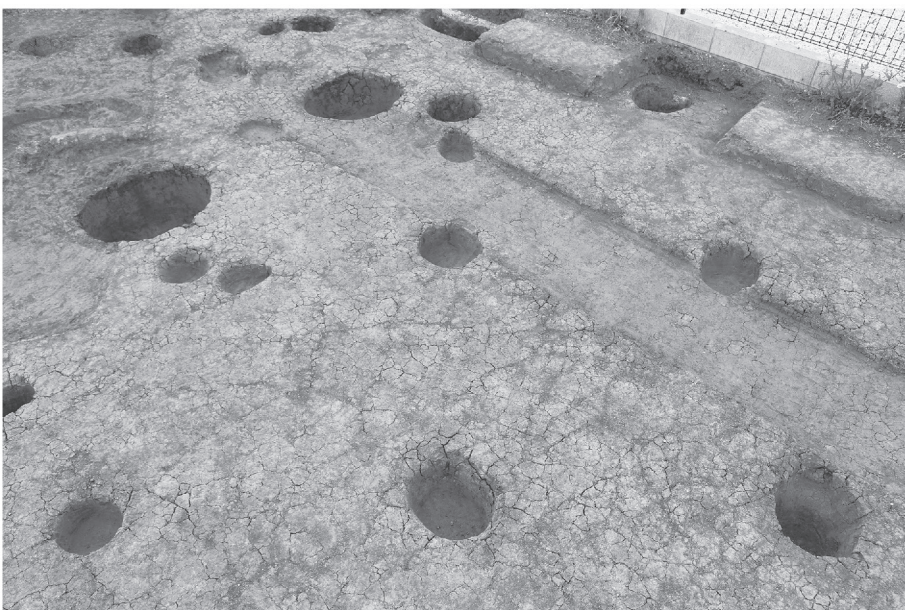




1. 6次調査
SB4 完掘状況（北西から）



2. 7次調査
SB4 完掘状況（南東から）



3. 7次調査
SB5 完掘状況（南東から）

1. 7次調査
SB6 完掘状況（北東から）



2. 13次調査
SB7 完掘状況（南東から）



3. 6次調査
SB8 完掘状況（南西から）

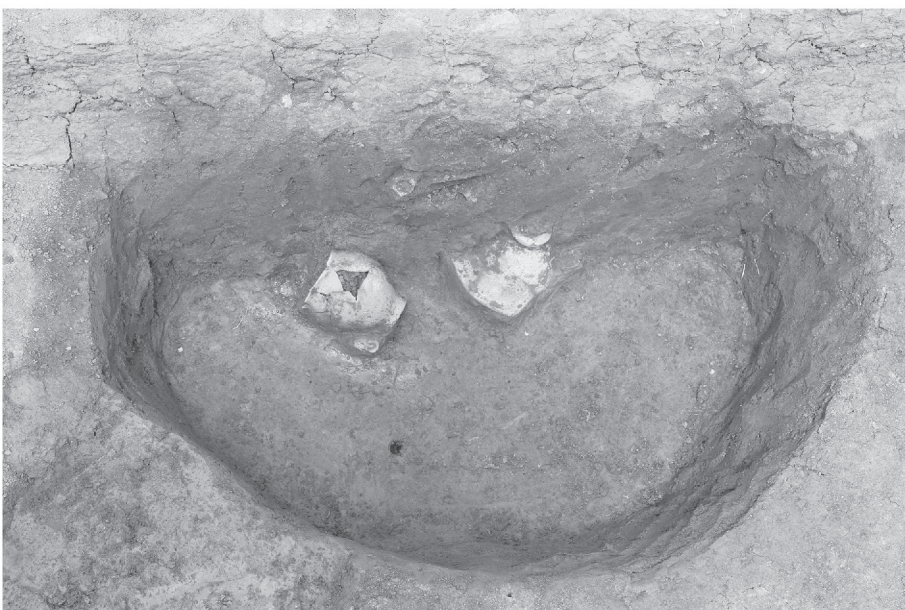




1. 13次調査
SB8 完掘状況 (南西から)

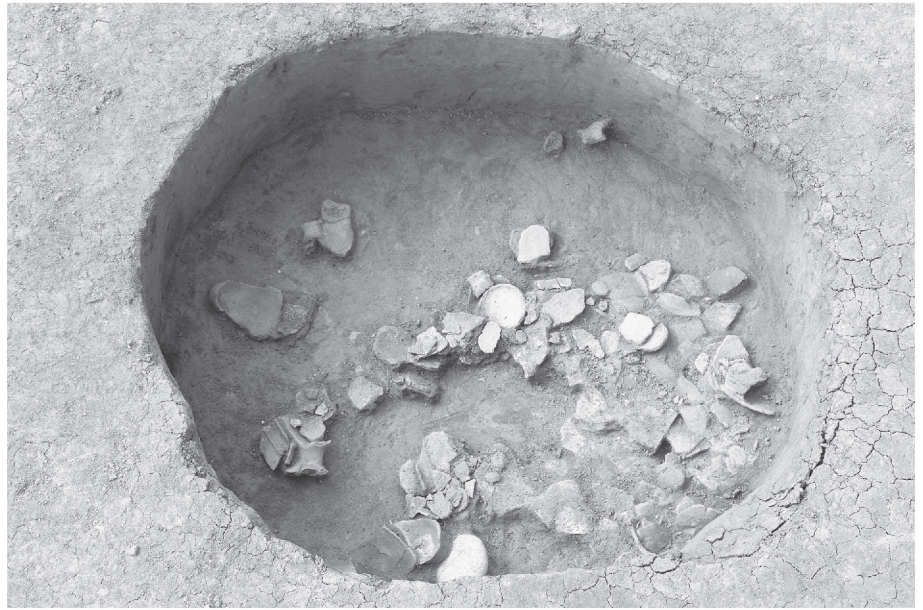


2. 6次調査
SB9 完掘状況 (南西から)

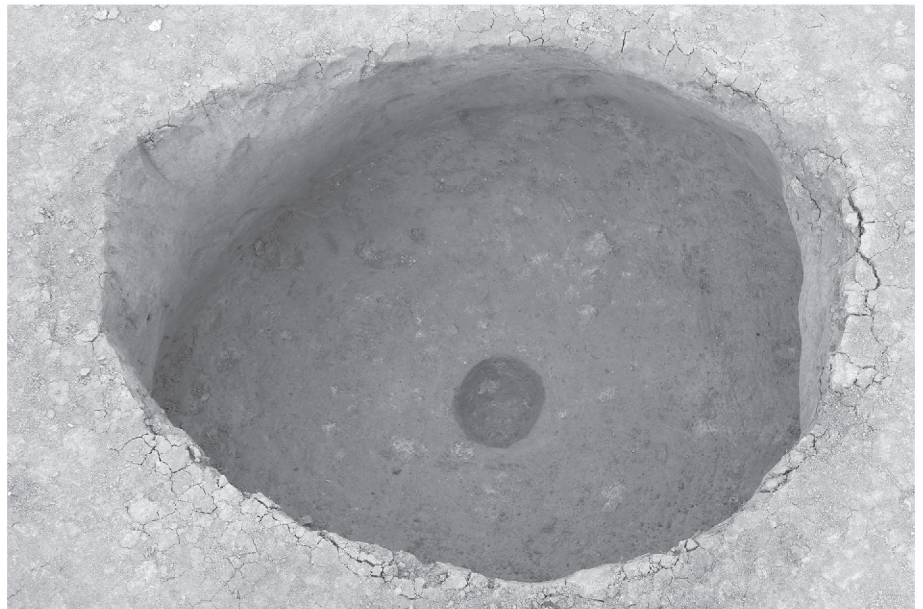


3. 6次調査
SK1 遺物出土状況 (南東から)

1. 6次調査
SK2 遺物出土状況
(南東から)



2. 6次調査
SK3 完掘状況 (南東から)



3. 7次調査
SK4 完掘状況 (南西から)





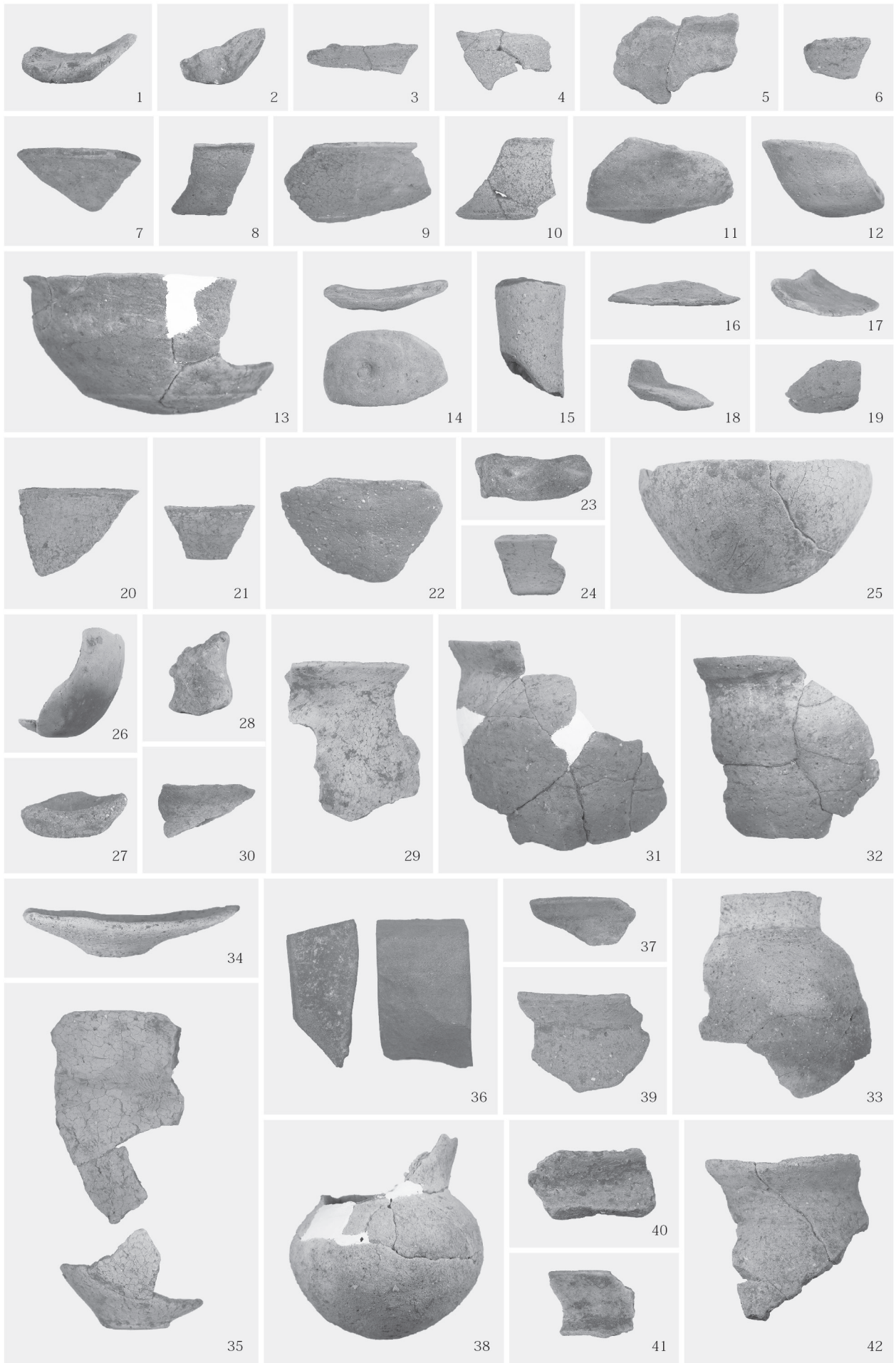
1. 7次調査
SK5 遺物出土状況 (南東から)



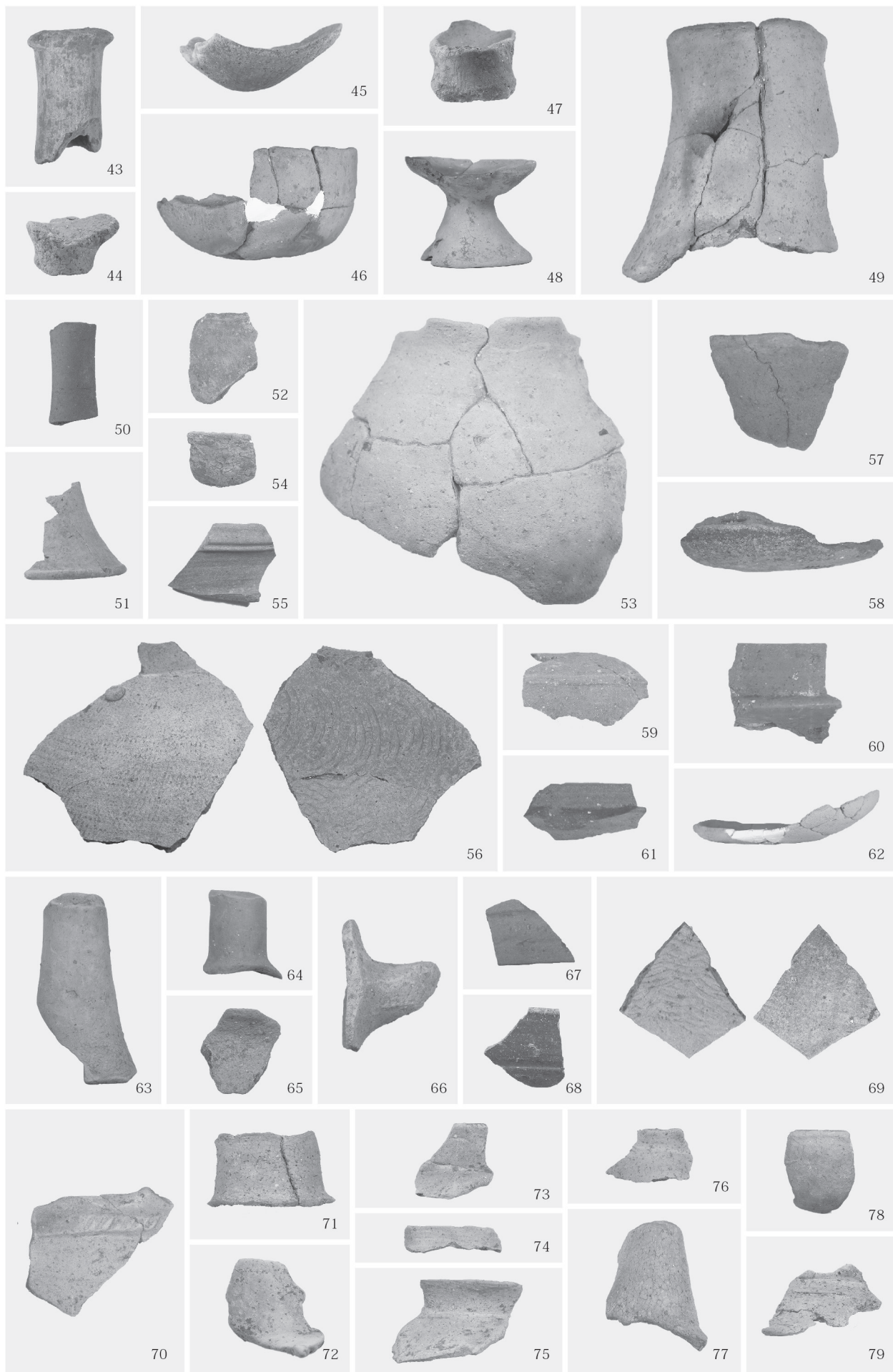
2. 7次調査
SK6 完掘状況 (北西から)



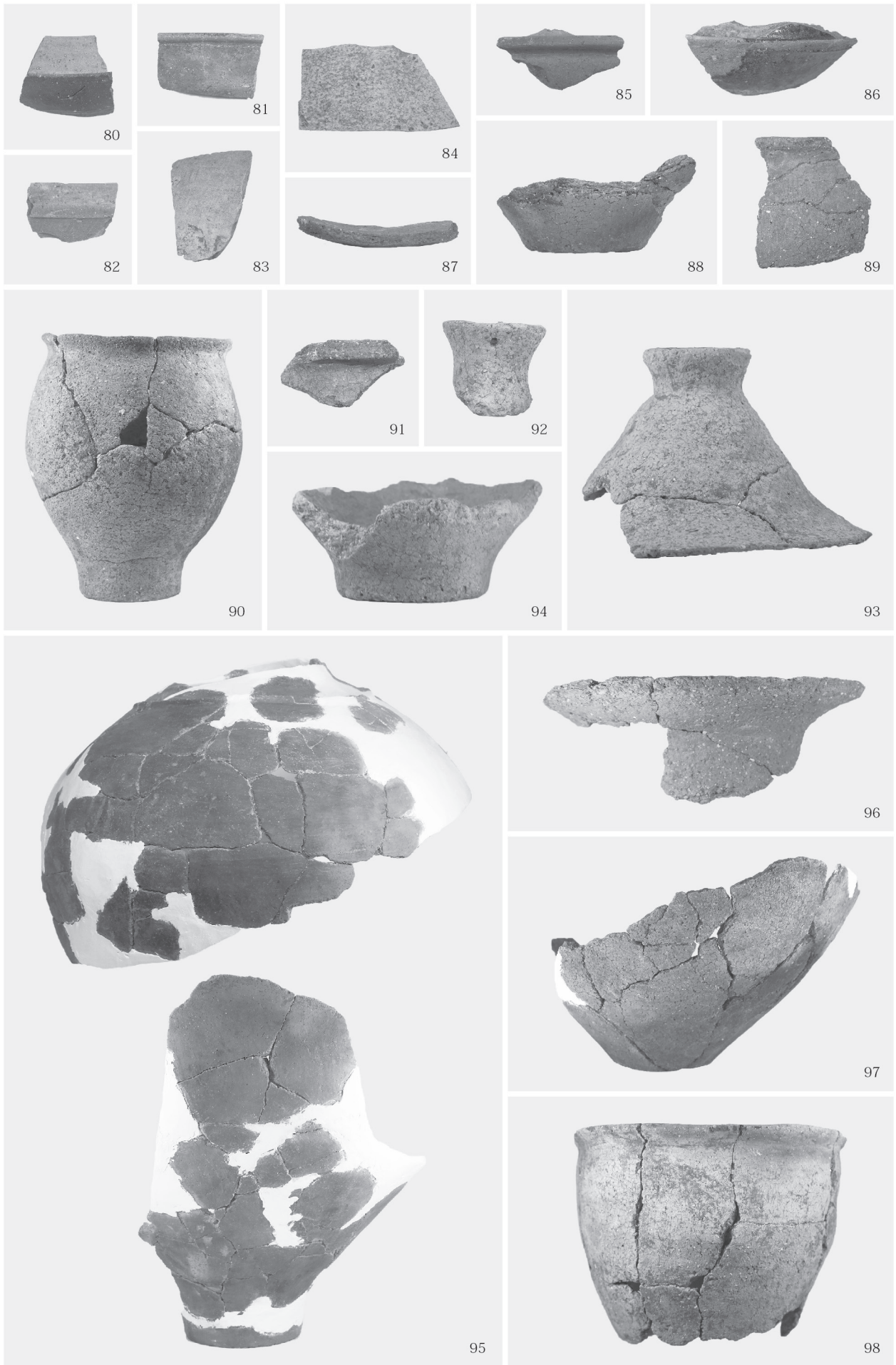
3. 7次調査
SK7 完掘状況 (北東から)



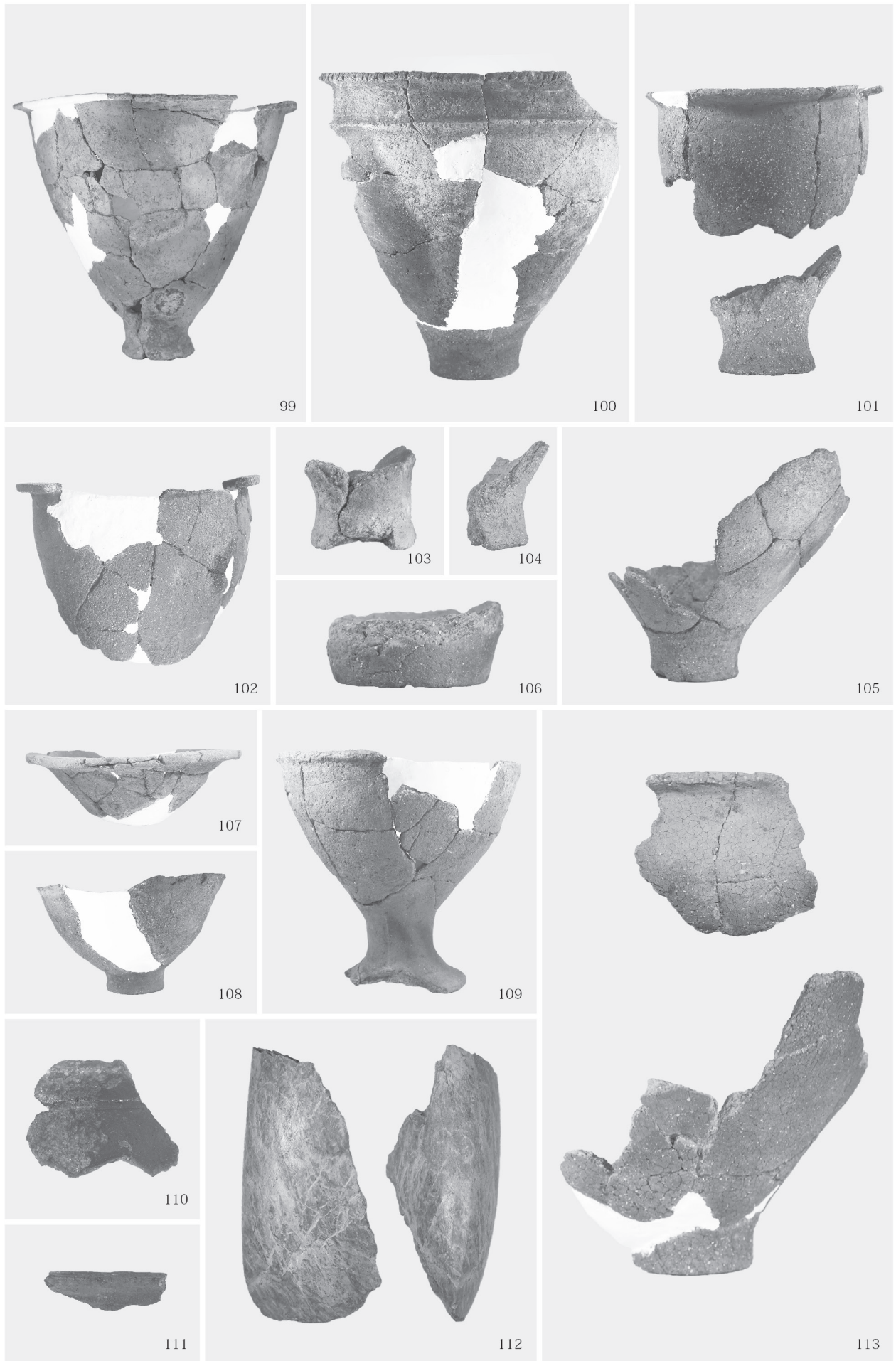
出土遺物 3



出土遺物 4



出土遺物 5



出土遺物 6



出土遺物 7



1. 福原長者原遺跡
第 11 次調査全景（南西から）



2. SB1 完掘状況（北から）



3. SK 1 遺物出土状況
（北東から）



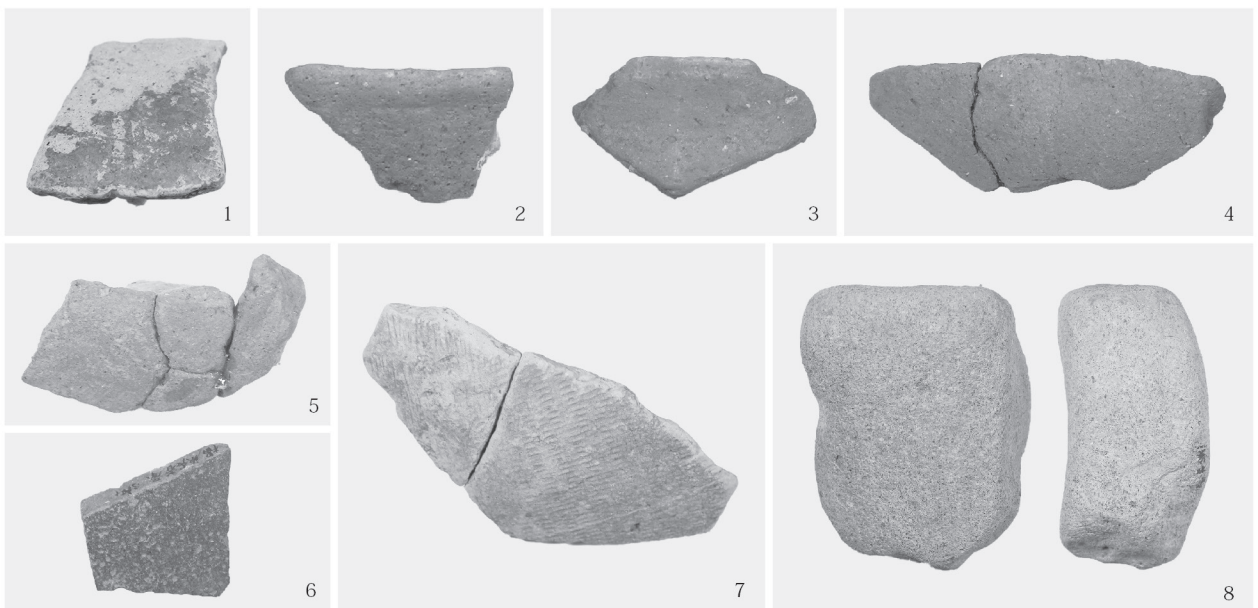
1. SK 2 完掘状況 (南東から)



2. SD1 完掘状況 (南東から)
写真左



3. SD2 完掘状況 (南東から)
写真右



出土遺物 8



1. 福富侍島遺跡全景
(北東から)



2. SI1 土層観察状況 (北東から)

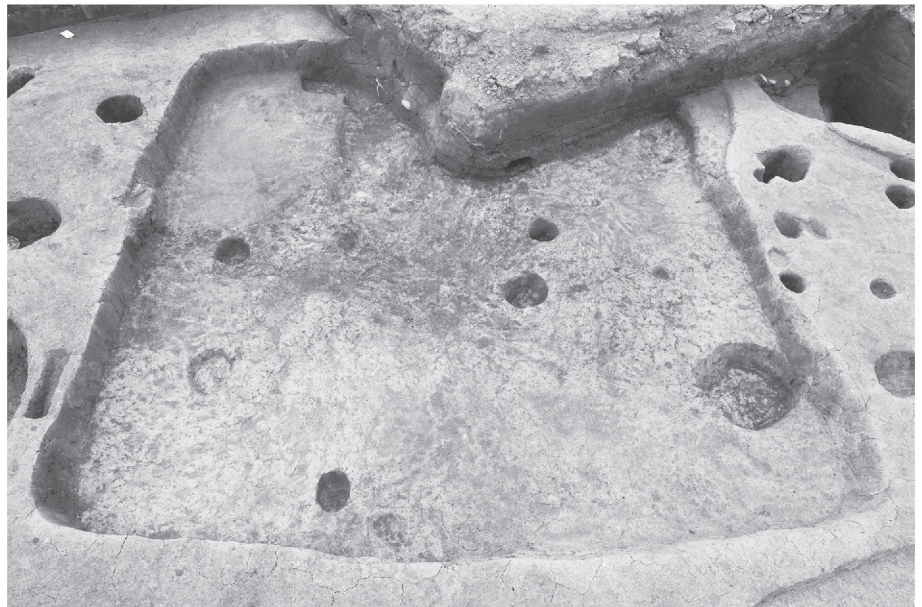


3. SI1 土層観察状況 (南東から)

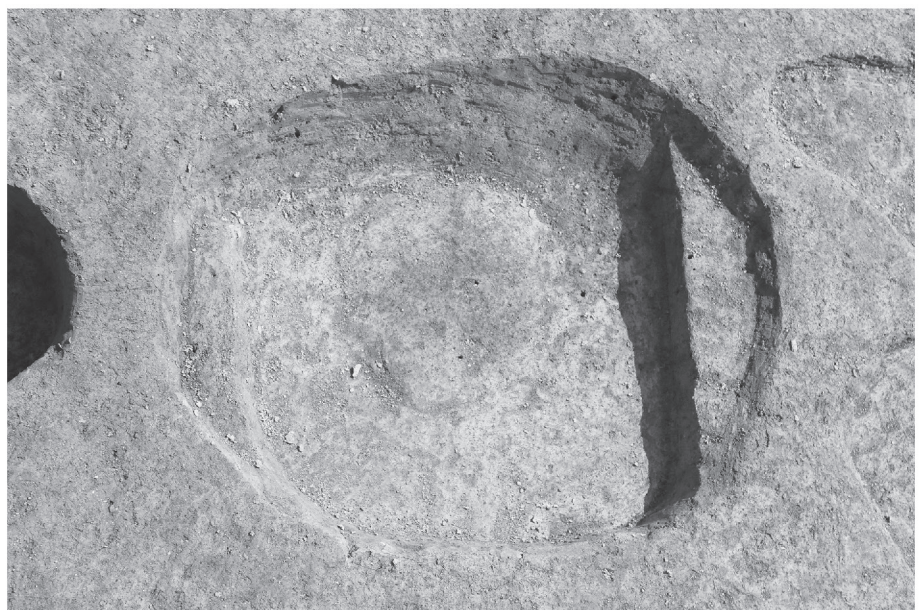
1. SI1 遺物出土状況
(北東から)



2. SI1 完掘状況 (北東から)



3. SK1 完掘状況 (西から)

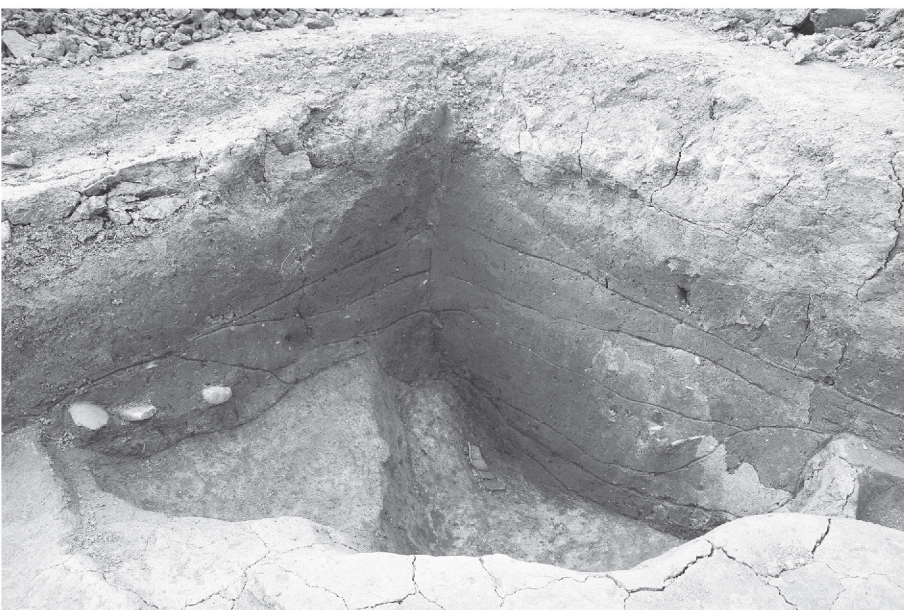




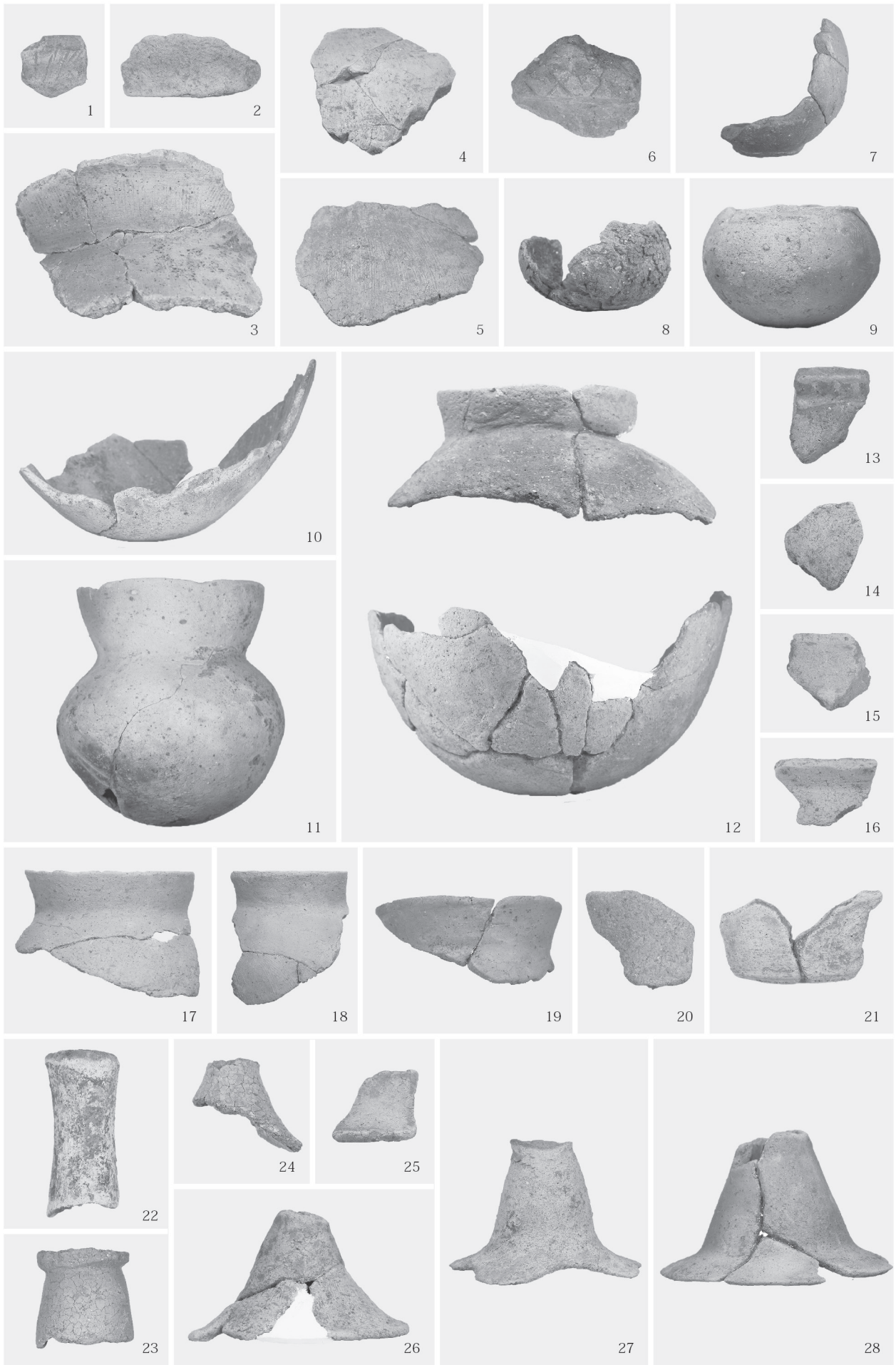
1. SK2、SK3 完掘状況（北から）



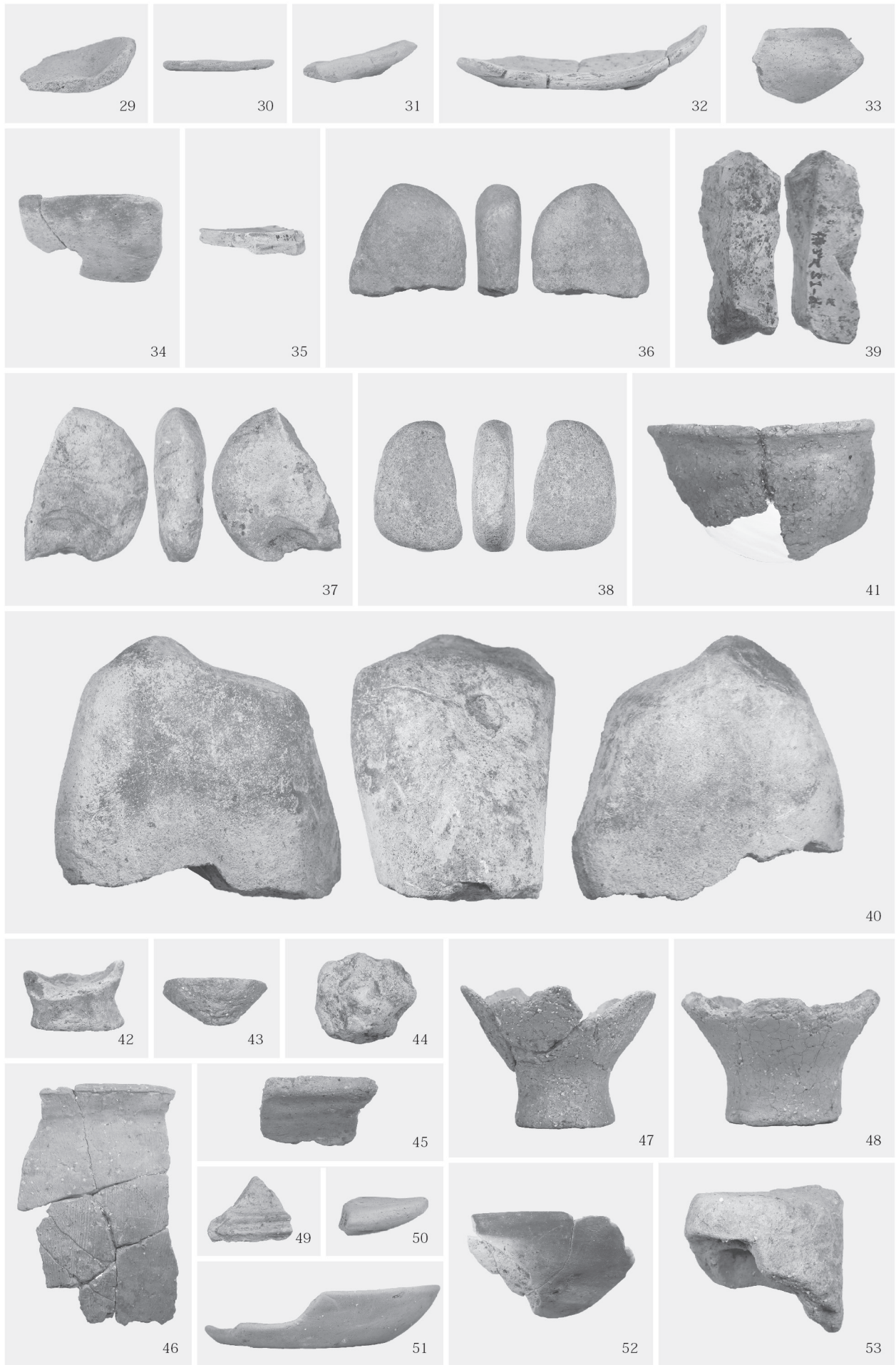
2. SK3 遺物出土状況（北から）



3. SK2、SK3 土層観察状況
（北東から）



出土遺物 9



出土遺物 10

報告書抄録

ふりがな	のぶながやよみそのいせき2 ふくぼるちようじゃぼるいせき2 ふくどみさむらいじまいせき
書名	延永ヤヨミ園遺跡2 福原長者原遺跡2 福富侍島遺跡
副書名	
シリーズ名	行橋市文化財調査報告書
シリーズ番号	第72集
編著者名	笠置拓也
編集機関	行橋市教育委員会
所在地	〒824-8601 福岡県行橋市中央一丁目1番1号
発行年月日	2024年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
のぶながやよみそのいせき 延永ヤヨミ園遺跡 第5次調査	ふくおかけんゆくほししおおあざよくに 福岡県行橋市大字吉国 564番地	402133	14115010	33°43'44"	130°56'41"	20170530～ 20170609	71	個人住宅建設
のぶながやよみそのいせき 延永ヤヨミ園遺跡 第6次調査	ふくおかけんゆくほししおおあざよくに 福岡県行橋市大字吉国 533番地7・8・1の一部・ 3の一部	402133	14115010	33°43'49"	130°56'44"	20170726～ 20170908	345	個人住宅建設
のぶながやよみそのいせき 延永ヤヨミ園遺跡 第7次調査	ふくおかけんゆくほししおおあざよくに 福岡県行橋市大字吉国 533番地3	402133	14115010	33°43'49"	130°56'44"	20190408～ 20190428	180	個人住宅建設
のぶながやよみそのいせき 延永ヤヨミ園遺跡 第13次調査	ふくおかけんゆくほししおおあざよくに 福岡県行橋市大字吉国 533番地1	402133	14115010	33°43'50"	130°56'43"	20220527～ 20220620	117	個人住宅建設
ふくぼるちようじゃぼるいせき 福原長者原遺跡 第11次調査	ふくおかけんゆくほししおあざよくに 福岡県行橋市南泉一丁 目140番5・145番9・ 10・19・23	402133	14075002	33°42'7"	130°58'23"	20200807～ 20200826	88	個人住宅建設
ふくどみさむらいじまいせき 福富侍島遺跡	ふくおかけんゆくほししおあざよくに 福岡県行橋市西泉七丁 目1108番6	402133	14073001	33°42'34"	130°58'2"	20210209～ 20210309	72	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
延永ヤヨミ園遺跡 第5次調査	集落	古墳時代 中世	竪穴建物 土坑 井戸	土師器、須恵器、白磁、 瓦質土器、磁器、漆器	井戸より漆器、把手らしき土師器出土
延永ヤヨミ園遺跡 第6次調査	集落 官衙	弥生時代 古墳時代 古代	貯蔵穴 竪穴建物 掘立柱建物	弥生土器、土師器、 須恵器、石器	大型掘立柱建物
延永ヤヨミ園遺跡 第7次調査	集落 官衙	弥生時代 古墳時代 古代 中世	貯蔵穴 竪穴建物 掘立柱建物 土坑	弥生土器、土師器、 須恵器、青磁、石器	大型掘立柱建物
延永ヤヨミ園遺跡 第13次調査	集落 官衙	古墳時代 古代	竪穴建物 掘立柱建物	土師器、須恵器	大型掘立柱建物
福原長者原遺跡 第11次調査	集落	古墳時代	掘立柱建物 土坑 溝	土師器、須恵器	
福富侍島遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴建物 土坑	弥生土器、土師器、石器	竪穴建物より大型砥石出土

遺跡名	概要
延永ヤヨミ園遺跡 第5次調査	古墳時代前期、中世の遺構を確認した。古墳時代には竪穴建物が1基、中世には井戸が1基ある。井戸から土師器環や小皿が多数出土しており、床面では土師器環が1点伏せられた状態で出土した。東九州自動車道建設に先立つ発掘調査により調査地周辺には弥生時代終末～古墳時代前期の集落跡および中世の屋敷地が展開していることが分かっており、これらの一端を形成するものと考えられる。
延永ヤヨミ園遺跡 第6・7・13次調査	弥生時代中期、古墳時代後期、古代、中世の遺構を確認した。弥生時代の遺構は貯蔵穴である。延永ヤヨミ園遺跡では弥生時代終末～古墳時代前期および後期の集落跡が確認されているが、弥生時代中期の集落跡も展開している可能性が高まった。古墳時代には竪穴建物がある。古墳時代前期の遺物を多数確認しているが造り付けカマドを備えるものや把手付腕の把手とおもわれる遺物などから後期と考えられる。古代には隅丸方形の柱穴をもつ大型掘立柱建物がある。東九州自動車道等の発掘調査で確認された大型掘立柱建物の主軸と平行または直交である。『類聚三大格』にみえる古代の湊「草野津」関連施設の一角であると考えられる。7世紀後半以降か。中世は青磁片が出土した土坑1基のみだが、周辺に中世の遺構が展開している可能性を示す。
福原長者原遺跡 第11次調査	国指定史跡「福原長者原官衙遺跡」の北側に展開する遺跡である。掘立柱建物跡や土坑などを確認したが主軸の方位が福原長者原官衙遺跡とは異なるため、同一時期ではないと考えられる。遺物の出土は少ないが、古墳時代後期の集落跡と考えられる。
福富侍島遺跡	福富侍島遺跡は今川右岸にある丘陵上に展開する遺跡であり、周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、本格的な調査を実施したのは今回が初である。調査の結果、弥生時代中期および古墳時代前期の集落跡を確認した。古墳時代の竪穴建物から大型砥石が出土しており、大型鉄器生産との関りが想定できる。また、明確な遺構は無いが中世の遺物も確認している。

延永ヤヨミ園遺跡 2
福原長者原遺跡 2
福富侍島遺跡

行橋市文化財調査報告書 第72集

著作権所有 福岡県行橋市中央一丁目1番1号
発行 行橋市教育委員会

印刷 福岡県行橋市中央三丁目3番10号
株式会社 京都印刷

